

人文科学研究

—第 17 号—

目次

◆2019 年度修了者修士論文題目と要旨.....	1
◆2019 年度修了者修士論文	
A Study on V+N Phrasal Expressions in English 藤森 真由弥(FUJIMORI Mayumi).....	8
マックス・フリッシュ研究—フリッシュによる啓蒙の偶像化批判— 川合 正紀.....	35
◆院生会組織	90
◆2019 年度院生会活動記.....	91
◆投稿規定.....	93

「中世における役行者伝承の研究」

中畑ひかり〔言語文化専攻〕

〔要旨〕

本論は中世、特に鎌倉時代に、どのような役行者伝承が生まれ、どのような場所や信仰と結びつき展開したのか、その過程や背景を明らかにしようとするものである。

役行者は修験道の開祖とされた人物で、役行者に関する伝承は数多く作られた。役行者に関する先行研究は多いが、伝承が作られた時代背景や文献の性質を考慮し、役行者伝承という枠組みで、その全体像を明らかにした研究は少ない。役行者伝承の変遷の大きな流れを追った研究は見られるものの、個別の役行者伝承をそれぞれ検討し、位置づけを行った研究は見られない。そのため、本論では書誌情報を踏まえた上で、個別の役行者伝について考察をし、その位置づけを行い、役行者伝が大きく展開する鎌倉時代の伝承の全体像を明らかにすることを試みた。

第一章第三節においては平安時代の役行者伝の様相を確認し、同章第四節では、中世の役行者伝を収める文献の書誌情報を確認した。それらを踏まえた上で、第二章において『古今著聞集』、『私聚百因縁集』、『沙石集』に見られる三つの役行者伝の検証を行った。第三章では、中世に至り見られるようになる役行者の蔵王権現感得譚に注目し、感得譚がどのように生まれ、変遷していったのか、その過程と背景について考察を行った。

『私聚百因縁集』などの記述から、役行者は13世紀頃には、山伏の祖として位置づけられるようになったと見られる。大峯七生譚で、役行者が持つ法具、誦持した経が具体的に記されるように、実際の山伏の行や姿を、役行者に重ねる伝承が生み出されたことが明らかになった。また、役行者出生の際の異相が描かれるなど、役行者の聖人性を強調する伝承も見られるようになる。山伏の祖とされたことや、聖人性が強調されたことにより、役行者は権威として認識されるようになったと考えられ、箕面寺や当麻寺は寺伝に役行者の存在を組み込み、寺院建立の所以を役行者に求めた。そうして新たな伝承が創り出される際には、各寺院や霊山の既存の信仰と役行者が結びつけられたと見られ、金峯山の蔵王権現信仰と役行者が結びつき、蔵王権現感得譚が生まれ、箕面寺の龍樹信仰と役行者が結びつき、箕面での龍樹からの受法譚が生まれたと考えられる。また、中世の役行者伝では、山伏の祖となったことにより、行者としての側面が強調されていくが、一方で、千基石塔供養譚のような役行者の父母への孝行に関わる伝承も記されるようになり、父母報恩という側面も注目されていたことを指摘した。

“A Study on V+N Phrasal Expressions in English”

藤森 真由弥 (Fujimori Mayumi) [言語文化専攻]

〔要旨〕

本論文は、英語の動詞＋名詞 (V+N 句) について考察を行い、『新編英和活用大辞典』を用いて作った独自のデータベースの英語教育への応用を提唱することを主旨としている。日本人の生徒は英語を少なくとも 6 年または小学校英語教育特区校も含めるならば 12 年間学習しているが、流暢に書き話すレベルには達していない現実がある。本稿は、英語の 4 技能(「聞く (listening)」、「読む(reading)」、「話す (speaking)」、「書く (writing)」のうち、生徒の「書く」という技能向上の一助になることを目的に文の中心的役割を果たす品詞の一つである動詞、特に他動詞(V+N 句)に焦点をあてて研究する。

本研究の手順は、第一段階として 38 万例を含む『英和活用大辞典』(The Kenkyusha Dictionary of English Collocations) を用いて V+N 句のデータを収集する。当該辞典に収録された、単一名詞句を目的部を取る他動詞句に関する英語の標準コロケーションを研究素材として限定し、「他動詞＋目的語」という構文表現について分析するためのデータベースを構築する。第二段階として第一段階で直接目的語としての名詞の数が多い動詞について、OED の定義を参照しながらそれらの多義性を検証し、理論的説明を行う。そして第三段階で教育への応用について述べ、まとめとする。

V+N 構造の独自のデータベースを作った結果、『英和活用大辞典』で確認できた他動詞＋単一名詞句という構造の、N 句を構成する名詞のうち頭文字 A から Z を持つ 65,112 の「他動詞＋単一名詞句」コロケーションを動詞ごとに分類し、共通する動詞を持つ名詞の数の総計に基づいた頻度順に **have, give, make, take, get** の 5 つの動詞を挙げることができた。この 5 つの動詞とすべて共起する名詞のうち、**job** と **life** について意味の差異について考察した。また、共起する語数が最も多かった動詞 **have** について考察する。田中・川出 1989 で扱われた **have a long walk** という句を例にとり、V+N 句中の形容詞の意味の解釈についてコーパス GloWbE (Global Web-Based English Corpus) を用いてフレーム理論に基づいた批判的検証を行った。

データベースを利用した中学・高校生の授業で活かせる活用例を挙げ、様々な名詞が目的語として動詞の後につくと意味が異なることを再確認した。動詞の意味で日本語訳が決まるのではなく、どのような名詞が目的語にくるかによっておおよその訳が決まるともいえる。なぜならば、目的語の名詞は動詞だけよりも＋名詞の分だけ情報を与えており動詞の訳に影響を与えていると言えるからである。後ろにくるある動詞にどのような名詞が目的語として使われているのかを今回「V+N 句」という形で分析したが、日本語と英語で想起される名詞が必ずしも一致しないことも確認できる。これを利用して、和文英訳をする際に名詞から動詞を想起させる、あるいは逆に動詞から名詞を想起させることで、英語の

発信力増強への一助になる。**have** につく **NP** の実例を分析することで、フレーム理論を応用したスクリプトとシナリオをコンテキストによって判断し、**collocation** の成り立ちを教師が理解し教授法に利用することで、できる可能性を広げる。英語教育において、発想の違いを理解する必要がある。書く力をつける方法の一つとして、その理解を深めネイティブスピーカーの英語使用を理解するとともに正しい言語解釈に触れ、このデータベースを今後の英語教育に役立てたい。

Abstract

This paper focuses on the expression of the V + N phrase in English, aiming at improving English writing skills of Japanese (junior) high-school students, who are said to be particularly weak in their English education. Among the various types of the V+ N phrases, this paper will particularly deal with the type with the light verbs. The meanings of a light verb phrase are mainly governed by its noun instead of its verb. Knowing a large number of words will always be advantageous when communicating in English. If you know a lot of nouns that co-occur with basic verbs like light verbs, it can be said that it is also advantageous when writing. The Kenkyusha Dictionary of English Collocations, suggested that “the primary purpose of editing was to use it when writing English” a database of expressions of V + N phrases is created.

マックス・フリッシュ研究

ーフリッシュによる啓蒙の偶像化批判ー

川合 正紀〔言語文化専攻〕

〔要旨〕

マックス・フリッシュ **Max Frisch (1911-1991)** は、第二次世界大戦の戦中戦後を通じてドイツ語圏のスイス人として、情動的にゲルマン民族の責任を共有しつつ、ナチズムに距離を置いた批判をおこなった。ナチズムをもたらしたドイツ民族の精神を、フランクフルト学派のように野蛮と啓蒙の関係を弁証法によって理論化するのではなく、平凡な市民の心の中における啓蒙自体の変質を問題とし、「分別ある人間を作るべき啓蒙の倒錯 (**die Perversion der Aufklärung, die uns mündig machen soll**) を描き警告し続けた。その啓蒙観は、現代人の精神が創り出す意識の中の偶像 (**Bildnis**) に仮託されている。フリッシュの多くの講演、著作の裡には、神の偶像化の否定から始まった啓蒙の精神が、現代においては人間の偶像を創り出していることへの批判が伏流している。

フリッシュの作家活動は、第二次世界大戦を挟んでほぼ 50 年間に及ぶが、終戦直後の作品においては、ナチズムへの批判を念頭に置いた人間の未成人性 (**Unmündigkeit**) すなわち非啓蒙性の告発と、そこからの脱却への希望が語られている。しかしこうした啓蒙的理性に対する信頼は 1947 年に発表された **Chinesische Mauer**『万里の長城』において深い懐疑へと転じている。その後の主要作品、**Homo faber**『ホモ・ファーバー』(1957)、**Der Mensch erscheint im Holozän**『人間は完新世に生まれた』(1979)、**Blaubart**『青髭』(1981/82) を初めとし、多くの言説の底には常に啓蒙に対する懐疑と批判が伏流している。本研究では、フリッシュの小説のテキストを意味と文体の両面から分析し、啓蒙の変質としての偶像化に対する批判の文学的表象について論考する。

第 1 章「序論」ではフリッシュの啓蒙観、偶像観について概観する。第 2 章「啓蒙に対する懐疑」では、フリッシュにとって、「啓蒙の精神」に対する見方が大きく変わる転機となる作品が『万里の長城』であるとの仮説のもとに、作品の構造を通して提起されている啓蒙の精神の今日的な問題について論考する。第 3 章「啓蒙と科学技術」では、啓蒙の最先端を行く科学的知識の持ち主である主人公が、悲劇の真相を科学的に語ろうとする「報告」の形式の限界を、『ホモ・ファーバー』のテキストにおいて主として文体面から考察する。第 4 章「啓蒙の啓蒙」では、『人間は完新世に生まれた』において、主人公と語り手の両者の啓蒙的精神が交絡し硬直する様相を論考する。第 5 章「啓蒙の偶像化」では、現代における市民の啓蒙的視線が形成する人間の偶像化と、その結末の悲劇性について『青髭』のテキストによって読み解く。以上の諸作品のテキスト解釈を踏まえて、第 6 章においては、フリッシュの生涯の思索の集大成とも言える 1985 年のソロツルンでの講演『啓蒙の行きつく先に金の仔牛がある』に基づき、人間自身の偶像を創り出す現代の啓蒙の危機に対するフリッシュ

の警告と、そこから脱却するための新たな展望を読み解く。

フリッシュは、現代の啓蒙が齎す偶像の桎梏を解放できるのは愛であることを、作家活動の初期段階から確信していた。「愛 (Liebe)」は、ソロツルンの講演の最後に強調された「友愛 (Freundschaft)」の原点であり、精神的価値観を共有する者同志の友情である。フリッシュは、偶像化に堕ちいった現代の啓蒙を否定した後に残る友愛 (Freundschaft) が例外的に価値あるものとしたが、それは愛 (Liebe) が、あらゆる偶像からの解放を可能とするとの信念からである。フリッシュは、ソロツルンの講演において明確に啓蒙の偶像化を批判し、その克服を友愛 (Freundschaft) に託した。そこに至るフリッシュの文学作品においては、啓蒙批判の諸相は、愛または友愛の諸相と常に対となっている。

Zu Max Frischs Werken Seine Kritik an Aufklärung und Bildnis

Masanori Kawai

Max Frisch (1911-1991), in Zürich geborener Schriftsteller, kritisierte Nazismus während und nach dem Zweiten Weltkrieg, obwohl er ein Gefühl von gemeinsamer Verantwortung als ein Mitglieder des germanischen Volks. Er zeigte nicht Verständnis wie die Frankfurter Schule, für die dialektische Theoretisierung von Zusammenhang zwischen der Barbarei und Aufklärung, die den Deutschen Nazismus eingeführt haben sollt, sondern handelte sich er um die Perversion der modernen Aufklärung in durchschnittlichen Menschen. Seine Kritik aus letztem Jahrhundert, dass die moderne Aufklärung erstarrte menschlichen Bildnis macht, ist von wichtiger Bedeutung für heutige Gesellschaft, wo Informationstechnik bzw. Künstliche Intelligenz neuartige Bildnis machen würde.

Im Kapitel 1 werden Frischs Leben, Werken und Gedanken an Aufklärung und Bildnis überblickt. Dann wird die Absicht dieser Arbeit erläutert. In seiner ungefähr fünfzig jährigen Tätigkeit hat Frisch nicht nur literarische Werke geschrieben, sondern vielen Reden gehalten, dahinter stand stets Kritik an Menschenbildnis machenden Aufklärung von heute. Ursprünglich hat Aufklärung im Judentum damit begonnen, Gottesbildnis abzulehnen, aber seiner Meinung nach macht der aufklärende Mensch von heute immer Menschenbildnis in seinem Bewusstsein, das unser erstarrtes Erzeugnis ist und Opfer verlangt. Ihm scheint es eine Aporie, dass die auf Front der Aufklärung stehende moderne Wissenschaft und Technologie Menschen vernichtet. In seinen Werken nach *Chinesische Mauer*, nämlich *Homo faber*, *Der Mensch erscheint im Holozän*, *Blaubart*, kritisiert er Brutalität und Perversion der Aufklärung der Moderne, die Menschenbildnis machen. Spät im Leben sagte Frisch in einem Interview über der Aufklärung, dass die literarische Produktion ihm schon wichtiger als eine Rede oder ein Interview ist. Demzufolge, in dieser Arbeit

sind die Texte der Frischs Erzählungen semantisch und stilistisch analysiert, um das klarzumachen, wie sich die Kritik an die Perversion der Aufklärung, durch die Menschenbildnis gemacht ist, literarisch vorgestellt wird.

Im Kapitel 2 wird Frischs Skepsis an Aufklärung beschrieben, die er in *Chinesische Mauer* zum ersten Mal geäußert hat. Unmittelbar nach dem Zweiten Weltkrieg veröffentlichte Frisch *Santa Cruz, Die Reise nach Peking, Nun singen sie wieder* usw., in denen Hoffnung auf Überwindung der Unmündigkeit, des nicht aufklärerischen Wesen der Menschen, liegt. Dennoch, in *Chinesische Mauer*, das in 1947 erschien, schwand diese Hoffnung, stattdessen trat die Skepsis vor Aufklärung von heute, weil Frisch gerade nach dem Weltkrieg davon wusste, was man in Auschwitz, Hiroshima und Nagasaki mit der modernen Wissenschaft und Technologie gemacht hatte. *Chinesische Mauer* ist eine Farce, in der die geschichtlich berühmten Figuren wie Napoleon, Brutus, Kolumbus usw. im Maskenball im Kaiserhof von Shin-Huang-Ti Polonaise tanzen und ihre Meinungen behaupten. Diese Figuren sind Bildnisse, die sich unser aufklärerisches Hirn bevölkern und unter Herrschaft von der Vernunft so organisiert sind, wie die Figuren von dem Kaiser gezwungen werden, in Reigen der Polonaise zu tanzen. Nachdem der Zerstörung des Kaiserhof wegen Aufstandes bleiben und schwatzen sie, die sie Bildnisse von aufklärendem Geist sind, unverändert wie vor auf dem Boden der Ruine. Allein die Liebespaar Romeo und Julia befürchten den Untergang der Welt, den Frisch selbst befürchtet, wegen erstarrten Bildnisses der aufklärerischen Menschen.

Im Kapitel 3 wird Problematik der Wissenschaft als Aufklärung behandelt. *Homo faber* hat ein Untertitel *Ein Bericht*. Der Protagonist Walter Faber ist ein aufklärerischer Ingenieur, der als Mitglieder der UNESCO Hilfsaktion in unterentwickelten Ländern unternimmt. Er glaubt, dass alles, was in der Welt geschieht, mit Wahrscheinlichkeitstheorie erklärt werden kann. Deshalb wählt er „Bericht“ als Schreibstil aus, um sein tragisches Erlebnis mit seiner Tochter wissenschaftlich zu schildern. Während er in Bett eines Krankenhauses in Athen sterbend liegt, wird er belehrt von seiner Ex-Frau, dass sein wissenschaftlicher Geist, mit dem er sein Bericht geschrieben hat, für den Tod seiner Tochter verantwortlich sei. Mit dem Bericht kann die Wahrheit der Tragödie nicht erklärt werden. Scheitern des Berichtes hier ist Scheitern der Aufklärung.

Im Kapitel 4 wird Verlust des menschlichen Gefühls in Betracht gezogen, den die Aufklärung der Aufklärung ausbringt. *Der Mensch erscheint im Holozän* ist falsche Erkenntnis aber der Titel des Erzählens, in der der alte Protagonist trotz seiner schwach werdender Kognitionsfähigkeit Fragmenten verschiedener wissenschaftlichen Kenntnisse aus Enzyklopädie, Zeitungen, Magazinen usw. sammelt und ihre Zettel auf der Wand klebt. Das macht er bis er in Tessin Tal einsamen Tod stirbt. Er ist eigentlich ein aufklärerischer Bürger in Basel gewesen, trotzdem sehen ihm die Zettel auf der Wand wie Götzenbilder aus. In der Erzählung findet sich oft die erlebte Rede, durch der man Erzählers Mitgefühl mit dem Protagonisten in Bezug auf der Aufklärung bemerken kann. Beide, der Protagonist und der Erzähler sind aufklärerische Menschen, dann kommt dieses Mitgefühl nicht aus Freundschaft, sondern aus gegenseitigem Verständnis aufklärerischer Vernunft, das zur letzten Stunde des Todes des Protagonisten ausgelöst werden muss. Der Tod, den der

Erzähler berichtet, ist nicht der des Protagonisten, des Menschen, sondern der des aufklärerischen Geistes, wo es kein über Tod klagendes menschliches Gefühl gibt.

aufklärerischen

Im Kapitel 5 handelt sich es um Brutalität der Bildnisse. *Blaubart* ist Frischs letztes literarische Werk, in dem Totalität und Brutalität der Bildnisse erzählt sind, die von dem Geist der Aufklärung von Moderne gemacht werden. Blaubart ist Spitzname des Protagonisten, Internist Schaad, der wegen Verdachtes des Mordes an seiner Ex-frau angeklagt worden ist. Obwohl Schaad schließlich freigesprochen wird, blieb ein unehrenhaftes Bildnis von ihm zurück, das durch vielen Zeugen in dem Prozesse gemacht worden ist. Um das frühere Bildnis als ehrenhafter Arzt niederzustellen, liegt er ein falsches Geständnis ab und will öffentlich bestraft werden. So geht es ihm jedoch nicht, weil der echte Täter bereits im Gefängnis ist. Aufklärerischer Arzt Schaad versucht Selbstmord, weil sein stolzes Bildnis ein Opfer verlangt.

Im Kapitel 6 und Nachwort ist Scheitern der Aufklärung und Hoffnung davon zusammengefasst worden. Während in Schweizer Literaturgeschichte seit Anfang des 19. Jahrhunderts durchgehend Geist der Aufklärung festzustellen ist, wie in Gotthelfs *Bauernspiegel*, in Kellers *Martin Salander* usw., hielt Frisch in Solothurn 1985 Rede „Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“, in der er deklarierte, dass die Aufklärung der Moderne gescheitert ist. In der Rede ist das zusammengefasst, was er lebenslang an Bildnis machenden Aufklärung kritisiert hat. Er ist zum Schluss gekommen, dass heutige Aufklärung in Totalität und Brutalität geraten ist. Nachdem er das Scheitern der modernen Aufklärung deklariert hatte, betonte er an Ende der Rede; Garten der Aufklärung zu bestellen oder zu hegen hat wenig Bedeutung, mit Ausnahme der Freundschaft. Schon gerade nach dem Zweiten Weltkrieg hat Frisch das im *Tagebuch* geschrieben, dass die Liebe das Nächste, das lange Bekannte aus jeglichem Bildnis befreit. Anfang vertraute er auf Liebe, danach auf Freundschaft, um Bildnis, das von moderner Aufklärung gemacht wird, zu bewältigen. Hinter Frischs Kritik an der Aufklärung, die er in seinem literarischen Werken beschrieben hat, liegt immer Hoffnung auf Liebe bzw. Freundschaft, sodass sie uns von Menschenbildnis befreien kann.

2019 年度修了者修士論文

※以下に掲載されたものは、著者より提出された修士論文ファイルより本文部分を抽出したものである。目次や付録データ等は編集の都合上、割愛した部分がある点をお断りする。(編集者)

A Study on V+N Phrasal Expressions in English

Mayumi FUJIMORI

1. Introduction

Although Japanese students learn English for at least six years, some for twelve years if you include English special zone schools of the elementary level, it is rare to find one that is fluent in writing and speaking in the language. The majority of them are said to be far from fluent in English. According to the result of English exam that Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (henceforth MEXT) has administrated, targeting on the third year pupils at twelve thousand seven hundred seventy-four public middle and high schools, merely fifty percent of examinees could answer rightly in listening and reading, while the result of speaking and writing test showed that high school students who could answer correctly was low, and many of the students scored zero (MEXT 2017).

Among the four modes of communication in English, i.e., listening, reading, speaking and writing, this paper tries to shed light on the issue for improving the students' writing skills, focusing on verbs, which are one of the parts of speech that plays the central grammatical role of a sentence, especially the transitive verbs (V + N phrases) that Japanese often become confused with.

The author of the thesis made efforts to investigate the collocational pair of a transitive verb plus a nominal object phrase, with an emphasis on the author's database, in which such verbal pairs are listed. Thus, before starting an argument on the thesis statement, we shall confirm the significance of such verbal collocations.

1.1. What is "Collocation"?

The bulk of this research was the creation of a collocation database. It is important to first understand how a collocation is defined by Howard Jackson,

Professor of Birmingham City University whose interests in English Grammar, Vocabulary and Lexicography led him to produce a compendium of linguistic key terms, and an authoritative English dictionaries. After consulting the ninth *OED* is to provide the definitions of the term worth quoting.

Firstly, Jackson made several important statements on collocation where he suggest that the “syntagmatic” relationship which determines the meaning of the word concerned, and also that collocation is a relationship with other words that typically co-occur in the sentence / discourse structure (Jackson:28).

According to Jackson, there exist certain words that typically collocate with a certain noun, which determine the meanings of the collocational phrase. Yet, the importance of the procedure to determine the meanings of a collocational phrase is so significant that it is worth while investigating its linguistic application for the Japanese people to the practical usages. For instance, the adjective “white” has meanings too broad to be understood by Japanese junior high school students without a collocation with a certain noun. Co-occurring with a noun “wine”, for example, will determine the meaning of “white”, while with another noun such as “a chalk” will bring about another meaning of “white”. Both meanings are simply translated into Japanese as 'Shiro', but the real colors are different in wine and a chalk. Jackson summarizes:

[The components of (the sense of) a lexeme's meaning is: its relations with the 'real world' in the form of its denotation and connotation; its relations with other (sense of) lexemes in the vocabulary. Its relations with the other lexemes that typically accompany it in the structure of sentences (Jackson: 29). That lexeme will be comprised with semantic relations such as with the “real world” between the lexical denotation and connotation.]

From Jackson's viewpoint, a verb with a nominal object will have a sense that is only determined by its collocation. With a limited range of vocabulary for a teenage Japanese students, this fact will allow them to understand how to compose an English sentence.

Second, the definition of 'collocation' in *OED* encompasses the whole usages of 'collocation' in English sentences. The meanings of “collocation” defined as 1.a. and 1.c. are relevant in this study:

1. a. The action of setting in a place or position, *esp.* of placing together with, or side by side with, something else; disposition or arrangement with, or in relation to, others; the state of being so placed. Frequently applied to the arrangement of words in a sentence, of sounds, etc.

...

c. *Linguistics.* The habitual juxtaposition or association, in the sentences of a language, of a particular word with other particular words; a group of words so associated. Introduced by J. R. Firth as a technical term in modern Linguistics, but not fully separable from examples in sense [1a](#) (*OED*, s.v. “collocation”).

As we see above, the definition 1.c. in *OED* is apparently relevant in linguistic studies, and the term 'collocation' is hence considered thus in this paper.

How much importance can we see from the definitions of the term 'collocation'? As we understand that even the adjective 'white' can literally be translated into Japanese 'Shiro', its meanings are collocationally defined. In terms of English learning, certain range of semantic meanings are to be taught with regard to the 'similarity' and 'differences', but it is not always through the collocation; every single meaning is usually taught as the meanings of 'the word'. Still, a word cannot be used alone in our daily usage. The importance of collocation in English learning cannot, therefore, be emphasized in the scenes of classroom.

1.2. Overview of the Previous Researches on English Collocations

In the previous section, we have seen the definitions of the term “collocation”, in order to recognize the importance of the part that it can play at the scene of English education in Japan. Collocation is not only habitual arrangements of English phrases but also the factor to determine the meanings of the words it contains. In this section, we shall scrutinize the functions of collocation through an overview of the previous studies to linguistically recognize how collocations perform to make sense in their practical usages.

Here we present an overview of the previous studies on collocation applied Stubbs 2001, Sinclair 2004, Hoey 2005, 2007a, 2007b. McEnery and Hardie say “when considering the definition of collocation, Sinclair, the resale of an early paper published in the 1970s, is the most important document”. Sinclair plays a significant part in the studies on *collocation*. Sinclair defines the relationship between “nodes” and “collocates”.

He says that a node is a lexical item to be investigated. A node and its collocates exhibit a certain collocative pattern, and the general patterns are to be resulted from the analyses of each pattern. On the other hand, a collocate is any lexical item that should collocate with a node within a "span", or a range of lexical unit. In basic ideas, there is no difference between nodes and collocates. If WORD A can be considered as a node and WORD B one of collocates, when WORD B is investigated as a node, WORD A will be one of collocates. (McEnery and Hardie:184)

In addition, Stubbs evolved Sinclair's ideas as follows:

Stubbs (2001: 87-9) develops Sinclair's ideas into a systematic account of how the extended lexical units around a word may be studied by the successive analysis of collocations, colligations, semantic preferences and discourse prosodies (McEnery and Hardie :132).

Stubbs states that by developing Sinclair's way of thinking grammatical co-occurrence coupling, semantic preference and discourse prosody are continuously analysed, and everything can be incorporated into a collocation analysis (Stubbs 2001:87-9).

Here Hoey's theory is called lexical priming and he represents that centres on a new view of collocation in which collocation in text or in spoken language is the cause and consequence of potential intracellular phenomena. Individual words are pre-prepared to co-occur with other words, so those who wrote or spoke the word A are also psychologically prepared to continue using the word about A (McEnery and Hardie :196).

Because every word is pre-primed to co-occur with other words, a person who sees or hears a word is psychologically presupposed to select one or more words associated with it in advance (McEnery and Hardie 196).

In English education in Japan, nevertheless, the importance of collocation has been ignored for a long time. It is relatively recent that the term collocation is used in the curriculum of English for the secondary education in Japan. In particular, The EIKEN Test in Practical English proficiency (EIKEN) has recently attracted attention in English education in Japan as a private test. The use of collocation as a strategy for phrasal order connection in short sentences is proposed in the EIKEN Level two Prediction Question Drill.

Suzuki advices how to create a sentence structure → Section Structure →

Collocation.

In addition he also advises how to keep an eyes on the connections in the blank from the context , and consider the idioms and collocation to determine the final word order (collocation: a tolerant connection of two or more words) (Suzuki :7) .

The popularity of the EIKEN test has increased in Japan, and the number of test takers will continue to increase. Moreover, the importance of collocation can be confirmed in advanced learners of English may be wondering which verb to use as they learn various verbs. In that case, it is effective to know a noun that is an object and the idiom to collocate.

1.3. The Procedure of This Study

We began by collecting Verb + Noun data using *the Kenkyusha Dictionary of English Collocations*, which contains 380,000 cases. We then built a database for analysing the syntactic expression 'a transitive verb + a nominal object' in the dictionary. The limitation of the sample data is made because of the simplicity of the sample sentence as well as our purpose of the application of our analyses to the future English teaching scenes: teachers are thought to make use of as simple construction of English expressions as they can. The core structure of the verb-noun collocations is what we need in its practical purposes.

In the second stage, the verbs that are found to have numerous varieties of nouns as direct objects are examined with reference to the definition of each verb in *OED* to verify their semantic ambiguity with necessary theoretical explanations. The third stage of this study describes and summarises the applicability of effect of this research to English education in Japan.

In the preface of *The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*, the characteristics the dictionary is described as a broad collection of single units of expression in which words are conventionally combined with other words, whose combinations are grammatically (and alphabetically) arrayed (Ichikawa, Dutcher and Boyd, v). The reason why to use the dictionary is that: First the dictionary was edited for writing in mind to use it; second, the dictionary has more vocabulary than any other collocation dictionaries; third, according to Yoshio Terasawa, the dictionary is well-known in Japan and has many examples. The following description shows how this book is called as a dictionary for collocation.

He refers to *Kenkyusha's New Dictionary of English Collocation*,1958 as it is well known in Japan and there are *The Word Finder* (1947) edited by J. I. Rodell and *A Dictionary of English Style* (1955) edited by Albrecht Reum in overseas. In

particular, *Kenkyusha's New Dictionary of English Collocation*, 1958 is unique in that it differs from Rodel, which is just a list of collocation, that it categorizes it according to the type of grammatical structure (with advantages) with abundant examples and appropriate translations (Benson, Benson and Ilson: ii).

He refers to *Kenkyusha's New Dictionary of English Collocation* as described in 1995, and it was stated that the content was fully modernized in 1995 and that a large number of new examples were added to meet modern requirements (vi).

2. The Types of V + N Phrase

2.1. The Verb Phrases with a Cognate Objects

A V + N phrase is the cognitive object of this study. In general, the typical Subject + Verb + Object (or SVO, as is often taught in schools in Japan) structure consists of transitive verb phrase and a noun with or without an article.¹ There are several special kinds of sentence in this structure. One example is the expression of "cognate object".² *Sleep* is an intransitive verb, but the transitive verbal phrase *sleep a sleep* expresses the same meaning as *sleep*. Such English expressions convey the meaning that can also be expressed with a single intransitive verb.

2.2. Light Verb Phrase

There is a 'light verb' expression, which is to be compared with the cognate object expression. A Light Verb phrase is a modern English expression that expresses a semantic content expressed with a transitive verb + a direct object structure, even though such a semantic content also can be expressed with a single intransitive verb.³ What is V + N for? If an intransitive verb that is not a light verb is VI, the

¹ The verb + object syntax is expressed as VP + NP as its underlying structure according to generative grammar, and its variants include a transitive verbal phrase + a nominal phrase as a direct object, or VT + DO; this study, however, focuses only on a single verb + a direct object.

² The cognate objects are explained in basic grammar books, for example Sugiyama 1998. See also Jespersen 1954 (3: 229-35, 319).

³ See Jespersen 1954 (6:117-18) for the concept of light verbs. See Grimshaw and Mester 1988 for syntax interpretations, especially the light verb characteristics of the expression [-suru] in Japanese.

expression that can be completed with one word if VI is inserted is intentionally expressed using a transitive verb. For example, a sentence expressed by the intransitive verb *I cried* can be paraphrased as *I had a cry*. It is possible “very superficially” (Kageyama 1996, p.77)⁴. Jespersen describes “light verb” as follows:

7.2.¹ The most usual meaning of sbs derived from and identical in form with a vb is the action or an isolated instance of the action. This is particularly frequent in such everyday combinations as those illustrated in the following paragraphs after *have* and similar ‘light’ verbs. They are in accordance with the general tendency of ModE to place an insignificant verb, to which the marks of person and tense are attached, before the really important idea-of combinations with *do, can, eat.*, (Jespersen:117)

Jespersen refers to an object as a nominal word ('sbs' standing for 'substantives') meaning a verbal significance. For instance, *to have a delightful bathe* has a meaning that 'bathe delightfully', while *to have pleasant lunch* signifies *to eat lunch pleasantly*.

2.3. Modification by Addition of Adverbs

Such expressions corresponding to V + N also exist in Japanese, and there are many previous studies discuss through comparison with English (Hasegawa 1979, Inoue1976, Kageyama 1876-77, 1982, Kuroda 1965). For example, Grimshaw and Mester 1988, using the accusative noun with the verb “to do”, tries to syntactically interpret a sentence which can be translated in English as “The train departed from Ueno Station” into a V + N structure (Grimshaw and Mester :217). The V + N syntax can be said in Japanese.

- (1) a.*Densha-wa Kyuu-na SHUPPATSU-o shita.
- b. Densha-wa Kyuu-ni SHUPPATSU-o shita.

Such an examples with an addition of an adverb explains how an adverb of manner works to modify the verb.

On the other hand, there is another kind of English expressions that shows an adverb of manner (Ando: 521). When it comes to the single intransitive verb structure, an English sentence can have an adverb to modify its main verb. In the

⁴ Such linguistic reasoning is beyond the scope of this paper and should not be dealt with.

light verb expression, however, there can be two distinctive ways of modification. You can put either an adverb for the verb or an adjective to modify the objective noun. For instance, the expression *to have a bathe* can be modified either by an adverb such as *delightfully* or an adjective *delightful*:

- (1) She delightfully had a bathe.
- (2) She had a delightful bathe.

The differences in nuance may well be clear to the native English speakers, but most Japanese learners can easily be puzzled, quite understandably, how to differentiate those two sentences in meaning.

Regarding the previous statement, Tanaka and Matsumoto (131) give the following examples that include-movement verbs in English: *amble, bowl, canter, clamber, climb, crawl, creep, dance, dash, flit, fly, gallop, glide, hasten, hobble, hop, hurry, inch, jog*. They describes that movement to be multiplied by internal factors (will, etc.) of those who move (mainly human / animal) (Tanaka and Matsumoto131). English has such intransitive verbs that tells the manner of actions. In teaching English, several questions can occur to the students' mind when they try to translate into their own mother tongue, when they find it easier to translate with a basic verb plus an adverb of manner: instead of *to climb*, they would easily say *to go up*, for an example, even though they will miss some of its connotation.

On the other hand, the expression using an intransitive verb as described above is completely different from the V + N structure. It can be explained not only by adjectives that directly modify the object, but also by adverbs to light verbs. Light verb expressions allow an explanation of both an adjectives and an adverb. With this in mind, creating a database to overlook what the expression of V + N collocation might be a sample collection for further English studies. Therefore, in the next section, we will analyze in detail the characteristics of the collocation of transitive verb + single noun phrase found in *The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*.

3. Collecting the Examples V + N Phrases

3.1. How to Collect V + N Phrases from *The Kenkyusha Dict. of English Collocations*

From the 65,112 pairs of a verb and a noun in the N+V structure in *The Kenkyusha Dictionary of English Collocation* (hence *Kenkyusha Dict.*), all the verbs are assorted alphabetically with its nominal objects. The result shows what nouns are typically collocated as the object of each verb. Some verbs have a varieties of nouns as their object, while others have only a few nouns as their typical collocational associates. Table one is provided to give the five verbs in the list of verb-object pairs that have the top-five

3.2. The Verbs with Numbers of Nominal Objects of in the Database Corpus from *Kenkyusha Dict.*

Table1. Verbs in the Corpus Collected from *TKDEC*.

	1	2	3	4	5
Verbs	have	give	make	take	get
Number of Nouns	2,053	1,098	1,051	766	758

Table 1 exhibits the top five verbs that have conspicuously numerous varieties of nominal objects. They appear similar to what Jespersen calls the light verbs (117). Here also, the characteristic of the expression V + N can be seen. In the form of V+N, various verbs are used, and most of the specific nouns have a pattern in which a specific verb co-occurs.

Kageyama states that light verb construction consists of those verbs such as *take*, *have*, *give*, and *make* as the main verbs, and the nominal objects that are verbal nouns, or the nouns with verbal meanings converted into nouns (Kageyama 77). It is no coincidence that all of the verbs listed by Kageyama were the top four in Table 1. In the next section, we shall consider the signification of these five verbs in the database from *Kenkyusha Dict.*

3.2.1. Five Verbs with the Common Nominal Objects, *job* and *life*

Among five verbs, *have*, *make*, *give*, *take*, and *get*, and all the nouns that collocate with them, we will consider two nouns, *job* and *life*, because of the fact

that these two nouns are typical collocative nouns with all the five verbs. The followings are to investigate the examples that have either *job* or *life* as N in the V+N structure.

(2) *job* in N

- a. [get] He **got** a *job* with a real estate firm.
- b. [get] I'd like to leave the company, but it's hard to **get** another *job*.
- c. [get] Can you **get** me a *job*?
- d. [give] They **gave** me the *job* of running the copying machine.
- e. [give] I **gave** my nephew a *job* in the company.
- f. [have] He **has** a *job* in a large bank.
- g. [have] **have** no *job*
- h. [have] He **has** the *job* of looking after important visitors.
- i. [have] We **had** quite a *job* finding your house.
- j. [make] He **made** a reasonable *job* of it.
- k. [make] **make** a bad [good] *job* of it
- l. [make] She **made** a short *job* of convincing him.
- m. [take] He **took** a *job* as office boy with a law office in New York.
- n. [take] Do you want to take the *job*?

(*Kenkyusha Dict. s.v. 'job'*)

get and *take* seem to have the same meaning, but *get* includes the idea that the *job* was obtained actively that get a *job* by your own effort, while *take* suggest you get a *job* that were passively offered the *job*.

In the cases of examples a. and m., the verbs *get* and *take* may seem to have similar ideas. The differences in meaning in both examples can be, however, construed from the whole meanings of the given sentences. A sentence a. has its meaning as the subject *he* became employed, most probably his own effort of application. A sentence m., on the other hand, apparently implies that the subject *he* accepted a state of working position as an office boy that had been offered to him by someone in the office. A comparison with another example from Ichikawa will confirm that the expression *to take a job* can be included in a question to whom the job is offered.

(3) *life* in N

- o. [get] **get** *life* from God
- p. [get] The accused **got** *life*.
- q. [give] **give** one's *life* to one's work
- r. [give] She **gave** her *life* to save her child.
- s. [have] These boats have **had** a long *life*.
- t. [have] We have **had** a long and good *life* together.
- u. [have] A cat **has** nine *lives*.
- v. [make] By jealousy and ill temper he **makes** her *life* miserable
- w. [make] Music **makes** my *life* worth living.
- x. [make] It will **make** your *life* much easier if you get married.
- y. [make] Don't **make** *life* difficult for yourself. Do what your doctor orders.
- z. [take] **take** one's own *life*
- aa.[take] **take** sb's *life*

Contrary to the cases of the noun *job*, these examples reveal how wide the semantic diversity in connotation the noun *life* holds. In other words, it is the collocation with each verb that defines the meanings of the noun *life*. For instance, *to get life* in the examples o. and p. shows that one obtains a right and energy as well as the time to live. *To give one's life* is an idiomatic or metaphoric expression for *dedicating the time and energy for one's own* to someone or something, while *to take one's life* signifies *to kill* (or *to suicide*) in these examples z. and aa. On the other hand, the V+N structure for *to make life* does not complete itself without a complement of an adjectival phrase.

Therefore, a. and m. compared by using different verbs even if each example is the V+N structure, respectively, a. and m. are reflected the meaning of verb in a translation strongly. Whereas in the comparison of o. and z. it became clear that the meaning belongs to the entire interpretation, such as the subject, the adjective, despite using the TO Get *Life* of the same word of V+N.

3.3. Differences in Meanings of Five Verbs Observed by *OED*

We shall here examine the definitions given by *OED* in the cases of the five verbs. Alphabetically firstly, we see the etymology of *get*:

Get: a. transitive. To obtain possession of (property, etc.) as the result of effort or (esp.) contrivance (*OED*).

As mentioned in the example sentence a., it can be confirmed that the job was obtained as a result of the effort.

Take: a. *transitive*. To gain possession of (a town, building, vessel, etc.) by force; to seize, capture, esp. in war; to win by conquest (*OED*).

The example sentence m. and n. seem that a man wanted some extra spending money so he took a job.

Give: a. To hand over (a thing) as a present; to confer gratuitously the ownership of (some possession) on another person (with or without actual delivery of the object) (*OED*).

The example sentence d. e. q. r. can be defined in *OED* as to hand over (a thing) as a present.

Make: a. *transitive*. To produce (a material thing) by combination of parts, or by giving a certain form to a portion of matter, to manufacture; to construct, assemble, frame, fashion. In many contexts verbs of more specific meaning are now often employed, and, with particular objects (e.g. *house, town, ship*), predominate (*OED*).

The object has been affective casing positive outcome in life. Making causative verbs in the sentence with make as the example sentences v. w. x. y. can be defined to produce (a material thing) by combination of parts, or by giving a certain form to a portion of matter.

It has also been revealed that nouns determine which definitions are determined by indicating their *OED* meanings.

4. A Case Study: *have* + NP

Up to now, we have looked roughly at the five verbs, but by focusing on the most diverse noun phrases *have*, we can see features that we have never seen before.

4.1. The Definitions of the Verb *have* in *OED/Oxford Advanced Learner's Dictionary*

The original or the first definition of meanings of *have* in *OED* is as follows:

1.a. *transitive*. To hold in one's hand, on one's person, or at one's disposal; to hold as property; to be in possession of (something received, acquired, earned, etc.); to possess. Encompassing a range of senses, from permanent possession (as in *I have a house*) to temporary access to something, whether owned or not (as in *do you have a pen?*).

As a concrete example, we looked at what it means as collocation by repeating this meaning in 3.2.1. *To have a job* which means that one has an occupation for one's earning. Yet, an example i. implies the difficulty of the task 'finding your house'. Similarly, the example s. metaphorically tells that an object can last for a long time, while t. can be paraphrased as "We lived happily together for long". The example u., on the other hand, is an old saying which can be interpreted as either a metaphorical expression or an idea of the ancient belief.

In *OED* On-line (3rd ed.) *have* has polysemy and forty-seven definitions.

On the other hand, looking up into the semantic definition of the verb *have* in the *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (henceforth *OALD*):

1 (not used in the progressive tenses)to own, hold or possess sth 2 ~sth (not used in the progressive tenses)be made up of 3(not used in the progressive tenses)to show a quality or feature 4 ~sth to do sth(not used in the progressive tenses)to show a particular quality by your actions...

A total of 33 definitions are recognized. As with *OED*, *OALD* was also polysemy. The context with the noun in V+N structure determines the meanings of the V+N phrase with the verb *have*, or the other "light verbs".

4.2. Tanaka and Kawade 1989

4.2.1. Six Proposals

In this section, the work of Tanaka and Kawade are used as the foundation for further discussion. In Tanaka and Kawade, aV stands for "a noun making a verb" or "a nominal word retaining a derived verbal signification". The structure of "have + aV" is considered in the syntax "V + N" (59-63).

There are several expressions that can serve as an example of “have + aV”, such as “*have a swim, have a run, have a look, have a try, have a bite, have a smoke, have a wash, and have a chat*” (Tanaka and Kawade 59). From this, the following six characteristics of “have+ aV” are determined:

<1> Has a core-meaning that is based on Wierzbicka as “experience space” (Tanaka and Kawade 59)

<2> The act represented by a V is a short act (Tanaka and Kawade60).

<3> “have + aV” is not an expression of purpose-oriented movement (Tanaka and Kawade59)

<4> “have + aV” can possibly repeat (Tanaka and Kawade60)

<5> Because it depends heavily on the existence of the article <a>, “have a walk” has the meaning of “stroll” (Tanaka and Kawade60)

<6> “have” has the action of weakening the movement’ (Tanaka and Kawade60)

In this paper, we do not handle <1> the theory is put forth by Wierzbicka <3> the theory that “have + aV” is not an expression of purpose-oriented movement, but propose to <2>, <4>, <5>, <6>.

4.2.2. Argument against Tanaka and Kawade 1989

In Tanaka and Kawade, the structure of V + N has been modelled as “have + a V” (59-60). This is based on the fact that “aV” is grammatically a noun but has a strong verbality semantically. However, although V is said to be a nominalized verb” (Tanaka and Kawade 59), it should be written as “have + aN ” because it is a noun with an indefinite article. Therefore, in this paper, such a syntax is reiterated: “have + aN ”.

Tanaka and Kawade declare that <2> *have + a N* represents a short-time action (60). “ I had a drink ” is semantically similar to “ I drank V”, but in order to understand the meaning of “ have + aN ” , it is important to note that an action represented by V is a short term action (Tanaka and Kawade 59). The author adds that one can say *He swam for 10 hours*, but not *He had a swim for 10 hours* (Tanaka and Kawade

59). However "He had a long walk" makes sense as a sentence and in that case, *long* is not about time, but about distance.

4.2.2.1. The Data Collected from GloWbE

A search for the phrase "have a long walk" (including have/had) in Corpus of Global Web-Based English (henceforth GloWbE) found three examples from sources in Britain (GB) two from Canada (CA), and one from the United States (US) as follows.

Here, we use GloWbE example sentences to verify that the meaning of "have a long walk", as described before, *long* is not about time, but about distance.

(4) a. (39GB) ⁵

...need help. Adjacent adjective to lie next to you won't have a long walk between classes because the engineering building is ****27:6787**; too long to the chemistry laboratories. jettison verb

b. (56GB) The hotel staff said that the coach came back at 5pm, but that is meant to be the return coach for those who take the 11 o'clock coach to get there. Apparently, sometimes you can switch to a later bus: you just need to check/ask. Beware though: we missed our stop on the way back (we all fell asleep) and they do not announce the stops so we had a **long walk** back to the Vila Petra.

c. (88GB) and pumped revellers on their way back usually tire out if they have a **long walk** back, or opt to stay in and socialise in a certain area before returning.

d. (4 CA) ...a few minutes to get to the main drag, and we had a **long walk** ahead of us, but at least the traffic caused a bit of a breeze.

e. (43CA) ...site situated between the Aswan Dam and the High Aswan Dam and have a **long walk** around the extensive ruins of the Temple of Isis. This is one of the...

f. (80 US) ...up early in the morning. That's because most of them have a **long walk** from El Alto - the poor suburb that's far away from the city centre.

Here is an analysis of the previous GloWbE statement and verify as follows:

For d, e, and f, *long* is interpreted in the sense of distance, but in a, b, and c, *long*

⁵ (39GB) 39 shows the numbers of GloWbE example sentences.

may be temporal. An example of particular interest is 4b. This suggests that there is a high possibility that the distance will be “time included”. The sentence describes a situation where you sometimes have to take a *long* walk even when you get back on the bus easily, quickly. Therefore, this long walk includes not only the distance in meaning but also the time taken for the walk, furthermore, it is a walking with fatigue. In order to explain such an interpretation by introducing we consider a cognitive linguistic concept called a “frame”.

4.2.2.2. Viewpoints of Frame-Script Theories

Let us devote a little more space to examining the frame theory so as to deepen the interpretation. The Frame-script theory is a cognitive semantic framework advocated by Fillmore (Taylor: 203). It can be said to be a collection of meanings of a word, and the items or meanings that define each meaning that follows. The content is called script, especially AI researchers. ⁶Palmer1996 also devised the term *scénario* as a synonym for such a script (Palmer 1996: 75-76). Taylor2002 describes frames, scripts and scenarios as follows :

6

For Fillmore (1985), a ‘frame’ is a rather tightly organized configuration ,such as the notion of a ‘commercial transaction’, which provides the background for the characterization of terms such as *buy, sell, price, cost*, etc. Workers in artificial intelligence (e. g. Schank and Abelson 1977) often refer to typical, or expected sequences of events as ‘script’ While some terminological distinction may well be justified –it is often convenient, for example, to talk of expected event sequences as ‘scenarios’ (Taylor 2002 : 203; emphases added)

Regarding the meaning of *scénario* proposed by Palmer1996, as indicated by the underline in the quote above, Taylor hints at the difference between script and scenario that Palmer made synonyms, but does not touch on the difference.

⁶ “Frame is a term that has been used in the study of artificial intelligence along with scripts, schemas, etc” and is known as the frame semantics of Fillmore. It can only be understood in the context of the community’s experience, knowledge, perspective, values and beliefs.(Tsuji 2002:221)

4.2.2.3. New Interpretations with Frame-Script Theories

As to the meaning of *scénario* proposed by Palmer (75–76), Taylor suggests that *scénario* is a synonym for script, but does not touch on the difference between the words. However, the sequences of events that are “expected” depends on the context of each sentence. For example, even if the same restaurant vocabulary is used, the expected event sequences are not all the same in Italian and Chinese.

Grappa is included as a liquor in Italian restaurants, but Baikal is expected for Chinese. In this way, a variety of scripts are included in the lexeme frame of a restaurant (in Taylor's terminology, this is called a “semantic domain”). Palmer originally proposed ‘a culturally defined sequence of actions, a story-schema’ (75) as a context, which should be considered when defining which inner script should be selected. Therefore, in this study, we propose to define Palmer’s *scénario* as a Story Schema that arises from a context that uses scripts.

Using this to reinterpret (4) b, *a long walk* contains the context that after the last coach has left, you have to walk from where you came on the coach bus. An N frame called *a long walk* might contain four scripts: 1. a long walking distance, 2. a long walking time, 3. some people enjoy long walks, 4. long walks make people tired. Thus, the scenario is: a. the time is late at night, b. it is a coach (long-distance bus) rather than a route bus, c. the time of the last bus should have been examined, and d. Since the duration to the destination is described, *long walk* represents the distance and time. Furthermore, it can be seemed that it was a walk with fatigue. This scenarios a-d will exclude the script 3 from the semantic frame of *a long walk* in this context. On the other hand, scripts that walk for a long time are not deleted because (4) b. in the scenario is included. In conclusion, Tanaka and Kawade 60 say *long* shows the distance not time. It was possible to find the possibility of showing time and distance from the analysis of GloWbE example sentences, and became the objection to Tanaka and Kawade.

5. Applicability of this Study to English Education

5.1. Collocations with *Have* for Japanese Junior High/High School Students

In the first stage of this study, we saw verbs, especially those five verbs—*have*, *give*, *take*, and *make*—that collocate with a direct object. We shall further extract example sentences with those five verbs from *Core-Lex English-Japanese Dictionary* (hence abbreviated as *Core-Lex*). *Core-Lex* is edited with reference to the levels of the vocabularies for learning: one star, two stars and three stars, respectively labelling the

elementary level, the semi-advanced level and the advanced level for the Japanese high-school learners. The vocabulary with these stars counts approximately twelve thousand words in total. It should be recommended that in Japan only to make use of these limited numbers of vocabulary for English teaching to the (Junior-) High school students, who are from twelve to around eighteen years old.

The definitions of the verb *have* are counted forty-seven in the *OED*, while twenty-nine definitions are allotted to the non-auxiliary usages of the verb *have*.

Table2: Example Sentences for Junior High School Students

A-Z	definition of OED	Noun	Examples
A	2b	area	The park has an area of about 10,000 square meter.
B	12	baby	She is going to have a baby.
C	1a	car	Do you have a car?
D	19a	day	I had a bad day at the races.
E	14	education	He has had a higher education.
F	5b	family	Does he have any family ?
G	22b	game	Let's have a game this evening.
H	4	head	This beer has a good head on it.
I	11	ice	We will have ice tomorrow.
J	8b	job	He has a job in a large bank.
K	10a	key	I have the key to the front door.
L	2a	leg	She has nice legs.
M	14	mark	He has good marks for English.
N	24b	name	We have his name on our list of wanted man.
O	6a	office	She has an office in the building.
P	6a	party	He had a party at his home.
Q	16b	question	He had the same question in his mind.
R	14	reason	Animals have no reason.
S	21b	story	I have no story to tell
T	21c	test	The patient has had several test.
U	17b	up	He has had his ups and downs in life.
V	5c	visit	I had a visit from him.
W	24b	walk	He has a walk like a gorilla.
X	16a	X ray	have a chest X ray

Y	16b	year	have a good year
Y	16b	year	You have one year to go.
Z			No example

Table 2 shows definitions of *OED*, Nouns with the co-occurring verb *have* are described in alphabetical order. When considering the V+N structure, it can be seen how a verb and noun are connected. It clarifies that *OED* is more affected by comparing the definition of *OED* when given the noun with the object to the same verb and the example sentence.

The words in the examples for high school students were chosen based on *System English Words* that identifies words that are most necessary for entrance exams for university. As used *Core-Lex* in a junior high school example, the high school student example. This book contains 20,000 essential words and one-hundred-and-eighty synonyms. Shimo and Tone state that “For editing, we analysed the latest database of entrance examinations (8,000 entrance exams with more than 40,000 questions)” (Shimo and Tone: I V).

- (5) a. She has an office in the building.
- b. He had a party at his home.

The definition meaning of 6a means “Expressing the presence, location, or position of the object of the verb, esp.” The definition of “Expressing location ” applies to (5)-a. Although in the same sentence of 6a, the definition of “Expressing the presence ” applies to (5)-b. It can be said that where this subtle difference was judged was determined by a noun.

- (6) a. He has had a higher education.
- b. He has good marks for English.
- c. Animals have no reason.

The definition number 14 means “To receive knowledge that to learn, find out”. The definition that “To receive knowledge” applies to (6)-a. And in the same sentence 14, the definition that “To receive knowledge ” applies to (6)-b and (6)-c. It also can be said that where this subtle difference was judged was determined by a noun.

Table 3 : Example Sentences for High School Students

A-Z	definition of OED	Examples
A	1b	He had every accomplishment except that of making money.
A	6b	He has an appointment in the Foreign Office at present.
A	15a	She has the advantage of having spent her childhood here.
B	10d	This mustard doesn't have much bite.
C	17a	have a chill
D	18	I had the delight of spending an evening in her company.
E	17a	I feel that I have had enough of his complaints.
F	19b	I have a favor to ask of you.
G	20	The school has eight grades.
H	6a	The city has a splendid harbor.
I	16b	She has no illusions about her prospects as an actress.
J	16b	They have some justice in their complaint.
K	4	They have little knowledge of the way of society.
L	3	The roof has a bad leak.
M	17a	He has no manner.
N	24b	She had the nerve to tell me that I was wrong.
O	3	Does this word have an opposite?
P	11	We've had two portion of beefsteak.
Q	17b	We had quantities of rain during the night.
R	3	Victims of AIDS have little resistance to infections.
S	17a	I have (the) symptoms appendicitis.
S	16b	I had the satisfaction of seeing my plan put into effect.
T	14	In this connection psychoanalysis has four theories to advance.
U	17b	It has ceased to have any practical utility.

V	19b	That night he had a vision in which an angel appeared before him.
W	3	He has a lively wit.
X	16a	have a chest X-ray
Y	1a	These stocks have an impressive yield.
Z	3	He doesn't have much zeal for this plan.

These words are listed in *System English Words*. However, word X is an exception because X-ray of X is not in *System English Words*.

5.2. How to Use the Database

5.2.1. Example 1: Fill-in-blanks Questions

A reverse dictionary was created using *Kenkyusha's Dict.* that shows which nouns co-occur with the verbs, and explained in detail how to use them in junior high school and high school. *Kenkyusha's Dict* is originally made to find verbs from noun, such as what kind of verbs are used from nouns.

Question 1. Does *have* match to this blank?

Question 2. Do you put *have* or *get* in this blank? If so, what kind of difference can you tell in the meaning?

Question 3. What is the verb that makes sense to fill in the blank?

Table 4:Q: What Is the Common Verb in the Next Blanks?
(For Junior High Students)

Definition of OED	noun	example
1a	car	Do you () a car?
5b	family	Does he () any family?
22b	game	Let's () a game this evening.
2a	leg	She () nice legs.
14	mark	He () good marks for English.
6a	office	She () an office in the building.

(For Junior high School Students)

Table 5

Definition of OED	noun	example
19b	favor	I () a favor to ask of you.
20	grade	The school () eight grades.
6a	harbor	The city () a splendid harbor.
3	leak	The roof () a bad leak.
17a	manner	He () no manner.

Question 1. Does *have* match to this blank?

Question 2. Do you put *have* or *get* in this blank? If so, what kind of difference can you tell in the meaning?

Question 3. What is the verb that makes sense to fill in the blank?

(For High School Students)

5.2.2. Example 2: English Composition

Table 6: Used for Japanese-English translation.

noun	Japanese→	English
car	Kuruma wo motte-iruka.	(Answer) Do you have a car?

Q: Please translate the following Japanese to English.

(For Junior High School Students)

This is suitable for students who are starting to learn English and are working on writing the answer, the noun *car*, and the verb *have*.

Table 7: Translation Japanese-English

noun	Japanese→	English
quantity	Yoruno -aidani , takusan-amega -futta.	(Answer) We had quantities of rain during the night.

Q: Please translate the following Japanese to English.

(For High School Students)

It may seem difficult to determine the noun from the words that high school students are familiar with. It is typical in an English work to interpret "rained"

from the idea "we have rain". In fact, the meaning is often determined by the object, rather than by the verb. Students tend to think about what they can do with a reverse dictionary. The meaning is not determined by the verb alone, so the more patterns that come up with for the noun, the more the recalled verbs come to mind, thus making the dictionary more advantageous.

6. Conclusion

6.1. The Conclusive Remarks

According to the results of the MEXT 2017 English skills test, Fukui Prefecture was ranked first in Japan in both junior and high schools. The result indicates that municipalities have promoted English proficiency and class improvement in education, and that private-sector examinations have been more positive. The prefecture also ranked first for English proficiency of English teachers, improving the target in both junior and high schools (Chugakusei no Eigo Ryoku). The fact that private English tests are being actively conducted outside of school classes shows the height of consciousness to English. In order to improve English proficiency, a curriculum that is inclined to only two, i.e. reading and writing, not biased in four skills, and the qualifications of teachers to teach are required.

6.2. Prospects of English Education in Japan

According to Kageyama (8), "By elucidating the semantic nature of verb vocabulary, we make it possible to put theoretical scalpel into the difference between Japanese and English in "expression" or "concept". Kageyama encourages learners and educators in language activities to pay attention to the differences between Japanese and English ideas and deepen their understanding. Even though 13 years have passed since Kageyama give this advice, it may still be an issue. This study was done with the intention of solving.

According to High School Study Guideline' published by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the first goal is to seek differences in ideas from culture, society, the world and other relationships and combine them with language activities.

MEXT advises that when you communicate in foreign languages, work on thinking with different perspectives and try to understand information and ideas accurately through linguistic activities of listening, reading, speaking, and writing. We aim to develop the qualities and abilities to communicate appropriately.

(Official guidelines for school teaching for Senior High School (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology ,Heisei 30 July,12).

However, a difference in ideas must also be discovered in language activities. To do this, we analysed what nouns are used as objects for certain verbs in the form of “V + N” The co-occurring nouns do not necessarily match in Japanese and English. This could help improve an individual’s English ability by allowing them to recall verbs used with specific nouns when translating into Japanese or English, or conversely recalling nouns from verbs. Knowing verbs and nouns is a valuable strength, but it is desirable for practical use to know when collocations are actually used.

By analysing the examples of V+N structure with *have*, we judged the script and scenario and applied the frame theory using context. Furthermore, we recognised the importance of a teacher understanding the formation of collocation and using it in their teaching methods. In English education, Japanese learners, including the author's own self, need to understand the difference in ideas between the languages. A hope should be expressed to deepen the understanding in English collocation as well as in English connotation in order to improve the ability for writing and understanding with profound insight into the usage of English by native speakers. Another hope is that this research can contribute to English education in the future.

[Editor’s note: In Fujimori’s MA thesis, appendices are included here.]

Works Cited

1. Dictionaries

- Benson, Morton, Evelyn Benson and Robert Ilson, eds. *The BBI Combinatory Dictionary of English: A Guide to Word Combinations*. Japanese edition. Editorially supervised by Yoshio Terasawa, Ed. Minoji Akimoto, Akira Baba and Toshihiro Ogura. Tokyo: Maruzen, 1993.
- Ichikawa, Shigejirō, David Dutcher and Stephen Boyd. *The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*. Tokyo: Kenkyusha, 2006.
- Minamide, Kōsei. *Genius English-Japanese Dictionary*. 5th ed. Tokyo: Taisyukan, 2014.
- Minamide, Kōsei. *Genius Japanese-English Dictionary*. 3rd ed. Tokyo: Taishukan, 2011.
- Nomura, Keizō. *Core-LEX English-Japanese Dictionary*, 2nd edition. Tokyo:

- Obunsha, 2011. Print.
- Simpson, John, ed. *The Oxford English Dictionary*. 3rd ed. On-line. Oxford: Oxford UP, 2000-.
- Takahashi, Sakutarō. *Reader's English-Japanese Dictionary*. 3rd ed. Tokyo: Kenkyusha, 2015.
- Tsuji, Yukio. *An Encyclopedic Dictionary of Cognitive Linguistics*. Tokyo: Kenkyusha, 2002.

2. Secondary Sources

- Andō, Sadao. *Lectures on Modern English Grammar*. Tokyo: Kaitakusha, 2016. Print.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester. "Light Verbs and θ -Marking". *Linguistic Inquiry*, Vol. 19, No. 2 (Spring, 1988): 205-232. On line.
- Hasegawa, N. *A Comparison of Two Approaches to a Class of Japanese Constructions*, ms., University of Washington, Seattle, 1979.
- Higashide, M. *Chugakusei no Eigo Ryoku Todo Fuken Data Ranking* ("English Ability of Junior-high and High School Pupils") (uub.jp/pdr/e/eigo.html) accessed 10.Feb.2019.
- Hoey, Michael 2005. *Lexical Priming : A New Theory of Words and Language*. Routledge. Print.
- 2007a. "Lexical Priming and Literary Creativity", in M. Hoey, M. Mahlberg, M. Stubbs and W. Teubert(eds.) *Text, Discourse and Corpora: Theory and Analysis*. London: Continuum, pp7-30.
- 2007b. "Grammatical Creativity: A Corpus Perspective", in M. Hoey, M. Mahlberg, M. Stubbs and W. Teubert(eds.) *Text, Discourse and Corpora: Theory and Analysis*. London: Continuum, pp31-56.
- Inoue, K. "Henkei Bunpoo to Nihongo" [Transformational Grammar and the Japanese Language], Vol. 1, Taishukan, Tokyo, 1976.
- Jackson, Howard. 2002. *Lexicography: An Introduction*. London: Routledge. Print. Hoboken: Taylor and Francis, 2013. Online. [*Eigo Jisho Gaku eno Shōtai*. Trans. Kōsei Minamide and Shinichirō Ishikawa. Tokyo: Taishūkan, 2004. Print.
- Jespersen, Otto 1909-49 *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part VI. London: George Allen & Unwin.
- Kageyama, Taro. *Verb Semantics*. Tokyo: Kuroshio Publishing, 2006. Print.
- Kageyama, T. "Incorporation and Sino-Japanese Verbs," *Papers in Japanese Lin-*

- guistics 5, 117-156, 1976-77. Kageyama, T. "Word Formation in Japanese," *Lingua* 57, 215-258, 1982.
- Kuroda, S.-Y. *Generative Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts, 1965.
- Matsumoto, Yō. 1997. "Idō Dōshi ni okeru Goika Pattern" [Lexicalizing Patterns of Movement Verbs]. Shigenori Tanaka and Matsumoto Yō. *Kukan to Ido no Hyogen* [*Expressions of Space and Movement*]. Tokyo: Kenkyusha, 1997.
- McEnery, Tony and Andrew Hardie. 1996. *Corpus Linguistics: Method, Theory and Practice*. Edinburgh: Edinburgh UP. [*Gaisetsu Kōpas Gengogaku: Shuhō, Riron, Jissen*. Trans. Shinichirō Ishikawa. Tokyo: Hituzi Syobo, 2011.]
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). 2017. "Heisei 28 Nendo Eigo Ryoku Chosa Kekka (Chugaku 3 Nensei) Sokuho (Advance Announcement of the Result of Investigation of English Skills (The Ninth Grade Students, or the Third Year Students of Junior High Schools in 2016))." www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/03/02/1382798_1_1.pdf
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). 2018. *Official Guidelines for School Teaching for Senior High School* (July, 2018). www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf Online.
- Palmer, G.B. *Toward A Theory of Cultural Linguistics* Austin. University of Texas Press, 1996.
- Sinclair, John McHardy. *How to Use Corpora in Language Teaching*. John Benjamins, 2004. Print.
- Shimo, Yasushi. Tone, Masahiko. *System English Words*. Tokyo: Sundaibunko, 2018. Print.
- Stubbs, Michael. *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. John Wiley & Sons, 2001. Print.
- Sugiyama, Cyuichi. *A Comprehensive English Grammar*. Tokyo: Gakusyu Kenkyusha, 1998. Print.
- Suzuki, Motohiro. *Eiken Level 2 Prediction Question Drill*. Revised ed. Tokyo: Obunsha, 2010.
- Tanaka, Shigenori and Saiki Kawade. 2010. *Dōshi ga Wakareba Eigo ga Wakaru: Kihon Dōshi no Imi no Sekai* [*You Can Understand English If You Know the Verb: The World of the Meaning of Basic Verbs*]. Tokyo: The Japan

Times.

Taylor, John R. *Cognitive Grammar*. OUP, 2002.

Wierzbicka, Ann 1988. *The Semantics of Grammar*. John Benjamins In Print.
Chugakusei no Eigo Ryoku, Mokuhyo no {Eiken 3 Kyu ijyo}wa 40%. Nikkei : 6 Apr.
2018. (www.nikkei.com/article/DGXMZO29090410W8A400C1CC1000/)

3. Data base

GloWbE (Corpus of Global Web-Based English) <https://www.english-corpora.org/glowbe/>

<Tables>

Table1 : Verbs of High Frequency in the Corpus Collected from *TKDEC*.

Table2 : Example Sentences for Junior High School Students

Table 3 : Example Sentences for High School Students

Table4: Q: What Is the Common Verb in the Next Blanks?

(For Junior High Students)

Table5 : Q:What is the common verb in the next blanks?

(For High School Students)

Table6 : Q: Change the following Japanese into English.

(For Junior High Students)

Table7: Q: Change the following Japanese into English.

(For High School Students)

2019 年度修了者修士論文

※以下に掲載されたものは、著者より提出された修士論文ファイルより本文部分を抽出したものである。目次や付録データ等は編集の都合上、割愛した部分がある点をお断りする。(編集者)

マックス・フリッシュ研究

ーフリッシュによる啓蒙の偶像化批判ー

川合 正紀

はじめに

21 世紀に入り高度情報通信技術、AI は、現代人の頭脳と精神にとって有用な補助手段から、人間を支配する主人に変質しつつある。その背景には、18 世紀以来の西欧における啓蒙主義の最前線を切り拓いてきた近代科学技術の進歩がある。しかし 20 世紀の二度にわたる世界大戦は、科学技術が暴力化し、ナチズムに見られるような人間精神の荒廃をもたらした。そのため科学技術が啓蒙を主導する限り、新たな荒廃が世界を覆うのではないかと懸念される。気象変動による地球環境の悪化、災害の巨大化、資本主義の劣化と国家間抗争の激化、貧富の格差拡大等がそれである。

マックス・フリッシュは、文化の中での科学技術の果たす役割が、核兵器の出現によって野蛮化した 20 世紀に生き、アウシュヴィッツで行われた人間の野蛮性の極限に衝撃を受けた作家のひとりである。彼は、現代社会で当たり前で普遍的であると思われることに潜む危険性を嗅ぎ取り、現代人の啓蒙の精神が人間の偶像を創り出し、野蛮と専制の原因となるとして警告し続けた。そして、現代の啓蒙の問題点を、社会的視野をこえて個人の意識の中に求め、人間があらわす野蛮性に対して、理性以上に感性によって抵抗し批判した。そのため「私には、理論はない」、「フィクションこそ真実を語る」と晩年になって語っているように、フリッシュの文学作品の根底には常に啓蒙批判が伏流している。

フリッシュは、現代の啓蒙の行きつく先に、人間の心に形成される硬直した他人の偶像があるとして、偶像に仮託した啓蒙批判を行った。今日の社会の情報ネットワーク空間で形成される人間の虚像群は、^{やおよろず}八百万の神にも似た人間の偶像であり、AI 空間は、かつてない人間の偶像を創り出しつつある。フリッシュが 20 世紀に発した偶像に仮託した啓蒙批判と、新たな啓蒙の展望は、今世紀においてもなお傾聴すべき意義を失っていない。

第1章 序論

1.1. 研究の背景と目的

マックス・フリッシュ Max Frisch (1911-1991) は、第二次世界大戦の戦中、戦後を通じてナチズムに対して、ドイツ語圏のスイス人として情動的にゲルマン民族の責任を共有しつつ、距離を置いた批判をおこなった。第二次世界大戦後の東西に分割されたドイツ国民の最大の課題は、ナチズムの清算と祖国の復興であった。政治経済的復興は、西側と東側でそれぞれアメリカと旧ソ連を軸とする戦勝国の主導のもとになされたが、国民の心を深く蝕んだナチズムの克服は、東西を問わずドイツ国民の自らの手でなされねばならなかった。こうした状況下で、1930年前後からナチズムとファシズムを鋭く批判してきた思想集団であるフランクフルト学派の戦後は、『啓蒙の弁証法』¹ で始まった。著者のテオドア・アドルノ (Theodor W.Adorno1903-1969) とマックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer 1895-1973) は、ナチズムをもたらしたドイツ民族の精神を、啓蒙と野蛮の弁証法的な関係の必然として分析している。しかし哲学者ラインハルト・ブランド (Reinhard Brandt 2017, 93) は、『啓蒙の弁証法』は現代の啓蒙がファシズムを齎したことを十分批判していないとして、「我々はシンドラー²とゲッベルス³の違いに固執し、従って啓蒙の弁証法というタイトルのもとに総合的な診断は行わない。」(Man wird trotzdem auf einer Unterscheidung von Schindler und Goebbels bestehen und entsprechend auf die totalitäre Diagnose unter dem Titel einer Dialektik der Aufklärung verzichten.⁴) と述べている。同様にフリッシュは、啓蒙と野蛮との関係を弁証法によって説明することには賛同せず、平凡な市民の心の中に生じている啓蒙自体の変質を問題とした。この変質をフリッシュは、「啓蒙の倒錯」(die Perversion der Aufklärung) と表現し、次のように述べている。

[...]sondern gemeint war die große Vernunft: als sittliche Vernunft im Widerspruch zum Aberglauben. Was wir der Naturwissenschaft zu verdanken haben, steht außer Frage: bis zu einer gewissen Grenze. Wo beginnt das Defizit? Wissenschaft ohne sittliche Vernunft und infolgedessen eine wissenschaftliche Forschung, deren Folgen niemand zu verantworten hat, das ist schon mehr als ein Defizit, nämlich die Perversion der Aufklärung, die uns

¹ ホルクハイマー、アドルノ著 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店 2007

² Oskar Schindler (1908-1974) : ドイツ人実業家、第二次世界大戦中、自分の工場で働く多くのユダヤ人を強制収容所の虐殺から救った。

³ Paul Joseph Goebbels (1897-1945) : ナチス政権の宣伝担当相

⁴ Brandt, Reinhard „Trotzdem: Aufklärung“ in *MERKUR Heft 813*, 2017, 93

mündig machen soll.⁵

[...] 問題なのは偉大なる理性です：迷信に逆らう道徳的な理性です。私たちが自然科学から恩恵を受けていることに疑問の余地はありませんが、自ずと限界があります。このギャップは何処から生じたのでしょうか？ 道徳的な理性の欠けた科学や、したがって誰もその結果に責任を取らない科学的探究は、もはやギャップ以上となっていて、つまり啓蒙の倒錯ですが、啓蒙は分別ある人間を作るべきなのです。

有史以来啓蒙は、分別ある人間を作る役割を果たしてきたが、現代においては分別ある人間が、専制・野蛮・偶像礼拝などに傾いている。啓蒙の行きつく先には、カントを始めとする啓蒙主義者たちが期待したような思慮分別のある人間がいるのではない。フリッシュは、旧約聖書以来知られている金の仔牛すなわち偶像がいるとしている。フリッシュは、現代のこうした啓蒙の状態を倒錯と呼び、現代人の精神が創り出す意識の中の偶像 (Bildnis) に仮託している。

Du sollst dir kein Bildnis machen, heißt es, von Gott. Es dürfte auch in diesem Sinne gelten: Gott als das Lebendige in jedem Menschen, das, was nicht erfaßbar ist. Es ist eine Versündigung, die wir, so wie sie an uns begangen wird, fast ohne Unterlaß wieder begehen - Ausgenommen wenn wir lieben.⁶

汝、偶像を作るなかれとは、神について言われていることである。このことは、次の意味においても妥当する：どんな人間の中にも、捉えどころのない生きものとしての神がいる。その偶像化は、我々を犯す罪であると同時に、我々が犯し続ける罪でもある。我々に愛が有るときは別である。⁷

モーゼを通して与えられた「十戒」は古代イスラエル民族の啓蒙化の始まりである。しかしその第二戒律である神の偶像の禁止については、旧約の時代を通して、イスラエルの民によって破られ続けた。フリッシュは、古代の神の偶像化の禁止は、現代人の心の内にもある掴み難い生ける者としての神を偶像化することに対しても向けられるべきとしている。フリッシュによれば現代人の作る偶像は、人間同士がお互いに自分の脳裡に持ち合う相手の像であり、その硬直した像は生贄を要求するという。⁸ フリッシュの凡そ 50 年間に

⁵ Frisch, Max „Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“ in *Du: Zeitschrift der Kultur* 51, 1991, 12

⁶ Frisch, Max. „Der andorranische Jude“ in *Gesammelte Werke II* Suhrkamp Verlag, 1986, 374.

以下『全集』は GW と略称し巻号、頁を後置する。Ex. *Zur Chinesischen Mauer*, GW. II..220
(『万里の長城』について) 全集第 2 巻 220 頁)

⁷ 私訳、以下注記のない限り私訳。

⁸ Frisch, Max. *Du sollst dir kein Bildnis machen* GW II, 371.

おける多くの講演、著作の裡には、神の偶像化の否定から始まった啓蒙の精神が、現代においては人間の偶像を創り出しているとの批判が伏流している。本研究では、フリッシュの小説のテクストを意味と文体の両面から分析し、啓蒙の変質としての人間の偶像化に対する批判を中心として、フリッシュの啓蒙批判がいかなる文学的表象によってなされているかを論考する。

1.2. フリッシュの人と作品

フリッシュは、1911年チューリヒに生まれた。1930年からチューリヒ大学でゲルマニスティックを専攻するなかで、哲学こそ現実の生きた人間の深奥に迫るものだとの考えに到達する。その後、22歳のとき父の死により、生活の手段を考えねばならなくなり、1932年から新チューリヒ新聞 (*Neue Zürcher Zeitung*) のフリージャーナリストとなる。要求されることは何でも書き、何でも見てやろう、書いてやろうという記者魂は、その後のフリッシュの作家活動にとって極めて重要な経験となった。しかしこうした二年間は、生活のために書くことの意味を問い続ける期間でもあった。⁹ 1936年に、チューリヒ連邦工科大学に転じて建築学を学ぶかわら、1940年から第二次世界大戦が終わるまで約500日間の兵役を勤めた。そこでは砲兵として南スイスの山岳地帯でイタリアに向かうドイツ軍の車両の警備に当たりながら心中では、ナチスのスイスへの侵攻を怖れていた。¹⁰ その間に建築学のディプロムを取得している。1942年には自らの設計事務所を開設するが、戯曲や小説の執筆を再開している。こうした終戦をまたぐ数年間、フリッシュの作家としての地歩を確立する時期となった。戦後の東西冷戦秩序の中で、フリッシュの東欧諸国に対する共感は強まり、スイス国内から共産主義者ではないかとの疑惑を持たれる。しかし、1951年、ロックフェラー財団の奨学金による10か月のアメリカ滞在は、そうした批判の矛先をかわす契機となった。この間の建築家としての活動は、社会から高く評価されているが、¹¹ 著作活動の方が戦後世界の新しい秩序の回復のために貢献できるとの意を強くし、1955年作家生活に専念することになる。

戦後ドイツの精神的不毛性の中で、唯一大きな影響力を持ちえた批判的知性勢力は「47年グループ」¹² と言われる文学者集団であった。彼らの文学や芸術を論じる場は、やがて政治的な起爆力を持つ公論の場へと発展し、市民社会の批判的な世論が形成される原動力となっていた。フリッシュは、スイスにおいて彼らとおなじ立場からの講演や著作活動を行っている。フリッシュのこうした公共的な活動は、常に講演家と作家の二つの顔を持

⁹ Frisch, Max. "Tagebuch 1946-1949 Autobiographie" In *Romane, Erzählungen, Tagebuch* Suhrkamp Verlag, München 2008, 215.

¹⁰ Ebd., 216

¹¹ 1943年チューリヒ市屋外プールの設計コンテストで最優秀賞獲得、当該施設はMax-Frisch-Badと呼ばれている。

¹² 「47年グループ」に属したのは、ハインリヒ・ベル、イルゼ・アイヒンガー、インゲボルク・バッハマン、マルティン・ヴァルザー、ギュンター・グラス等々である。その多くがビューヒナー賞を受賞している。

っている。1949年のスイス・ドイツ文化協会における講演では、ドイツ語を話す人間でありながら、ドイツ民族の運命共同体から疎外されているとの無力感、ナチズムに積極的に対抗できなかったスイス国民の負い目、さらには戦後ドイツの生ぬるいナチズムの清算に対する歯がゆさが語られている。¹³ アメリカから帰国した直後の1952年のスイス建築家連盟の総会では、スイス人のアメリカに対する不当な優越感、大陸文化とアメリカ文化の人間性から見た違いについて講演を行っている。¹⁴ 1957年のスイス建国記念日の講演¹⁵ では、スイス国民のプライドの裏に潜む進歩への不安感が語られる。こうしたフリッシュの同時代的問題意識は、長編小説『シュティラー』(Stiller 1953/4)の中で、主人公の弁護士に、スイス国民の抱く不安と自己過信、世界中から愛されているとの心地よい思い上がりについて語らせている。¹⁶ 1958年にビューヒナー賞を受賞したフリッシュは、著作と並行して公共の問題に積極的に関与し続けた。1966年、いわゆる「チューリヒ文学論争」では、時のドイツ文学研究の権威であるチューリヒ大学の教授エミール・シュタイガー¹⁷ (Emil Staiger 1908-1987) に対し、その文学理論がナチスと同じ語り口であると激しく批判している。60年代の初めからフリッシュは、フリードリヒ・デュレンマット (Friedrich Dürrenmatt 1921-1990) や他の若い世代の作家たちとともに、従来の古典的な文芸形式から脱した新たな表現や解釈を主張し実践している。¹⁸

フリッシュは、経験は世界の実相のほんのわずかな部分しか覗いていないとしながらも、自らの体験を重視し、その極大化に邁進した。このことは、47年グループのインゲボルク・バッハマン (Ingeborg Bachmann 1926-73)¹⁹ を含めて多くの女性と知りあい、結婚、離婚を繰り返し、数々の国に旅行し、チューリヒ以外にもローマ、ベルリン、ニューヨークで生活したことに表れている。南スイスのテッシンに隠棲の居をおいたこともあるが、晩年は故郷のチューリヒに帰り1991年に死去している。彼の著作は、小説(長編、短編)、戯曲、放送劇、と広範におよび、『日記』(Tagebuch)²⁰ は新しい表現方法の試みである。作家として積極的に社会に関与すべきとの立場から多くの講演や対談を行い、記録として残されている。なかでも戦後のフリッシュの主要な文明批判は、『パートナーとしての公共性』(Öffenklichkeit als Partner²¹) に収録されているが、そこに語られて

¹³ Frisch, Max „Kultur als Alibi“ In *Öffenklichkeit als Partner*, Suhrkamp Verlag, München 1970, 15- 24.

¹⁴ Frisch, Max „Unsere Arroganz gegenüber Amerika“ In Ebd. S.25-35.

¹⁵ Frisch, Max „Festrede“ In Ebd., 7-14.

¹⁶ Frisch, Max *Stiller* in GWIII 1986, 544-48.

¹⁷ スイスの文芸史家。ドイツ文芸学の主流を占める精神史研究の第一人者。緻密(ちみつ)な言語感覚、ハイデッガーに負うところ多い存在論的思考、そして古典尊重の歴史認識が総合された典雅な学風が特色。『詩学の根本概念』(1946)、『ゲーテ』3巻(1952~59)が代表的著作。1943年よりチューリヒ大学教授を務めた。

¹⁸ Rusterholz, Peter *Schweizer Literaturgeschichte* Verlag J.B.Metzler Stuttgart 2007, 311-15.

¹⁹ Ingeborg Bachmann 1926~73年(オーストリア) 主要作品：詩集『猶予された時』放送劇『マンハッタンの良き神』作品集『三十歳』長編小説『マリーナ』1964年ビューヒナー賞受賞

²⁰ Frisch, Max *Tagebuch 1956-1949* in GWII 1986, 347-750.

Frisch, Max *Tagebuch 1966-1971* in GWVI 1986, .5-404.

²¹ Frisch, Max *Öffenklichkeit als Partner* Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1970

いるのは、啓蒙的理性が齎す危険性に対する警鐘である。

ドイツ文学史における 18 世紀の啓蒙主義の潮流は、スイスにおいては 19 世紀初頭からのリアリズムの中に強く影響が及んでいる。²² 例えば、イエレミアス・ゴットヘルフ (Jeremias Gotthelf, 1797–1854) の農民社会を描いたリアリズム小説『農民の鑑』(1863) には、因習と迷信に支配されている農村の深刻な社会問題を、啓蒙主義の光によって解決しようとする主人公の道徳的姿が描かれている。また、ゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller, 1819–1890) の『マルティン・ザランダー』(*Martin Salander* 1886) は、都市市民の公共的あるいは、私的な啓蒙的道徳問題をモチーフとした代表的な作品である。そこには急激に発展するスイスの産業社会における政治的・経済的な腐敗、墮落に立ち向かう主人公ザランダーの啓蒙精神の働きと挫折が描かれている。こうしたスイス文学の底流に一貫して流れる「啓蒙の精神」(*Geist der Aufklärung*)²³ は、1985 年にフリッシュによって悲観的な終焉を宣告されたとみなされている。²⁴ この年は、『マルティン・ザランダー』の刊行のちょうど 100 年後にあたり、フリッシュが 75 歳のときである。この年フリッシュはソロツルンでの講演で、啓蒙が最終的には「金の仔牛」(*das Goldene Kalb*) にも似た専制的な偶像形成に行きつくことを警告したのである。²⁵

フリッシュの作家活動は第二次世界大戦を挟んでほぼ 50 年間に及ぶが、終戦直後の作品『サンタ・クルーズ島』(*Santa Cruz* 1946)、『ビンまたは北京への旅』(*Bin oder Die Reise nach Peking* 1946)、『ほらまた歌っている』(*Nun singen sie wieder* 1946) においては、ナチズムへの批判を念頭に置いた人間の未成人性 (*Unmündigkeit*) すなわち非啓蒙性の告発とそこからの脱却への希望が語られている。特に、『ほらまた歌っている』は、エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner 1899-1974 作家・詩人) によって、個人の罪が民族の全体的な罪に繋がっていくことを描いた理性のレクイエムであると高く評価された。²⁶ しかしこうしたフリッシュの啓蒙的理性に対する信頼は、第 2 章で述べるように、1947 年に発表された『万里の長城』(*Chinesische Mauer*) において深い懐疑へと転じている。終戦直後にアウシュヴィッツの犯罪を知り、引き続いての広島、長崎への原爆投下の蛮行の報道に接した事が、執筆の背景にあると考えられる。この体験を経て、啓蒙の前衛である科学が絶対的な暴力性によってすべてを破滅させると言う啓蒙のアポリアからの脱却は、フリッシュにとって生涯の課題となった。『万里の長城』以後の主要作品『僕はシュティラーではない』(Stiller 1954)、『ホモ・ファーバー』(*Homo faber* 1957)、『我が名はガンテンバイン』(*Mein Name sei Gantenbein* 1964)、『モントーク』(Montauk 1975)、『人間は完新世に生まれた』(*Der Mensch erscheint im Holozän* 1979)、『青髭』

²² Rusterholz, Peter Solbach, Andreas *Schweizer Literaturgeschichte*. Verlag J.B. Metzler 2007, 49.

²³ Ebd.

²⁴ Prof. Dr. Rémy Charbon ジュネーブ大学ドイツ文学部教授

²⁵ Frisch, Max “Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“ In *Du: Zeitschrift der Kultur* 51 1991, 118-127.

²⁶ Kästner, Erich “Ein wichtiges Stück“ *Der Spiegel* (Hamburg) 11. Januar, 1947, 17.

(*Blaubart* 1981/82) その他の多くの作品や評論の裡には、常に啓蒙に対する懐疑が伏流し、上記 1985 年の「啓蒙の終焉」講演に帰結する。

1.3. フリッシュに関する先行研究と受容の概観

戦後間もなく発表された『ほらまた歌っている』(*Nun singen sie wieder* 1945) は、上述したように *Der Spiegel* 誌上でエーリヒ・ケストナーによって高く評価されたが、ドイツ国民からは、必ずしも快く受け入れられなかった。彼らは、ナチズムを忘れようとしながらすでに復興の道を歩みだしていたからである。²⁷ しかしその後のフリッシュは、作品を発表するたびに、著名な書評家を有した多くの新聞、週刊誌、月刊誌等の書評欄に取り上げられ、ドイツ語圏の一般読書界における最も影響ある作家のひとりとして受け入れられようになる。

フリッシュの全集は 1976 年までに 1~6 巻、その後 10 年の間隔を置いて 1986 年に第 7 巻が出版されている。全集の最初には、形式化した演劇を批判する 1931 年の小論²⁸ が、掉尾には『自伝：演劇』(*Biografie: Eina Spiel* 1984)²⁹ が補稿として収録されているが、1985 年のソロツルンでの講演『啓蒙の終点に立つのは金の仔牛である』(*Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb*) の講演録は収録されていない。しかし全集の刊行は、フリッシュの作品に対するそれまでの研究と受容に新しい展望を開くことになった。全集 (1~6 巻) の刊行後、ドイツ文学者・比較文学者のゲルハルト・クナップ (Gerhard Knapp) は、『マックス・フリッシュ：散文作品の視点』(*max frisch aspect des prosawerks* 1978)³⁰ を編纂し、当時のフリッシュ研究の最前線を俯瞰している。これはフリッシュの作品に関する研究論文集であるが、その冒頭にはフリッシュ自身の講演録「我々は待ち望む」(„Wir hoffen.“ ドイツ書籍連盟平和賞受賞記念講演 1976)³¹ が収められている。その中でフリッシュは、自身の作品には触れず、第二次大戦後の世界を脅かしている核兵器、自由の抑圧、平和問題等を踏まえて、「ユートピアがなかったなら、我々は超越のない生命体にとどまってしまうだろう」(*Ohne Utopie wären wir Lebewesen ohne Transzendenz*³²) と、ユートピアの重要性を訴えている。フリッシュの作品に関する研究論文集の冒頭にこの講演録を掲載していることは、1970 年代のフリッシュ研究の傾向を象徴している。それは、フリッシュの文学作品を純粹にテキスト内から解釈するのではなく、作者の思想的・倫理的あるいは自伝的コンテクストから解釈する傾向である。³³

²⁷ Ebd.

²⁸ Frisch, Max. *Mimische Prtiti* GW I, 7-9.

²⁹ GW VII, 409

³⁰ Knapp, Gerhard P. *max frisch aspekte des prosawerks verlag peter lang ag. 1978*

³¹ Ebd., 15-23.

³² Ebd., 19 Transzendenz(超越)：日常という現状を超えて真の現実を探し求めようとする人間の普遍的経験に由来する概念 (岩波哲学思想事典 1998, 1083)

³³ これは以下の掲載論文に共通して言えることである。Manfred Jurgensen *Max Frisch: Die frühen Schriften* (『初期作品』)、W. Gordon Cunliffe *Die Kunst, ohne Geschichte abzuschwimmen*.

2011年はフリッシュの生誕100周年にあたり、特にスイスにおいて作家としてのフリッシュの業績が見直される機会となった。チューリヒ大学の新ドイツ文学講座で行われた「フリッシュを純粹に文学的コンテクストから読む」ことを目的としたリレー講演³⁴では、同大学のドイツ文学の教授陣を中心にスイス各地から集まった12名のドイツ文学の研究者が、今日的な立場からのフリッシュ研究を発表している。その講演表題³⁵からも今世紀に入ってのフリッシュ研究の動向が読み取ることができる。ここでは、『シュティラー』、『モントーク』、『我が名はガンテンバイン』、『人類は完新世に生まれた』、『日記I-III』のテキスト解釈のほかに、フリッシュの「公共性」(Öffentlichkeit)の概念、1968年の学生運動時の言動、チューリヒ劇場での活動、戯曲、建築、偶像観等がテーマとされている。作家としてのフリッシュ、講演者としてのフリッシュの両面からの研究成果がまとめられている。

日本では、1950~60年代にフリッシュの三大作品である *Stiller*, *Homo faber*, *Mein Name ist Gantenbein* が、中野孝次によって翻訳され刊行された他は³⁶ 各種の演劇集の中に *Andorra* 他数編の戯曲の翻訳が収められているのみである。³⁷ 総合的な作品研究書

Existenzialistisches Strukturprinzip in Stiller, Homo faber und Mein Name sei Gantenbein (「歴史性を超えた芸術:『シュティラー』『ホモ・ファーバー』『我が名はガンテンバイン』の実存主義的構造」)、Peter Pütz *Das Übliche und das Plötzliche. Über Technik und Zufall in Homo faber* (「日常性と突然生:『ホモ・ファーバー』における技術と偶然性」)、Margret Eifer *Max Frisch als Zeitkritiker* (『時代批評家としてのマックス・フリッシュ』)、Armin Arnold *Näher mein Ich zu Dir. Die Problematik des Alterns, des Sterbens und des Todes bei Max Frisch* (『私の「私」の他者に対する近親性;マックス・フリッシュにおける高齢化と死の問題』)、Gerhard P.Knapp *Noch einmal: Das Spiel mit der Identität. Zu Max Frischs Montauk* (「自我の弄び-再-マックス・フリッシュの『モントーク』について」)他。

³⁴ Müller, Daniel et al. *Man will werden, nicht gewesen sein*. Chronos Verlag 2012, 8

³⁵ Michel Mettler *Der nützliche Schriftsteller. Max Frisch und das Phantom der Öffentlichkeit* (実益の作家マックス・フリッシュと公共の幻影)、Christine Weder *Glaubst du an Revolution? Max Frisch und «1968»* (君は革命を信じるか?マックス・フリッシュと1968年)、Ursula Amren *Max Frisch und das Schauspielhaus Zürich* (マックス・フリッシュとチューリヒ劇場)、Peter Schnyder *Fangen wir nochmals an! Zu Max Frischs Dramen* (マックス・フリッシュのドラマ再考)、Hans-Georg von Arburg *Es wird nicht über Literatur gesprochen. Wie die Architektur bei Max Frisch baden ging* (文学ではなくマックス・フリッシュの建築について)、Andreas B. Kilcher *Bilderangst und Fabulierlust. Poetik, Politik und Anthropologie des Erzählens gemäß Max Frisch* (偶像への不安と創作への意欲。マックス・フリッシュによる語りの詩学、政治、人間学)、Wolfram Groddeck *Stiller werden. Eine Annäherung an Max Frischs ersten großen Romanerfolg* (シュティラーになること。マックス・フリッシュの最初の成功作品への接近)、Daniel Müller Nielaba *Ich möchte diesen Tag beschreiben, nichts als diesen Tag». Zu Max Frischs Montank* (私は徹頭徹尾今日について書きたい。マックス・フリッシュの『モントーク』について)、Barbara Naumann *«Ich ziehe Geschichten an wie Kleider». Max Frischs Roman Mein Name sei Gantenbein* (「私は着物のように物語を着ている。マックス・フリッシュの小説『我が名はガンテンバイン』)、Sabine Schneider *Stille Katastrophen. Der Mensch erscheint im Holozän* (静かなる破滅 『人類は完新世に生まれた』)、Karl Wagner *<die zusammensetzende Folge>. Die Tagebücher I-III* (要約:『日記I-III』)

³⁶ 中野孝次訳『ぼくではない』(原題 *Stiller*) 新潮社 1959

中野孝次訳『アテネに死す』(原題 *Homo faber*) 白水社 1963

中野孝次訳『我が名はガンテンバイン』(原題 *Mein Name ist Gantenbein*) In『ドイツの文学 10』三修社 1966

³⁷ 内垣啓一訳「アンドラ」(原題 *Andorra*) in『現代世界演劇 10』白水社、1971

としては、岡本亮子の『マックス・フリッシュの小説世界』（芸林書房 1999 年）があり、2009 年には葉柳和則がそれまでのフリッシュに関する研究文献を多岐にわたって概観している。³⁸ 葉柳は、フリッシュの作品ジャンルとして戯曲、小説、日記を取り上げ、ジャンルを通しての思想史的系譜、美学、国民国家スイス等の視点からの研究動向を論考している。しかしながら日本では、フリッシュの受容は、一般の読者層では希薄であり、ドイツ文学研究の範囲内にとどまっている。

1.4. 啓蒙と偶像

フリッシュは、文芸活動以外でも数々の講演、対談等によって、先進国であると自負するスイス国民の偏狭性を啓蒙しようとした。晩年になってフリッシュは、自身の啓蒙に関する問題意識に対して、有力紙 *Die Wochenzeitung* のインタビューの中で「実を言うと、自分にとって、講演やインタビューより重要なのは、文学作品なのです」と語っている。³⁹ この述懐は、フリッシュの啓蒙に関する思想は、彼の文学作品のテキストにおいて検証されるべきであることを示している。例えば、1961 年にチューリヒ劇場において初演された戯曲『アンドラ』は、出自がユダヤ人であるとの世間の誤解の偶像を受け入れてしまう主人公一家の悲劇が描かれ、神の偶像ではなく人間の偶像の危険性をモチーフとしている。主人公アンドリのユダヤ人としての偶像を最初に創り出したのは、ギムナジウムの教師であり知識人として啓蒙的な父親であることは、フリッシュの偶像と啓蒙に関する問題意識を象徴している。⁴⁰

そこで本研究は、フリッシュの創作活動の根底にある偶像と啓蒙批判の文学的表象について、主要な作品の分析によって明らかにする。まず第 2 章では、スイスの文学史とフリッシュ自身の作家歴の双方にとって、「啓蒙の精神」に対する見方が大きく変わる重要な転機となる作品が『万里の長城』であるとの仮説のもとに、作品の構造を通して提起されている啓蒙の精神の今日的な問題について論考する。続いて、第 3 章では、『ホモ・ファーバー』のテキストを分析し、開発途上国を援助する電気工学技術者として啓蒙の前衛にある主人公が悲劇の真相を語ろうとする語り形式の限界について考察を行う。第 4 章では、『人間は完新世に生まれた』において、知識と記憶を偏重する主人公の死を、啓蒙の死として語る語り手の啓蒙の視線を、分析する。第 5 章では、『青髭』のテキストを読み解き、現代における市民の啓蒙的視線が形成する人間の偶像化と、その結末の悲劇性について考察する。以上のテキスト解釈を踏まえて第 6 章では、フリッシュの生涯の思索の結論とも言える講演『啓蒙の行きつく先に金の仔牛がある』に基づき、神の偶像の否定から出発

加藤衛訳「ドン・ファン」（原題 *Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie*）In 『現代世界戯曲選集 10 - ドイツ篇 2 』白水社 1954

³⁸ 葉柳和則「マックス・フリッシュ」in 『ドイツ文学 Vol.138』2009, 272-92.

³⁹ Frisch, Max. “Ohne Widerstand-Keine Hoffnung“ In *Die Wochenzeitung* (Zürich), Nr.41, v.10. 10.1986, 25-27

⁴⁰ Frisch, Max. *Der andorranische Jude* GW II, 374

した人間の啓蒙的精神が、人間自身の偶像を創り出すという現代の危機に対するフリッシュの警告と、そこから脱却するための新たな展望を読み解く。

第2章 啓蒙に対する懐疑 『万里の長城』 (*Chinesische Mauer* 1947)

2.1. 作品成立の経緯

戯曲『万里の長城』は1945年末に発表され1947年に初演されたが、それまでのフリッシュの作品とは啓蒙的精神そのものを批判する点で異なっている。フリッシュは、この戯曲に先立って1945年5月のドイツ敗戦の直後に『ほらまた歌っている』を発表し、ナチズムを生んだ市民の責任を批判している。この中で、ナチスの行動隊長のヘルバートは、恩師であるギムナジウムの校長を処刑する理由を次のように述べる。

Ihre Hinrichtung ist eine vollkommene. Wir erschießen nicht Sie allein, sondern Ihre Worte, Ihr Denken, alles, was Sie als Geist bezeichnen, Ihre Träume, Ihre Ziele, Ihre Anschauung der Welt, die, wie Sie sehen, eine Lüge war.⁴¹

あなたを処刑は完璧に行われます。あなただけではなく、あなたの言葉、あなたの思想、あなたが精神とよぶもの全て、あなたの夢、あなたの目的、あなた自身をご存じの偽りの世界観を銃殺するのです。

フリッシュが批判しているのは、ギムナジウムの校長に仮託された啓蒙の精神に対するナチズムの挑戦である。しかし、*Neue Zürcher Zeitung* は、フリッシュが戦争犯罪の責任を、野蛮な非人間性にではなく、暴力に対する精神の敗北に帰しているとして非難している。フリッシュは、この批判に対して、モーツァルトを奏でながら市民を焼き殺すという人間の精神の二重性が問題であると反論している。⁴² こうした中で、広島、長崎への原爆投下が行われたことを知り、フリッシュの批判は、科学技術を前衛とする現代人の啓蒙の精神自体に向けられる。それまでのフリッシュのナチズム批判の根底にあった啓蒙の精神に対する信頼は、『万里の長城』では懐疑へと大きく転換している。『万里の長城』には、作品のジャンルとして、ファルス（笑劇 *Farce*）がサブタイトルとして付されている。本章では、ファルスの構造を通して提起されている啓蒙の精神の今日的な問題について論考する。

2.2. フリッシュにとってのファルス(*Farce*) の意味

⁴¹ Frisch, Max *Nun singen sie wieder* GW II 1945, 130.

⁴² Rusterholz, Peter Solbach, Andreas *Schweizer Literaturgeschichte*. Verlag J.B.Metzler 2007, 259.

作品は、戯曲として古典的な「三一致の法則」⁴³ に則り、整然とした形式に整えられている。演じられる物語の時は、始皇帝の時代の一日、場所は始皇帝の宮廷、事件は反乱による始皇帝の破滅である。しかし舞台にはクレオパトラ、ブルータス、ゾラ、ロミオとジュリエット等の歴史上の人物たちが時間と空間を超えて登場し、物語の展開には「こんにちびと今日人」(Heutige)⁴⁴ が介入する。こうした登場人物の構成は、戯曲としての旧来の形式を破壊している。フリッシュが、作品のジャンルを悲劇 (Tragödie) やパロディ (Parodie) ではなくファルス (Farce) とした意図を考察する。

2.2.1. パロディとの相違

現代人の意識の中で、ある種の価値観を伴って偶像化されているブルータスやナポレオンなどの歴史的人物像が、始皇帝の舞踏会に招かれると言う設定は、嘲笑や比較・批判の次元を超えているという意味でパロディではなくファルスである。このことは、作品を初めて発表した 1947 年の 8 年後にフリッシュ自身が次のように述べている。

Parodie heißt: Gegengesang, Nachahmung zum Zweck der Verspottung.[...] Kann man auch nur die Natur parodieren? [...] Denn parodieren kann man nur Menschenwerk. Ist es übrigens nicht eine vertraute Sache, daß die Figuren, die unser Hirn bevölkern, zuweilen in der wunderlichsten und in einer sozusagen frivolen Tischordnung zusammenkommen? Daraus ergibt sich keine Parodie auf das Heilige - was gar nicht möglich ist - höchstens eine Parodie auf unser Bewußtsein, eine Farce des Inkommensurablen. Das Stück nennt sich denn auch eine Farce.⁴⁵

パロディとは嘲笑を目的とする対立表現や模倣表現である。[...] 自然をパロディ化出来るだろうか。[...] パロディ化は人間がなす業に対してだけ可能である。われわれの脳裏にこびり付いている人物の形象は、ときとしていかがわしい、あるいは卑俗な席順に整列されがちでもあるが、聖なるものに対してと同様、パロディ化は出来ない。いや不可能である。たかだかわれわれの意識の働きに対してのパロディがあり得るのであって、比較秤量が不可能なことにに対しては、ファルスが可能だけである。本作品はそうした意味からファルスである。

フリッシュは人間の行為と自我を分けて考えている。行為に対してはパロディ化が可能であるが、自我そのものは、本来推し量りがたいものであって嘲笑や批判の対象にはなり

⁴³ アリストテレスの『詩学』以来、ヨーロッパ演劇の伝統の中に、演劇は「ただ一箇所で、ただ一日の内に、ただ一つの事件が起こるように」することが重視されてきた。

⁴⁴ 登場人物 Heutige は「現代人」と訳されるが、本稿では登場人物名として区別するために「こんにちびと今日人」とする。

⁴⁵ Frisch, Max. *Zur Chinesischen Mauer* GW II, 225.

えないと述べている。「われわれの脳裏にこびり付いている人物の形象 (die Figuren, die unser Hirn bevölkern)」とは、『アンドラ』における偶像 (Bildnis) と同義であるが、『万里の長城』においては偶像化自体が問題とはされていない。偶像群に仮託された現代人の自我意識の構造化が批判されているのである。しかし、フリッシュは、この作品がどたばた喜劇としての受容されることを危惧していた。そのため、「支離滅裂で理解不能な演劇 (Zerrspiel) になるであろう」と初演前の世評を日記に記している。⁴⁶ それでも尚、人間の自我を外から見て合理的に説明することは不可能であることを、この Farce としての作品に描いている。⁴⁷

2.2.2. マルクスのファルスとの比較

ドイツ文学におけるファルスは、18 世紀のシュトルム・ウント・ドラング⁴⁸ の中で文学上の敵対者を嘲笑するためのジャンルとして重視されるようになった。⁴⁹ 歴史的な人物が作品の中に再登場するファルスとしては、カール・マルクス (Karl Marx) の『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』 (Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte) (以下『ブリュメール』と略記) が想起される。この作品の冒頭は次のように始まる。

ヘーゲルはどこかでのべている、すべての歴史的な大事件や大人物はいわば二度あらわれるのだ、と。一度目は悲劇として、二度目は茶番として、と、[...]。ダントンのかわりにコーシディエール、ロベスピエールのかわりにルイ・ブラン、...叔父のかわりに甥。[...]死せるすべての世代の伝統が夢魔のように生ける者の頭脳をおさえつけている。[...]革命の最高潮の時期に、人間はおのれの用をさせようとしてこわごわ過去の亡霊どもをよびいだし、この亡霊どもから名前とスローガン戦闘用語と衣装をかり、この由緒ある扮装と借物のせりふで世界史の新しい場面を演じようとするのである。[...]⁵⁰

マルクスにとってファルスという文学ジャンルは、政治的な事件を上演する表象空間である。⁵¹ マルクスのファルスとしての歴史的「亡霊」は現代に出現し、現代人は「亡霊どもから名前とスローガン戦闘用語と衣装をかり、この由緒ある扮装と借物のせりふ」(同上) によって

⁴⁶ Frisch, Max. *Die chinesische Mauer* GW II, 453.

⁴⁷ Ebd.

⁴⁸ Sturm und Drang : 19 世紀末ドイツの文学運動。硬直した啓蒙主義に抗して感情の解放と独創性を重視。

⁴⁹ Best, F. Otto *Handbuch literarischer Fachbegriffe* Fischer Taschenbuch Verlag, 1972, 172

⁵⁰ マルクス, カール著 伊藤新一 北条元一訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』岩波文庫 1954, 17.

⁵¹ 上村邦彦「マルクスにおける歴史認識の方法ー『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』」、『関西学院大学経済論集, 47 (5)』1997, 15.

挙動する。同様にフリッシュの『万里の長城』は、歴史的人物が時代を超えて再登場するという構図を持っている。しかし主題と背景、目的と手段の関係が『ブリュメール』とは異なる。マルクスは、社会変革の歴史のパラドクスを、ファルスという文学形式によって記述した。しかしフリッシュは、高度に啓蒙的であると自負する現代人の理性の矛盾を、歴史的人物の亡霊が登場するファルスを通して語っている。

2.2.3. 喜劇との相違

ファルスと喜劇との違いは、デュレンマットの戯曲『物理学者たち—喜劇』(*Die Physiker eine Komödie* 1962) と比較してみると明らかである。デュレンマットは、フリッシュと同様に核兵器を生み出した科学技術的精神の破滅的な成り行きを真正面に見据えてこの作品を書いた。この喜劇は、エリート物理学者の名を冠された精神病棟の患者たちの、殺人を含めた常軌を逸した行為を通して、核支配の世界的危機を告発している。物語の結末では、彼らを治療している病院長自身の狂気が、世界の支配に向かうと言う「起こり得る最悪の方向転換」がなされる。デュレンマットは、この戯曲の補稿の中で、「起こり得る最悪の方向転換は予見できない、それは偶然によって生じる。」⁵² と述べ、作品が喜劇であることを理由づけている。これに対しフリッシュの『万里の長城』は、世界の破滅という「起こり得る最悪の方向転換」が偶然によるのではなく、現代人の啓蒙的な理性によって引き起こされることを描いている。このためフリッシュは、『万里の長城』のジャンルを悲劇ではなくファルスとした。

2.3. 演じられる場と登場人物のトポロジー

フリッシュは比較秤量が不可能な事態をファルスの構成要件として指摘しているが、『万里の長城』においてその事態が生じるのは、始皇帝の宮廷とその仮面舞踏会の二つの演技空間である。物語の展開は第一の演技空間である宮廷で進行し、主要な登場人物は、始皇帝、王女、王子、耳の不自由な貧農とその母である。第二の演技空間は並行して進行する仮面舞踏会であり、ここに登場する人物は、ロミオとジュリエット、ナポレオン、コロンブス、セーヌの無名の女、ポンテオ・ピラト、ドン・ファン、ブルータス、スペイン王フィリップ、クレオパトラ、エミール・ゾラ、イワン雷帝、アンリー・デュナン、乞食、正装の紳士二人である。第一の演技空間で演じられるのは、始皇帝に処刑される農民と始皇帝の破滅の悲劇であるのに対して、第二の演技空間である仮面舞踏会の登場人物たちは、古代ギリシャ演劇におけるコロス⁵³の役目を果たしている。彼らは、コロスとして宮廷での事件の進行とは直接関係しないが、それぞれが歴史的人物の名のもとに持論を展開す

⁵² デュレンマット、フリードリヒ著 山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』「物理学者たち」鳥影社 2013, 398.

⁵³ ギリシャ劇において、筋の直接の展開から離れて、解説者や批判者として劇に参加する俳優の一群。部隊の袖に合唱隊として立つことが多い。

る。

作品の舞台の外縁には、万里の長城の建設と、そこに酷使される農民の窮乏化、塞外の蛮族の脅威とその掃討、人民の叛乱という状況が進行している。舞台上で演じられる世界は二重の構造であるが、物語は、その背景を入れると三重の構造をなしている。すなわち始皇帝時代の中華世界、その中心にある公共圏としての宮廷、その中で歴史上の人物が仮面こんにちびとで登場する舞踏会である。この三重の構造の世界を通して登場するのは今日人である。彼は、現代物理学の最先端の知識に精通し、水爆の理論とその破壊力の絶対性を理解し怖れる知識人である。この今日人の登場により、作品の世界は、現代を包含する四重構造の世界像となり、現代の世界に進行している物語となっている。第二の演技空間に登場する登場人物名は次の4つのグループに分類できる。

- ① 歴史的に実在した政治的な専制者 (ナポレオン、スペイン王フィリップ、クレオパトラ、イワン雷帝)
- ② 歴史の狭間で真実や正義を求め、懐疑した非政治的な名称群 (ポンテオ・ピラト、コロンブス、エミール・ゾラ、アンリー・デュナン)
- ③ 人間の情感を描いた文学作品上の悲劇、喜劇の主人公 (ロミオとジュリエット、ドン・ファン)
- ④ 現代的市民 (無名のセーヌの女、乞食、正装の紳士)

読者や観劇者は、これらの人物名の一人一人の背後に、現実に繰り広げられる始皇帝の宮廷に比肩する物語空間が存在していることを意識する。この時点で、『万里の長城』は、眼前の二重の演技空間から、時空を超えた多次元の物語空間に変貌する。仮面舞踏会の登場人物の集合体については、初演当初から議論を呼び、フリッシュ自身がその意味について言及した書簡が残されている。⁵⁴ それによると、登場人物名は歴史的に実在した人物とは無関係であり、現代人の日常性の中に潜む意識の写像であると述べられている。フリッシュは、現代人が脳裏に住み着いている歴史的な人物の写像すなわち偶像に対して、立ち向かうことを意図しているとして次のように述べている。

Ein freundlicher Leser der Druckbogen schreibt (zustimmend) von einer „Bibel-Parodie“ und das wäre genau, was der Verfasser keineswegs will. [...] Ein Heutiger, irgend ein durchschnittlicher Intellektueller als Teilhaber am heutigen Bewußtsein, tritt den Figuren gegenüber, die unser Hirn bevölkern: Napoleon, Cleopatra, Philipp von Spanien, Brutus, Don Juan, Inconnue de la Seine, Columbus, Romeo und Julia und so fort[...]⁵⁵

⁵⁴ Frisch, Max. *Wo spielt unser Stück*. GW II, 217-19.

⁵⁵ Frisch, Max. „Zur Chinesischen Mauer“ In *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge* Band Suhrkamp Verlag 1976, 224.

この作品について、聖書のパロディであると書いている愛すべき読者がいるが、まさにこれこそ作者が決して意図していないことである。[…] 作品に登場する今日人は、現代的意識の持ち主である平均的な知識人であり、その彼が我々の脳裏に焼き付いている人物像であるナポレオン、クレオパトラ、スペイン王フィリップ、ブルータス、ドン・ファン、セーヌの無名の女、コロンブス、ロミオとジュリエット、等に立ち向かうのである […]

これらの登場人物の名は、作品内の世界を構成する意識の写像すなわち偶像の名辞として単純に借用されているのではない。読者や観劇者が作品の世界の中に入り込んだ時、その世界の内の諸要素（人物）に対して「立ち向かうべきである」ことに注意を向けるための仕掛けである。ナポレオンの権力という抽象的な概念に対抗できなくても、眼前のナポレオンは、対峙の対象として認識できるのである。フリッシュは、後年「私には理論はない」⁵⁶と語っているように、『万里の長城』は何らかの啓蒙理論や哲学を含意するものではない。現代人の内面を支配している啓蒙的理性が創り出す偶像群を批判的に描いているのである。

2.4. 啓蒙の精神の構造性

読者や観劇者は、今日人とともに脳裡にある仮面舞踏会の登場人物の像に対峙する。登場人物の集合は雑多な人物の寄せ集めではなく、意味のある構造をなしている。その構造は、作品が批判しようとしている啓蒙の精神の構造を反映している。啓蒙とは合理的、科学的であることであり「感情や衝動を、『線や面、あるいは立体について問題にするかのように』考慮する」⁵⁷のである。仮面舞踏会の登場人物は、現代人の啓蒙の精神を構成する集合の要素である。この登場人物の集合は、無秩序ではなく前述の4グループ、権力、正義、愛、市民性といった下位集合から形成されている。無秩序な感情は、啓蒙の立場からは卑俗なものとして放逐されなければならない。⁵⁸ 仮面舞踏会は、人間精神の隠喩であると解釈できるが、そこへの登場人物に歴史上の著名な人物の名を冠することによって、人間精神の虚飾がなされている。正義の判断から逃避する感情にポンテオ・ピラトの名を付す必然性はない。真理の発見を懐疑するのはコロンブスに限ったことではない。権力を好む女性の感情はクレオパトラだけのものではない。フリッシュは、登場人物の名に必然性がないことに注意を喚起している。「権威や階層的秩序が啓蒙の立場からまやかしてされて久しい」⁵⁹ ことを逆手に取った巧妙な啓蒙批判が、作品の構造自体に込められている。フリッシュが指摘する「脳裏に焼き付いている人物像」とは、その人物の実体像で

⁵⁶ Frisch, Max. *Schwarzes Quadrat*: Suhrkamp Verlag, 2008, 19

⁵⁷ ホルクハイマー、アドルノ著 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波文庫 2007, 187. (Spinoza *Ethica*)

⁵⁸ 同上, 196.

⁵⁹ 同上, 129,

はない。正義のためなら暗殺も辞さない狂信的な心の有り様が、ブルータスとして現代人の脳裏で偶像化されて焼き付いているのである。この偶像化自体が啓蒙的理性の所産であるが、産出された偶像群は啓蒙的理性によって構造化される。仮面舞踏会は、こうした偶像に満たされた現代人の精神の隠喩である。

2.5. 啓蒙の悲劇としてのファルス

この仮面舞踏会の参加者は、絶対権力者である始皇帝の宮廷に招かれ、ポロネーズの単純で画一的な円舞に加わるよう急き立てられる。啓蒙的精神の構造化は外部からの専制的な力によってますます強固にされようとしているのである。今日人は、始皇帝の絶対的な専制権力も現代の核兵器の前には無力であると説くが理解されない。啓蒙を自負する始皇帝の宮廷は内部からの反逆によって瓦解し、それとともに仮面舞踏会の秩序も崩れ去る。しかしポロネーズを整然と踊っていた登場人物たちは生き残り、語り続ける。ブルータスの正義感、あらたに市民を殺戮する。コロンブスは、自分の発見したのはインド大陸ではないのではないかと疑い続ける。クレオパトラは、権力者を求め続ける。ナポレオンはなおロシアの制圧を夢見る。スペイン王フェルディナンドは、異端裁判の正当性の主張を捨てない。ポンテオ・ピラトは、正義の裁判を逡巡しつづける。この硬直した精神の構造化に對置して、フリッシュは、ロミオとジュリエットを登場させている。二人は普通の市民の感性や人間愛の隠喩である。物語は死を前にしたロミオの叫びをシェークスピアから引用して終わる。

ROMEO Wie oft sind Menschen, schon des Todes Raub, Noch fröhlich worden.
O mein Herz! mein Weib! Bald ist die Welt einzig Grab. Ihr Augen, Nehmt
euer Letztes! Arme, nehmt die letzte Umarmung! Und so, im Kusse, sterb
ich ⁶⁰.

ロメオ 死が襲ってくると言うのに、人間はなんと朗らかになるものだろう。
私の 恋人よ！私の妻よ！もうすぐ世界はひとつの墓場になる。目よ、最後を見届けよ。かいなよ、最後の抱擁を楽しめ。そうして、口づけの中で、私は死んでいく

ロミオとジュリエットが逃れようとしているのは、自由であるべき啓蒙的人間が、円舞の環に入るように強制されている仮面舞踏会である。伴奏されるポロネーズを命令するのは、専制者である始皇帝であるが、その破滅にも拘わらず、ブルータスをはじめとする理

⁶⁰ Frisch, Max *Die chinesische Mauer* GW II, 216

シェークスピア『ロミオとジュリエット』からの引用

How oft when men are at the point of death have they been merry! [...]

Eyes, look your last! arms, take your last embrace! and, lips, O you the doors of breath, seal with a righteous kiss (Shakespeare *Romeo and Juliet* AMERICAN BOOK COMPANY 1907 P.145-146)

性の巨人たちは楽天的に語り続ける。ロミオは、啓蒙の合理性の先にある世界の破滅を予感するなかで、ジュリエットへの最期の愛を語り掛け、舞台は幕を閉じる。『万里の長城』のファルスは、啓蒙の悲劇を予言している。フリッシュは、現代の啓蒙的人間である今日人も阻止しえない始皇帝の宮廷の破滅の中に、ロミオとジュリエットの愛に希望を託している。

第3章 啓蒙と科学技術的精神 『ホモ・ファーバー：報告』(Homo faber Ein Bericht 1957)

3.1. 科学技術批判の文体論的考察

フリッシュは、戯曲『万里の長城—ファルス』(1947)において展開した啓蒙的精神に対する批判を、10年後の長編小説『ホモ・ファーバー：報告』(Homo faber Ein Bericht 1957)において、主人公の科学技術的な啓蒙精神の破綻を描くことにより、より先鋭化させている。⁶¹ しかし、サブタイトルである「報告」は、「小説」のジャンルの中には収まらない言説の形態であり、そこに作者が込めた意図を考察することは、作品の解釈にとって重要な意味がある。本章では、時間、空間的に入り組んだ物語の構造と意味を読み解くため、主としてミハイル・バフチンのジャンル論⁶²を参考にし、『ホモ・ファーバー：報告』の文体構造の特徴が、フリッシュの科学技術的精神批判すなわち啓蒙批判の特徴と呼応していることを明らかにする。併せて、作品のテキストとタイトル、サブタイトルの関係を説明し、「報告」(Ein Bericht)が文学として成り立つかの可能性を検証する。

前章で述べたように『万里の長城』のサブタイトル「笑劇」(Farce)は、作品の舞台である始皇帝の宮廷に歴史的に実在した人物が、時間秩序を破って登場する設定のカオス性において、作品の内容と一致し、ジャンルを指定している。フリッシュは、主要な作品の殆どすべてにサブタイトルを付しているが、その18例中12例は、ロマン(Roman)、小説(Erzählung)、Farceなどの文学におけるジャンル名である。例えばMONTAUKのサブタイトルはErzählungであるが、主人公がer(彼)である物語は、徐々に語り手ich(私)の自伝的告白へと、とって替わられていく。この作品のジャンルは、実質的には「自伝」(Biographie)であり、「小説」としてジャンルの偽装がなされている。こうしたことから、『ホモ・ファーバー』のサブタイトルの「一つの報告(Ein Bericht)」が、文学のジャンルとして付されたかは検証する余地がある。中野孝次は、『ホモ・ファーバー』の日本語訳のタイトルを『アテネに死す』とし、原書のタイトルとサブタイトルを無視した。しかし、フリッシュがこの翻訳タイトルを不満に思っていることを知り、原題を付して『Homo faber アテネに死す』と改題したが、⁶³ サブタイトルの「一つの報告(Ein Bericht)」は復活させていない。一方、増本浩子(2003, 130)は「[...] そして自分自身の内省のために書いた

⁶¹ 川合正紀「マックス・フリッシュ『ホモ・ファーバー』考」慶応義塾大学文学部卒業論文 2015
<http://kodayoshiki.sakura.ne.jp/pdf/kawai20160909.pdf>

⁶² バフチン、ミハイル著 伊東一郎訳『小説のことば』平凡社 1996, 12-81.

⁶³ フリッシュ、マックス著 中野孝次訳『アテネに死す』白水社 1991, 321.

《報告》 […] がこの作品のサブタイトルであり、このサブタイトルがすでに主人公の理系人間らしさを表現しているという体裁をとっている。」⁶⁴ と述べ、中野とは異なりテキストとサブタイトルの密接な関係性を認めている。しかし作品のサブタイトルである「報告」は、主人公の科学技術的性格を描写するための小道具ではない。それは、物語の意味と構造にとって重要な役割果たしていることを以下に考察する。

3.2. 「報告 (Bericht)」は提喩かジャンルか

作品のタイトル「ホモ・ファーバー」⁶⁵ は、技術者である主人公・ワルターに妻のハンナが皮肉を込めて付けたあだ名に由来している。作品の核になる事件は、ワルターと娘ザベートが陥った悲劇的な近親相姦である。副題は「報告」であるが、作品はあくまで小説である。小説『ホモ・ファーバー』とサブタイトル「報告」との関係については、二つの解釈の可能性を指摘できる。一つは、サブタイトルの「報告」は、悲劇の当事者である語り手はその真相を報告しようとする作品内容の提喩であるとする解釈である。もう一方は、本作品の副題の「報告」は文学としてのジャンルを、作者の立場から表明したとする解釈である。

第一の解釈は、悲劇的な事件を、科学的に回想し報告しようとする主人公の行動に焦点を当てている。それは、ハザード・アダムス (Hazard Adams 1987 P.7) が、文学作品とタイトルの関係について「タイトルは作品の一部である：それは些少であるが中心的である。そして常に提喩である」⁶⁶ と指摘している立場と一致している。第二の解釈は、事件の真相を伝えようとする語り手、または作者の目的を反映している。「報告」は、ジャーナリズムでは一定のジャンルをなしているが、フランツ・ジムラー (Franz Simmler 1993, 352) は「報告 (Bericht) は順序だて、因果関係に基づいて情報を提供する報道である。その言葉には実務的な明瞭性の他に、語り手の生の体験要素が必須であり、いかなる幻想的産物 (ファンタジー) もあってはならない。」⁶⁷ と述べている。これに依れば、『ホモ・ファーバー』は、物語の時間的順序が輻輳し、語られる事件の因果関係も不明であることから、「報告」のジャンルには入らない。しかし語り手は、自己の生々しい特異な体験を、ファンタジーを排除して語ろうとしている点では「報告」であるといえる。従って、作品のサブタイトルの「報告」(Bericht) は、提喩とジャンルの双方の意味を有している。

これまで、Bericht「報告」が文学ジャンルの一環をなすとの論考はなされていない。しかし旅行記 (Reisebericht) は、旅行小説 (Reiseroman) と同様に旅行文学 (Reiseliteratur) に

⁶⁴ 増本浩子「ホモ・ファーベルとオディプス神話」『姫路獨協大学外国学部紀要 16』2003, 130

⁶⁵ homo sapiens が人類の学名であるのに対し、homo faber は「技術者としての人間」というギリシャ以来の哲学的概念である。分類的な意味としては、技術的・実際に活動するタイプの人間を指し、思索的なタイプの人間から区別される。

⁶⁶ Adams, Hazard "Titles, Titling, and Entitlement To" In *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 46, No. 1 (Autumn, 1987), The American Society for Aesthetics. 1987, 7-21.

⁶⁷ Simmler, Franz „Zum Verhältnis von publizistischen Gattungen und linguistischen Texts“ *Zeitschrift für Germanistik, Neue Folge*, Vol. 3, No. 2, 1993, 352.

含まれる文学ジャンルであると見做され⁶⁸ ダスカル・ロミタン (Dascalu-Romitan 2005, 333-42.) の先行研究がある。⁶⁹ フリッシュは、第二次世界大戦の戦中と戦後に多くの旅行記を発表しているが、それらの一部は、『ホモ・ファーバー』のテキストに直接間接に引用されている。『ホモ・ファーバー』は、ニューヨークを出発地としアテネに終わる長途の旅行記と見做せるため、作品の文学ジャンルを旅行記とすることは可能である。旅行記は、旅を通して得られる多様な他者性 (Fremdheit) の受容を、事件や経験を通して伝えるものであり、「既知なる自己 (Eigenheit) を未知なる他者に対置することによって語られる。」⁷⁰ とされる。フリッシュの初期の報告のテーマとなる他者性は、未知なる事物、異質な事物として、自分とは地理的、文化的、社会的に別の世界において立ち現れている。これに対して『ホモ・ファーバー』は、自己の近親相姦という悲劇的な事態を、内なる世界の他者性として報告の対象にしている。他者性の背後にある真相 (Wahrheit) の描写を巡って、語り (Erzählung) と報告 (Bericht) のどちらが有効かという問題が、特にジャーナリズムにおいて重視されているが、⁷¹ それはとりもなおさず文学の主要課題でもある。語り (Erzählung) である『ホモ・ファーバー』のサブタイトルにジャーナリズム的なジャンルである「報告」を用いた作者の意図は、主人公の内に出来^{しゅつたい}した悲劇的な他者性の真相を、正しく読み手に伝えようとする試みの表明である。しかし「報告」をジャンルとすることは、意味の解釈からだけではなく、作品の構造と文体からの検証が必要となる。

ジャンルと文体との関係についてはミハイル・バフチンが『小説の言葉』(伊東訳 1996) の序のなかで、「言葉を […] 社会的な現象として理解するならば、形式と内容はその中に統一されている」として、ジャンルの文体論の意義を次のように強調している。⁷²

文学がこのように芸術化してみずからのものとしてきた、時間的關係と空間的關係との本質的な相互連関を、ここでは、クロノトポスと呼ぶ(「クロノトポス」とは、文字通りに訳せば「時空間」である) […] 文学における時空間は、文学の各ジャンルを決定するうえで本質的な意義をもつ。なぜなら、文学の各ジャンルのあり様を決定するのも、一ジャンル内の各下位ジャンルを決定するのも、まぎれもなく時空間だ、と端的に いえるからである。⁷³

『ホモ・ファーバー』のサブタイトルである「報告」を、ジャンルと見做すためには、作品内容と作品を構成するクロノトポスとの統一に、矛盾があってはならないことになる。

⁶⁸ Burdorf, Dieter *Metzler Lexikon Literatur* J. B. Metzler Verlag Stuttgart 2007, 640

⁶⁹ Dascalu-Romitan, Ana-Maria „Methoden und Verfahren der Fremddarstellung in Reisebericht“ In *Temeswarer Beiträge zur Germanistik* 12. Temeswar 2015, 333-42.

⁷⁰ Ebd., 334.

⁷¹ Martinez, Matias *Erzählen-Ein interdisziplinäres Handbuch* J.B.Metzler Verlag, Stuttgart 2017, 124.

⁷² バフチン、ミハイル著 伊東一郎訳『小説のことば』平凡社 1996, 8

⁷³ バフチン、ミハイル著 北岡誠司訳「小説における時間と時空間の諸形式」『ミハイル・バフチン全著作第5巻』水声社 2001, 144

換言すれば、悲劇の真相を伝達しようとする目的の物語が、報告の形式であるクロノトポスと整合しているかが問題となる。主人公の語り口である文体では、真実を伝えようとする目的を達成できていない。物語の結末は主人公の破綻である。この破綻を作品の内容と形式から考察する。

3.3. 作品の文体とクロノトポス

本作品に関する従来の文体論は、主としてサブタイトルの「報告」との関連においてなされている。ペーター・ピュッツ (Peter Pütz 1978 P.124) は、主人公の語り口を技術者の未熟な報告と同列視し、次のように指摘している。

Der Techniker mißachtet Romane und exaltierte, d.h. unexakte und vom Üblichen abweichende Empfindungen und Metaphern; er erzählt nicht, sondern berichtet: Der Untertitel von *Homo faber* heißt: "Ein Bericht". Dessen Stil prägt Syntax und Sprachton in ihrer dem Üblichen angemessenen Wiederholungsstruktur. Der Satzbau ist parataktisch; die Mitteilungen sind additiv gereiht, nicht gegliedert, sondern aufgezählt, nicht einander zu-, sondern nachgeordnet.⁷⁴

(主人公の) 技術者は、小説のように誇張され不正確で日常性からかけ離れた感覚やメタファを軽蔑している；彼は物語ることはせず、報告するのである。その文体がもたらす意味とニュアンスは日常性に則った繰り返しの構造の中に刻み込まれている。文の構成は、並列的であり、伝えるべきことは積み上げられるが分類されないままに列挙され、順序良く整理されずに次々と追加される。

また岡本 (2000, 134) は、報告者としての語り口が事実の表面的羅列にすぎないとして、文体の特徴を単語の特徴に求めて以下のように述べている。

「報告」という副題が示すように、過去の出来事を事務的に記述しようとしている。報告者である語り手は、形容詞や修飾語の少ない表現で表面的な事実を記録する。語り手は自分の過去を、彼個人の体験としてではなく、単なる表面的事実を羅列し、[...]自分の感情については触れられない。[...]これは、語り手が自分自身を[...]「ホモ・ファーバー」と認識している態度と一致している。彼の文体は特殊な単語の使用や俗語によって特徴づけられる。[...]商品名、固

⁷⁴ Pütz, Peter „Das Übliche und das Plötzliche Über Technik und Zufall im *Homo faber*“ In *max frisch aspekte des prosawerks* Verlag Peter Lang AG. Bern 1978, 124.

有名詞を挙げることによってそれが単なる手段ではなく、それ自身の存在が彼と一体化している印象を与える⁷⁵

共に作品の文体の特徴を、「技術者が語る文」を前提として羅列的で事務的であるとしている。単語と文章の特徴は、文体にとって重要な要素であるが、『ホモ・ファーバー』の文体が、主人公ワルターが技術者であることだけから論じられる限り、その文体論は、ジャンル論に敷衍されることはない。文体と意味、形式と内容が対等な関係において統一されていることがジャンルの要件である。この統一は、作品が語られる世界のクロノトポスの中で、バフチンの指摘する「時間的關係と空間的關係との本質的な相互連関」⁷⁶においてなされる。

語り手である主人公は、作品の冒頭部において、自分が啓蒙の最先端を行く科学技術的人間であるとして、その信念を宣言する。それは、自分が経験した深刻な悲劇は、摂理や運命を排除したうえで、確率論によって、数学的に説明できるという信念である。

Ich glaube nicht an Fügung und Schicksal, als Techniker bin ich gewohnt mit den Formeln der Wahrscheinlichkeit zu rechnen [...] Es war mehr als ein Zufall, daß alles so gekommen ist, es war eine ganze Kette von Zufällen. Aber wieso Fügung? Ich brauche, um das Unwahrscheinliche als Erfahrungstatsache gelten zu lassen, keinerlei Mystik; Mathematik genügt mir.⁷⁷

私は、摂理とか運命を信じない、技術者として確率公式で計算することに慣れているのだ。[...]すべてがこうなったのは、一つの偶然以上のもの、つまり偶然の連鎖だったのだ。摂理とは一体何なのだ？あり得べからざることを体験的な事実として認めるためには神秘性など必要ない：数学があれば充分である。

確率の世界は、時間と空間の次元を持たない無次元量の抽象的なトポスの世界である。そこでは、少なくとも時間が主導的な原理として働くことは無い。書き手のフリッシュは、語り手である主人公ワルターの信念からは、その回想の記録が、「クロノトポス（時空間）」を前提として成り立つ文体を構成しえないことを、冒頭から示唆している。しかし『ホモ・ファーバー』は、あくまで文学作品である。そこには、クロノトポス的構造がなくてはならない。作者が語る世界のクロノトポスの必然性と、主人公が語る世界のクロノトポスの否定とは矛盾している。フリッシュは、この矛盾を、作品のクロノス（時間的關係）の重層性と、トポス（空間的關係）の多様性によって解消しようとしている。

⁷⁵ 岡本亮子『マックス・フリッシュの小説世界』芸林書房 2000, 134.

⁷⁶ バフチン、ミハイル「小説の時空間」新時代社版『ミハイル・バフチン著作集』2001,7

⁷⁷ Frisch, Max. *Homo faber* GWIV, 22.

3.4. 『ホモ・ファーマー』におけるクロノトポスの特徴

3.4.1. クロノトポスのモザイク的重層構造

フリッシュが1956年に出版社Suhrkamp に提出した『ホモ・ファーマー』の初稿は、前作『シュティラー』(1954)と同様に直線的な時系列に沿って展開する物語であった。しかし、フリッシュはこれを全面的に書きあらため、モナ・クナップ (Mona Knapp 1986, 570)によれば、「時間層の複雑なメッシュ構造」の作品となった。⁷⁸ 物語は、回想記と手記の二部から構成されている。カラカスで書かれ回想記「第一のステーション(Erste Station)」(以下「カラカス回想」とする)では、主人公のニューヨークからの出発に始まり、娘ザベートのアテネにおける死までが語られる。アテネで書かれた手記「第二のステーション(Zweite Station)」(「アテネ手記」とする)には、アテネの病室における自身の死直前までの次時々刻々の事態の推移の記録と別れた妻ハンナとの対話がイタリック体で書かれ、その中にゴシック体で書かれたカラカス以降の旅の回想が挿入されている。この回想記と手記の二つは、それぞれさらなる回想、すなわち回想の中の回想、科学的、哲学的、社会的な様々な言説を内包する。例えば、親友ヨアヒムのガテマラの密林での縊死事件は、カラカス回想においては、時間の流れに沿った一連の事件の一部として事実だけが語られるが、その仔細は他の事実の回想、すなわち太平洋航路の船旅の回想の中での回想として遡及して語られる。また、ザベートの死はカラカス回想の最後のプロットであるが、その死を取りまくコリントでの経緯と死因の真実は、アテネ手記の中での回想となっている。作品を特徴づける入り組んだ語りの構造は、クナップが指摘する時間相に限られた「メッシュ構造」に止まらず、時間層と空間層の両者が入り込んだクロノトポス(時空間相)全体の「モザイク的重層構造」となっている。入り組みは、時間的順序だけではなく、太平洋とガテマラ、アテネとコリントのように空間的な関係にも見られるのである。さらに「モザイク的重層構造」においては、語られる器としての回想に対して、その中に組み込まれる別の回想は、語り手の意識の層に生起した表象であり、語り自体の時空間とは次元を異にしている場合がある。例えば、太平洋航路の船上のクロノトポスで、それとは知らずに娘ザベートに惹かれる思いと、ガテマラの密林のクロノトポスで旧友の縊死体を葬る心情とは、意識の異なる層における表象である。物語のクロノトポスの重層構造は、時間の層と空間の層に意識の層を加えた三次元の「モザイク的重層構造」をなしているのである。

3.4.2. 時間性の欠落

語り手である主人公は、アテネの病室のベッドに死を予感しながら臥し、次のように述懐する。

⁷⁸ Knapp, Mona "Tempus Fugit Irreparabile: The Use of Existential versus Chronological Time in Frisch's Homo Faber" In *World Literature Today*, Vol. 60, No. 4, University of Oklahoma 1986, 570-574.

Es ist kein zufälliger Irrtum gewesen, sondern ein Irrtum, der zu mir gehört (?) wie mein Beruf, wie mein ganzes Leben sonst. Mein Irrtum: daß wir Techniker versuchen, ohne den Tod zu leben. Wörtlich: Du behandelst das Leben nicht als Gestalt, sondern als bloße Addition, daher kein Verhältnis zur Zeit, weil kein Verhältnis zum Tod. Leben sei Gestalt in der Zeit.⁷⁹

それ（娘との相姦；訳注）は、決して偶然の過ちではなかった。私の職業や私の全人生などのように私に属する（？）ところの誤りだったのだ。私の誤り、それは、我々技術者が死のない生き方をしようとするところにあるのだ。まさにハンナが言うとおりのことである：あなたは人生を全体像として捉えず、ただの積み重ねとしか見ないのよ。そこには、時間に対する関係性がありつこないのよ、死に対する関係性がないのだから。人生というのは時間の中に立ち現れる全体像というわけか。

主人公ワルターは、持ち続けてきた確率論による自分の娘との過ちの正当化を放棄するが、過ち自体を自分の技術者としての人生に属するものだと一般化する。ハンナは、時間のくびきから人間を解放しようとする技術者の精神が、時間を対象化してしまうことの過ちを指摘する。彼女は、ワルターの過ちを、罪としては糾弾しない。啓蒙的知識人である二人であるが、罪と責任の追及を曖昧にしたまま、時間意識の欠如を人間一般の過ちとして理解し合おうとしている。バフチンは、「文学の場合主導的な原理として働くのは、空間ではなく時間である。」⁸⁰ と述べているが、『ホモ・ファーマー』で語られる時間意識の希薄なクロノトポスは、空間の主導にならざるをえない。ニューヨークを出発する航空機の客室から始まり、中南米大陸、大西洋、ヨーロッパ大陸を経てアテネの病院の一室で終わる物語は、空間が主導するクロノトポスの文体をなしている。この時間性が副次的である文体は、主人公の時間意識の希薄さの反映である。

3.4.3. クロノトポスの「繰り込み」

主人公は、ニューヨークからルアーブルに向かう大西洋航路の船上で自分の娘ザベートと出会い、悲劇の発端となるが、その回想の中に繰り込まれるのは、ガテマラの密林の踏破と旧友の縊死の現場の回想である。遠洋航海の大型客船は、現代技術のトポスであるが、熱帯密林の原初の自然のトポスを包含している。バフチンは「道」と「出会い」とをクロノトポスの価値化された典型として挙げているが、⁸¹ 『ホモ・ファーマー』では、

⁷⁹ Frisch, Max. *Homo faber* GWIV, 170

⁸⁰ バフチン, ミハイル著 北岡誠司訳「小説における時間と時空間の諸形式」『ミハイル・バフチン全著作 第五巻』水声社 2001, 144

⁸¹ 同上, 388

「道」は、モダンな大西洋航路と泥濘ぬかるみと悪臭のジャングルの道に、「出会い」は、澁刺とした少女ザベートとの出会いと、梁に吊り下がる旧友のヨアヒムの屍体との出会いに、クロノトポスの価値の二極分化が行われている。二極に分化された価値は、更に序列化され、一方が他方に繰り込まれている。すなわち、ジャングルの道は大西洋航路に、屍体との出会いは少女との出会いに繰り込まれているのである。

父娘の悲劇的な出来事は、二人がパリからアテネに向かう長途のドライブの途上で起き、「カラカス回想」の時系列的な流れの中では、ローマのホテルの一室でのアヴィニョンの夜の回想として語られる。パリのルーブルから始まりコリントの遺跡に終わる行程の途上、主人公は、まだ自分の娘とは知る由もないザベートの案内で美術、考古学、文芸等に関する知識を身に着けていく。その教養化の道程で生じたアヴィニョンでの悲劇は、主人公にとっては一様な語りの一環としては語りえない特異な体験である。それは、直接的体験の事実から距離を置いた意識の中での形象、回想の中での回想、一つのクロノトポスの中に繰り込まれた別のクロノトポスにおける出来事としてのみ語り得るのである。繰り込まれたアヴィニョンの回想のクロノトポスでは、殊更に月食の形象が天文学的に説明され、神秘や運命を予測させるクロノトポスの排除が主人公の科学技術的理性的理性によってなされようとしている。

3.4.4. クロノトポスの「交叉」

主人公ワルターは、胃がんの重症化のため入院したアテネの病室で、ザベートを失った後の一連の出来事を回想する。物語が進行する病室は、パフチンが「空間の内に時間を見て取る」と述べている価値化されたクロノトポスとしての「サロン」に対応している。⁸² その女主人は、悲劇の現実に冷静に向き合う喪服のハンナであり、ワルターの技術者としての世界観を巡る対話が、死に向かう時々刻々のメモとともに記録される。このアテネ手記には、ザベートの死以降の主人公の体験した出来事の回想が交叉して述べられる。その一つは、ハバナでの自然と女性と野生の息吹に晒された、心身の回生の回想である。主人公はそれまで自分を支配してきた「アメリカ的生き方」(*American Way of Life* ⁸³) を激しく嫌悪し、別の生き方をしようと決心している。更にはデュッセルドルフの会社におけるザベートの回想フィルムの上映である。高層ビルの一室に置かれたスクリーンの世界は、機械文明のクロノトポスであり、生前のザベートの回想のクロノトポスと交叉している。入院から手術が告げられまでの病室のクロノトポスの中で、現実の事態の推移と交叉して、主人公の意識の中にはフラッシュバックされたクロノトポスが生起する。この互いに交差する二つのクロノトポスに交点を見出すことがないまま主人公は死を迎える。

3.5. 「報告 (Bericht)」の限界

⁸² 同上, 392-94.

⁸³ Frisch, Max. *Homo faber* GW IV, 175.

主人公は、啓蒙的理性により、自分が生きているクロノトポスが確率的な因果律が支配する単純で一様な時空間であると確信してきた。そのため、自身と娘との間に生じた理解しがたい悲劇の真相を語ろうとする試みは、クロノトポスが輻輳する文体からなる手記と回想記となって残される。彼の最大の過ちは、自己の単純な世界観つまり確率的因果観から抜け出せないまま、それらの手記と回想を省察しなおすことなく、責任意識の自覚のないまま、死を迎えてしまうことである。主人公は、自己のうちに生起した未知なる他者性の背後にある真相に迫ろうとし、その言説の形式として、虚構を排除した「報告」を選択した。その試みは破綻するが、それが破綻であることは、語り手である主人公には意識されない。語り手が意識できない破綻は、作者が語り手を抹殺することで読者に顕示されている。真実を語ろうとして主人公が採用した「報告」という文体は、真実の解明に至らず、主人公に罪と責任の自覚も齎すことがない。フリッシュは後になって、真実はフィクションによってのみ語り得るとして、次のように述べている。

Die Wahrheit kann man nicht beschreiben, nur erfinden[···] ⁸⁴

真実は描写され得ない、創作されるのみである。

Die Fiktion entlarvt unsere Erfahrung der Realität[···] ⁸⁵

フィクションが真実の体験を暴き出す

サブタイトルの「報告」(*Bericht*) はジャンル指定ではなく、テキストの語りの限界を暗示する反語である。フリッシュは、啓蒙的言説としての「報告」よりフィクションの方に、人間の生の実相を解明する力を認めているのである。それは、フリッシュの文学的真実に対する生涯の確信となる。

第4章 啓蒙の啓蒙 『人間は完新世に生まれた』 *Der Mensch erscheint im Holozän* 1979

4.1. 多様な解釈

『人間は完新世に生まれた』(*Der Mensch erscheint im Holozän* 1979) (以下 *Holozän* と略記する) は、フリッシュの晩年の作品の一つである。題名は、人類史の時代区分名を含み、彼の作品群の中では例外的に文の形式をもつ。地球史における人類の誕生は、「更新世 (Pleistozän)」であり、「人間は完新世に生まれた」という言明は科学的事実には反しているが、題名には人間と世界との関係について問いかける作者の意図がこめられている。ジェフリー・スケルトン(Geoffrey Skelton) が *Man in the Holocene* ⁸⁶と英訳したのは、

⁸⁴ Frisch, Max. *Schwarzes Quadrat* Suhrkamp Verlag.2008, .28

⁸⁵ Ebd., 30

⁸⁶ Frisch, Max (Translator) Skelton, Geoffrey David. *Man in the Holocene* Dalkey Archive Press 2007

「主人公は、完新世の人間として、自分と世界の間を認識している」との解釈を込めてなされたものである。

主人公は、南スイスの山荘で長引く天候不順の中、外界から孤立し認知能力の衰えとともに死に向かう一人の老人である。文体は、感情移入のない記録体となっており、物語と言うより 報告 (Bericht) である。作品を巡っては、死に対する作者の不安を反映した自伝であるとの解釈をはじめとして、人間の死と自然のカタストロフィの類似、啓蒙の破綻等がテーマであるとして解釈されてきた。⁸⁷ ザビーネ・シュナイダー (Sabine Schneider 2012, 244) は、「彼 (主人公：筆者註) は、失意に落ち込んだ啓蒙的人間であり、本来比較秤量できない事物を断定的な平叙文で捉えようとしている」(Er ist ein ins Klägliche verrutschter Aufklärer, der mit feststellenden Aussagesätzen das schlechthin Inkommensurable dingfest machen will. ⁸⁸) と述べている。 *Holozän* には、際立った事件のプロットはなく、感情や省察の記述に乏しいが、多様で深遠な解釈や受容がなされてきた。

4.2. 解釈・受容の変遷

作品が発表された 1979 年内に、二つのドイツの代表的な総合雑誌が、対照的な書評を掲載している。総合評論月刊誌 *Merkur* が掲載した書評「高揚なき老年：マックス・フリッシュの最近作 (Alter ohne Revolte: Max Frischs neue Erzählung)」は、次のように結ばれている。

Max Frisch hat mir den Raum der Altersexistenz von innen gezeigt: Resignation, fast nichts von Revolte. Schonungslos wird das Grauen des Alters enthüllt; der erschütternde Reduktionsprozeß bis hin zu jener stillen Geduld im Warten auf den Tod. ⁸⁹

マックス・フリッシュは老いた者の存在空間を内側から語っている：そこにあるのは高揚なき諦念である。老境の過酷さが容赦なく暴露されている；それは死を待つだけの静かな忍耐に至る恐るべき退行である。

筆者である作家 ライナルト・ゲッツ (Rainald Maria Goetz) は、主人公の死の様相が

⁸⁷ Haneborger, Lübbert Max *Frisch Das Prosa Spätwerk* Norderstedt 2008.

Müller, Claudia „Das Subjekt verscheindet im *Holozän*“ In *Ich habe viele Namen München* 2009.

Stobbe, Urte „Evolution und Resignation.Zur Verbindung von Klima-,Erd-und Menschheitsgeschichte in Max Frischs *Der Mensch erscheint im Holozän*“. In *Zeitschrift für Germanistik. Vol.24, No.2 2014* et al.

⁹⁸ Sabine Schneider „Stille Katastrophen *Der Mensch erscheint im Holozän*“ In *Man will werden, nicht gewesen. Zur Aktualität Max Frischs*. Chronos Verlag Zürich 2012, 244.

⁸⁹ Goetz, Rainald Maria „Alter ohne Revolte: Max Frischs neue Erzählung“ in *Merkur: Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken Heft 376*, Klett-Cotta Verlag Stuttgart 1979, 918.

自然のカタストロフィと対比して語られるとして、その背後にある主人公の思想は語られていないことを指摘している。その後の *Holozän* の受容と研究は、この語られてない思想についての考察の歴史であると言える。同年、スイスの評論家であるウルス・イエニイ (Urs Jenny) は、総合週刊誌 *DER SPIEGEL* 誌上に書評「ガイザー氏の自然カタストロフィ (Herrn Geisers Naturkatastrophe)」を寄せ次のように述べている。

[...] entwickelt er auf diesem kleinen Terrain eine Geschichte, die jenseits ihrer lächerlichen Banalität eine einsame, eisige Größe hat. [...] Frisch bis zuletzt, auch in der Dämmerung von Wahnsinn und Untergang, seinen Helden nicht denunziert und nicht im Stich läßt, diesen tapferen Don Quichotte in der Antarktis des Bewußtseins.⁹⁰

「[...]」彼(フリッシュ：訳注)はこの小さな土地での話を展開しているが、そのつまらない平凡性の背後に孤独で冷たい大きなものが隠されている。[...] 意識が混濁し終末に向かう薄明の中の主人公を、フリッシュは告発したり、見捨てたりはしない。この意識と言う南極大陸の勇敢なドン・キホーテを。

イエニイは、主人公のカタストロフィを老齢によるものとは見做さず、理性の退嬰状態に残された誇大妄想であるとしている。このように、本作品は発表と同時にドイツの二つの主要な総合雑誌によって対照的に評論されたが、読者からは大きな反響を得ていない。政治性に欠けるフリッシュの晩年の作品は、世間から受容されなくなっていた。その後、フリッシュの作家としての矜持に理解を示す *Holozän* の作品解釈が、作家の生誕地スイスにおいて出現する。作品発表3年後の1982年にドイツ文学者ゲルハルト・カイザー (Gerhard Kaiser 1982 P.46) は、スイスの総合月刊誌 *Schweizer Monatsheft für Politik, Wirtschaft, Kultur* に寄せた論文で次のように述べている。

Frischs Erzählung wartet auf ihre Entdeckung als Endspiel über ein klassisches Problem im Welt- und Selbstverständnis des Menschen. Wahrzunehmen ist [...] Wie verhalten sich zueinander Sein und Bewusstsein, Sein und Dasein, Natur und Geist, Geschichte als Geschehen und als Deutung von Geschehen usw.⁹¹

フリッシュのこの小説からは、人間の世界認識と自己認識における古典的な問題に関する終局の発見を期待できる。[...] そこから読み取るべきことは、存在と存在認識、存在と現存、自然と精神、出来事としての歴史と出来事の意味としての歴史等が相互に如何なる関係を持っているかということである。

⁹⁰ Urs, Jenny "Herrn Geisers Naturkatastrophe." In *DER SPIEGEL* 19. 1979, 214.

⁹¹ Kaiser, Gerhard. „Endspiel in Tessin“ in *Schweizer Monatsheft für Politik, Wirtschaft, Kultur* 12/1 1982/83, 46-52, hier.46.

この解釈においては、孤独や老齡問題はテーマの背後に後退し、主人公は自我や存在、認識等について形而上学的に思索する人物であると見做されている。カイザーによれば、作品のタイトルである言説「人間は完新世に生まれた」は、その逆説である「完新世が人間の中に生まれた」を含意しており、歴史が人間の中に生まれたのと同様に、人間が歴史の中に生まれたとする歴史の観念論を、主人公の知性から読み取ることができるとしている。⁹² カイザーの作品解釈は、その後の研究者に影響を与え続けた。例えば現代ドイツ文学者であるザビーネ・シュナイダー（Sabine Schneider 2012、243）は、2011年にチューリヒ大学で行われた「フリッシュを純粹に文学的コンテクストから読む」ことを目的としたリレー講演⁹³の中で次のように述べている。

Das Unsagbare, das Herrn Geiser zustößt, ist der Übergang vom Sein zum Nichtsein, die Auflösung des denkenden Bewusstseins in die Materie, Herrn Geisers persönliche Endzeit, gegen die er mit dem Ernst des Wissen- und Erklärenwollens bis zum Schluss aufbegehrt. Er ist ein ins Klägliche verrutschter Aufklärer, der mit feststellenden Aussagesätzen das schlechthin Inkommensurable dingfest machen will.⁹⁴

カイザー氏の直面した語りえない事態とは、存在から非存在への遷移、思惟する自我の物質化、そして自身の終末期であるが、それらにたいして彼は、本気で知識欲と説明欲をもって最後まで抵抗している。彼は、失意に落ち込んだ啓蒙的人間であり、本来比較秤量できない事物を断定的な平叙文で捉えようとしている

主人公のカイザー氏が、自身の終末について語ることを果たせなかったのは事実である。しかし啓蒙的な思惟である「存在から非存在への遷移、思惟する自我の物質化」について語ろうとしているのは主人公ではなく、語り手もしくは作者である。シュナイダーの解釈は、作者、語り手、主人公が相互に独立して属する世界を混同している。本作品の啓蒙性は、1986年にアメリカの研究者マイケル・バトラー（Michael Butler 1986、576）によって「フリッシュの語り方は、一人の男の頭脳の限界ともいえる啓蒙の楽観主義と、すぐれて現代的な懐疑主義との葛藤を描くことに成功している...」⁹⁵と既に指摘されている。主人公の啓蒙性について、バトラーは楽観主義であると解釈したが、シュナイダーは苦悩する啓蒙主義であるとした。

⁹² Ebd., 47.

⁹³ Müller, Daniel et al. *Man will werden, nicht gewesen sein*. Chronos Zürich 2012, 8

⁹⁴ Schneider, Sabine. „Stille Katastrophen“ in *Man will werden, nicht gewesen sein*. Chronos Verlag, Zürich 2012, 243-44

⁹⁵ Butler, Michael “Max Frisch's Man in the Holocene: An Interpretation” *World Literature Today Volume 60*, University of Oklahoma 1986, 576

本作品は、発表当初から今日に至るまで、テーマとしては高齢化・認知症による人格的破綻をはじめとし、自己認識・世界認識、さらには啓蒙的理性の終焉まで、極めて広範な解釈がなされてきたことがわかる。反面、作品の主要な特徴である文体に関しては、体験話法 (erlebte Rede) についての言及が、バトラー等によってなされていたものの、十分な考察の展開はなされていない。

4.3. 語り手のポジション

本作品に先行する『モントーク』(Montauk 1974/75) のサブタイトルは『小説』(Erzählung) であるが、主人公が一人称の ich (私) と三人称の er (彼) に分裂と融合を繰り返して語るフリッシュの自伝であると見做されている。その中の次の一文は、*Holozän* の最終脱稿までの作家の苦難の歩みを物語っているとされてきた。⁹⁶

ich kann's nicht lassen, ich habe eine kleine Schreibmaschine gekauft ohne literarische Absicht. (Eine literarische Erzählung, die im Tessin spielt, ist zum vierten Mal mißraten; die Erzähler-Position überzeugt nicht.) Diese Obsession, Sätze zu tippen – ⁹⁷

堪らず私は小型タイプライターを買ってしまったが、文学作品を書くためではない。(テッシンを舞台とした小説は4回目もうまくいっていない: 語り手のポジションに説得性がないのである。) 文章をタイプすることが強迫観念になってしまっているー

「テッシンを舞台とした小説」とは、執筆中の *Holozän* のことであり、この文章からフリッシュが苦心した「語り手のポジション」(Erzähler-Position) は、作品の意味と構造の要であると理解できる。*Holozän* の最終稿では主人公のガイザー氏は *Anrede* (尊称) の *Herr* を冠して語られることになるが、語り手が主人公を *er* (彼) 或いは呼び捨ての *Geiser* ではなく *Herr Geiser* (ガイザー氏) と呼ぶことは、語り手と主人公が距離を置いた人格的に対等な関係に位置づけられたことを意味している。フリッシュは、こうした語り手と主人公のポジション関係を明確にした上で、両者の心情の共感性を体験話法によって描いている。

バトラー (1986, 576) は、*Holozän* の文体が体験話法にあるとし、それによって作品が主人公と語り手の二重の視点から語られていることを指摘している。⁹⁸ シュナイダー (2012, 244) も作品は体験話法による個人的な語り方であるとし、主人公の物事の見方を描写する語りのパースペクティブと語り手のポジションが作品を特徴づけていることを指摘している。⁹⁹

⁹⁶ Strässle, Thomas *Max Frisch »Wie Sie mir auf den Leib rücken!«* Suhrkamp Verlag Berlin 2017, 226
Holozän には *Regen, Klima* など 12 以上の草稿があるとされている。

⁹⁷ Frisch, Max. *Montauk (1974/75)* GWVI, 630

⁹⁸ Ebd.

⁹⁹ Schneider, 240

4.4. 体験話法とコラージュ形式

作品は、ガイザー氏が退屈しのぎにクラッカーでパゴダ（仏塔）を組み立てようとしている状況の描写から始まる。この状況は体験話法によって語られる。

Es müßte möglich sein, eine Pagode zu türmen aus Knäckebrot, nichts zu denken und keinen Donner zu hören, keinen Regen, kein Plätschern aus der Traufe, kein Gurgeln ums Haus. Vielleicht wird es nie eine Pagode, aber die Nacht vergeht.¹⁰⁰

何も考えず、雷も雨も、雨どいのピシャピシャする音も、家の周りのゴロゴロする音も聞かず、クラッカーでパゴダを建てることはかなうだろう。しかし、もしかするとパゴダには到底ならないかもしれない。夜は更けていくのだが。

「パゴダを建てることはかなうだろう」「もしかすると […] ならないかもしれない」との描写は、ガイザー氏の思いであるが、語り手の立場から語られる地の文に繰り込まれている。この描写は、主人公と語り手の両者の心情の共同体験であり、現在形であるが体験話法である。体験話法は過去時制とされ、その上で語り手と主人公の間の語りの中心性（主体性）の移動が特徴とされている。¹⁰¹ しかしケーテ・ハンブルガー（Käte Hamburger 1986,72）は、体験話法の特徴とされる過去時制を重視せず、動詞の意味の重要性を次のように述べている。

[...] これらにみられる過去ある い は過去完了形の動向 は、それ自体としてはアクセントもなく、さほど重要でもない。重要なのはただ動詞自体の意味内実のみであり、それは登場人物のなかで、彼らの虚構的な実存の、この虚構的な瞬間に行われている思惟や感情を表明しているのである。[...]「描写する動詞の過去の意味を無効化するのは作中人物、虚構フィクションの無時間的な登場人物である。他のいかなる物語形式にもまして明確に具体的にこれを証明するのが体験話法である。」¹⁰²

さらに、作品の読者への現前は、過去、現在、未来の時制から独立し、本質的に無時間性であるから、文章の過去時制は必然ではなくなる。フリッシュは、語り手とガイザー氏の間にある人格的共感を読み手に強く印象付けるため、現在時制による体験話法によって語っている。

形態面の特徴の一つは、語りとしての文章に図表類が組みあわされたコラージュ形式

¹⁰⁰ Frisch, Max *Der Mensch erscheint im Holozän* Suhrkamp Verlag 1981, 9 以下同書からの引用はページ数のみ記載する

¹⁰¹ 三瓶裕史「体験話法」『ドイツ語を考える』三修社 2008, 191-201.

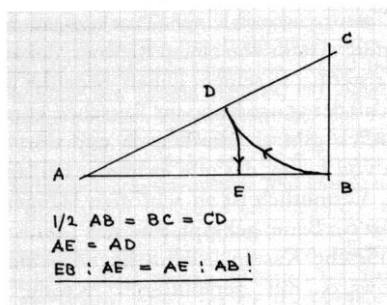
¹⁰² ハンブルガー, ケーテ著 植和田光晴訳 『文学の論理』松籟社 1986, 72.

である。ガイザー氏は記憶の減退を補うため手書きのメモの他、新聞、雑誌、百科事典等の書籍からの筆写や切り抜きを自室の壁のいたるところに張り付けていくが、それ自体が作品の本文の中にコラージュ状に嵌め込まれている。クラウディア・ミュラーClaudia Müller (2009、85) は、このコラージュ形式を、作品を自伝的に取られないようにするため、語りの主体を主人公からそらせるためのフリッシュの工夫であるとしている。¹⁰³しかしコラージュは単なる参考図表等の嵌め込みとは異なり、語りの表現形式として用いられている。*Holozän* を語る主体は作品の語り手であるから、その言表を支えるコラージュの作り手も *Holozän* の語り手であって、作者でもなく主人公でもない。ミュラーの見解は、作者であるフリッシュの立場を惻隠したもので、作品の内在的な解釈ではない。*Holozän* のコラージュは、物語を語る言表機能を担っている。作品中で語り手が文章で語る部分を「地の文」、挿入されたメモや記事の切り抜き部分を「コラージュ」として、両者が協働して一定の言表を構成していることを以下に考察する。

例1) 体験話法から誘発される直接話法としてのコラージュ (S.20)

(地の文) Herr Geiser braucht im Augenblick keinen Goldenen Schnitt, aber Wissen beruhigt. (ガイザー氏は目下のところ黄金分割は必要ではない。しかし知識は気休めになる。)

(コラージュ)



地の文中の「知識は気休めになる」との思いは、ガイザー氏と語り手の両者に共通した心情であり、体験話法である。それに続くコラージュは、ガイザー氏の手書きであり、黄金分割の方法についてのガイザー氏が解説した（語った）ことの直接話法に相当する機能を果たしている。

例2) 地の文が描写する情景の要素としてのコラージュ (S.113-17)

(地の文1) Im Augenblick steht Herr Geiser vor der Zettelwand. (ガイザー氏は紙片を張り付けた壁を前にしてしばし佇んでいる。)

(コラージュ)・『創世記』の断片 ・恐竜名の手書きメモ ・人間と有機体の生命現象に関する断片 ・大陸移動説の解説図 ・ケルノサウルスの図版 ・ステゴ図版サウルスの図版 ・ティラノサウルスの図版 ・ケラトサウルスの頭蓋骨の図版

¹⁰³ Müller, Claudia „Ich habe viele Namen“ Polyphonie und Dialogizität im autobiographischen Spätwerk Max Frischs und Friedrich Dürrenmatts. Wilhelm Fink Verlag, München 2009, 85.

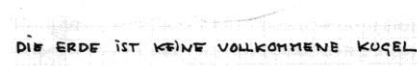
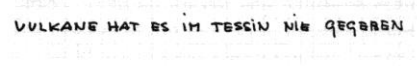
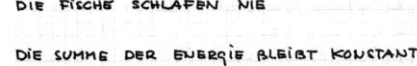
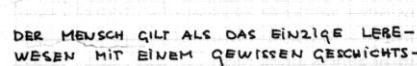
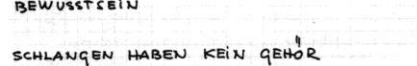
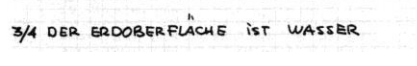
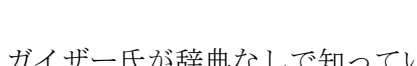
(地の文 2) Manchmal fragt sich Herr Geiser, was er denn eigentlich wissen will, was er sich vom Wissen überhaupt verspricht. (ガイザー氏は時々自問する、自分はいったい何を知ろうとしているのか、知識から何を期待しているのかと。)

ガイザー氏は、『創世記』の人間が初めて生き物に名前を付ける記事の切り抜き、恐竜名を羅列した手書きのメモ、辞典類から切り抜いたさまざまな恐竜の図版を、部屋の壁に貼り付けコラージュ化している。それらは、地の文 1 の平叙文に続く名詞の羅列に相当するが、言表としては二重の意味を帯びている。一つは、ガイザー氏の壁のコラージュの要素として、他は語り手の語りを構成するコラージュの要素としてである。この名詞群のコラージュは、地の文 2 の間接話法による主人公の内的モノローグを誘発している。それは、命名に基づく啓蒙的知識に対する懐疑であり、主人公と語り手の双方に共有された作品のモチーフである。この懐疑はガイザー氏の死の瞬間までもちこされる。

例 3) 体験話法の根拠となる直接話法としてのコラージュ (S.53-4)

(地の文) Manchmal schreibt Herr Geiser auch auf Zettel, was er ohne Lexikon zu wissen meint und was ebenfalls an die Wand gehört, damit Herr Geiser es nicht vergisst, (ガイザー氏は時折、辞典からの知識でないと考えたことを紙片に書き留め、そのことを忘れないために、壁に貼り付けるのであった。)

(コラージュ (部分))

	地球は完全な球形ではない
	テッシンには火山はなかった
	魚は眠らない
	エネルギーの総和は不変である
	人間は歴史認識を持つ唯一の生命体である
	蛇に聴覚はない
	地球表面の 3/4 は水である

語り手は、ガイザー氏が辞典なしで知っていると思いこんでいるとして体験話法によって語るが、その根拠はガイザー氏の手書きメモのコラージュである。コラージュ化されたメモにはガイザー氏の直接話法による 7 つの宣言文が記されている。

語り手とガイザー氏が作るコラージュは、それぞれの語りを記述する機能を有している。コラージュ形式と現在時制による体験話法との組み合わせによって、語り手の存在が

より顕在化される。さらに、例3)に挙げたコラージュは、その話法上の機能以上に意味内容として本作品の中核的なテーマを担っている。「人間は歴史認識を持つ唯一の生命体である」という言表は、歴史認識の内容についての省察を伴うべきであり、「地球は完全な球形ではない」や「魚は眠らない」等の単純な科学的認識と同列化できない。主人公であるガイザー氏の啓蒙性は、雑多な知識を命題形式で断定的にのべるに止まっている。より高度な啓蒙の視線は、語り手から発せられている。語られる世界におけるガイザー氏の啓蒙の知識のコラージュ化は、語り手の啓蒙の世界においては、硬直化した知識の断片にすぎない。

4.5 死に際しての世界認識

語り手は、テッシンの谷間の時空間を俯瞰し、主人公はその一部である。物語は、ガイザー氏が退屈しのぎのパゴダを組み立てている場面から始まり、その死後の谷間の情景描写で終わる。一人の人間の認知症の進行は、物語の主要なテーマではなく、主人公の精神の硬直化に働くバイアスである。ガイザー氏の最期に関して語られるのは、認知症が進行した老人の破滅ではない。ガイザー氏が意識不明の発作で倒れたのちは、語り手と主人公の共感関係は消滅し、啓蒙主義者である語り手が、啓蒙主義者であった主人公と距離を置き、共有してきた世界の認識に関する問題意識に対して最終的な結論のべる。語り手はガイザー氏が蟻を観察する姿を思い起こし、人間が自然を認識することの意味を次のように述べる。

Die Ameisen, die Herr Geiser neulich unter einer tropfenden Tanne beobachtet hat, legen keinen Wert darauf, daß man Bescheid weiß über sie, so wenig wie die Saurier, die ausgestorben sind, bevor ein Mensch sie gesehen hat. ¹⁰⁴

最近ガイザー氏が雫の滴る樅の樹の下で観察した蟻にとって、人間がその詳細を窮め知ることが意味がないのは、人間が見たこともない絶滅した恐竜にとって意味がないのと同様である。

語り手は、生きている蟻と絶滅した恐竜の視点から、人間の知識の価値と意味について問いかけている。現実の世界に生きるものに対する人間の知識が、過去の遺物に対するものと同質になってしまうことへの懸念が婉曲に語られている。この語り手の結論は、本作品のテーマの一つであり、最終章のテッシンの谷の生の描写の伏線である。主人公の最期を見届けた語り手は、主人公の断片的な世界認識を命題文の形式によって次のように総括する。

¹⁰⁴ S.138

Was heißt Holozän! Die Natur braucht keine Namen. Das weiß Herr Geiser.
Die Gesteine brauchen sein Gedächtnis nicht. ¹⁰⁵

完新世とは何か。自然は名前を必要としない。ガイザー氏はわかっている。岩石は彼の記憶を必要としない。

シュナイダー (2012, 246) は、「ガイザー氏は最期にあたって、自分が何も知らないことを自覚することで、何かをつかんだ。啓蒙の啓蒙という意味で、真実に対する強い要求に従い続けた。」(Herr Geiser hat am Ende, im Wissen, dass er nichts weiß, etwas begriffen. Auch in der Aufklärung der Aufklärung bleibt er seiner strengen Forderung an die Wahrheit verpflichtet. ¹⁰⁶) と述べている。しかし啓蒙を啓蒙する精神は、ガイザー氏のものではなく、ガイザー氏を見つめる語り手のものである。語り手は、ガイザー氏の自然界に対する認識の仕方を批判的に総括している。完新世は、世界の自然史の時代区分の一つであり、人類の発生は別の区分である更新世である。語り手は、ガイザー氏の「人間が生まれたのは完新世である」との思い込みを、誤りであるからとの理由で批判してはいない。そうではなく、自然を分類し命名することの意味を問い直している。壁の上の知識の断片のコラージュは、主人公が知識 (Wissen) とは名前 (Name) であると確信していることを示している。記憶能力の減退を恐れる主人公は、「記憶がないところに知識はない」 (Ohne Gedächtnis kein Wissen ¹⁰⁷) と思いこむ。これに対して語り手は、岩石に代表される自然に対する主人公の知識すなわち記憶の価値を最終的に否定している。ウルテ・シュトッベ (Urte Stobbe 2014, 361) はそのことを「命名が可能であることは、同時に制御も可能であるという人間の思い上がりが否認されている」(Der Hybris des Menschen zu glauben, dass das, was er benennen kann, zugleich beherrschen ist, wird eine Absage erteilt. ¹⁰⁸) と述べている。自然界に対する命名に拘泥するガイザー氏が、最期に得た命題に対するこの解釈は、主人公自身と同様に、自然が絶対的な善であることを前提としている点で、「自然主義の誤謬」¹⁰⁹ が潜んでいる。語り手は、ガイザー氏が最期に「自然は、名前を必要としない」(Die Natur braucht keine Namen.) という認識に到達したとして、その認識を敷衍して、「岩石は、彼の記憶を必要としない」(Die Gesteine brauchen sein Gedächtnis nicht.) との倫理的な価値判断を下した。このことは、事実命題から価値命題を演繹する自然主義の誤謬を犯していることになる。¹¹⁰ 語り手は、最後の段階で体験話法を間接話法に切り替えることによって、この誤りが主人公の

¹⁰⁵ S.138-39

¹⁰⁶ Schneider, 246.

¹⁰⁷ S.14

¹⁰⁸ Stobbe, Urte „Evolution und Resignation.Zur Verbindung von Klima-,Erd-und Menschheitsgeschichte in Max Frischs *Der Mensch erscheint im Holozän*“. In *Zeitschrift für Germanistik. Vol.24, No.2.* 2014, 361

¹⁰⁹ ムア,G.E. 著 泉谷周三郎訳『倫理学原理』三和書籍 2010, 237-73.

¹¹⁰ 小泉仰『倫理学』慶應義塾大学出版会株式会社 2012, 106.

ものであることを読み手に示唆しているのである。物語は、善、悪、正義、道徳等の倫理価値とは無関係に語られているため、シュトッベの指摘する「人間の思い上がり」を作品に見出すことには出来ない。しかも作品は語り手が到達した倫理命題をもって完結してはいない。最終章のテッシンの谷の情景描写は、語り手の自然主義的な啓蒙の視線によってなされている。語り手が主人公のなかに形成した知的存在としての人間の偶像は消滅し、テッシンの谷に象徴される自然界にその痕跡は残されていない。

4.6. 偶像化された啓蒙性

作品の作者、語り手、主人公の関係において、往々にして語り手は通約の結果消去され、主人公と作者の関係だけからの解釈が行われる。本作品における語り手の存在感は、この関係性の通約を許さない。語り手の啓蒙の視線からは、ガイザー氏の死は、一人の老人の死ではなく、記憶と知識を拠り所とする啓蒙の死である。最終章で繰り返される句「とどのつまり、とにもかくにも」(Alles in allem [...]) は、主人公が語られる世界から、主人公を語る語り手の世界への眼差しの転換の辞である。

Alles in allem ein stilles Tal [...] Alles in allem kein totes Tal [...] Alles in allem ein grünes Tal, waldig wie zur Steinzeit [...] ¹¹¹

とにもかくにも静かな谷である [...] 死の谷ではない [...] 石器時代のような森の豊かな緑の谷である。

これは、断片化、コラージュ化、化石化された啓蒙精神を総括し、生きている世界をそのまま受け入れようとする語り手の「啓蒙の啓蒙」的精神がなす述懐である。読み手は、この語り手の視線に誘われて、主人公のガイザー氏自体に啓蒙の諸相を読み取ろうとし、多様な解釈が生まれてきた。しかし「啓蒙の啓蒙」の高みから、老いて死に行く者を啓蒙者として偶像化する語り手こそが、作品の最大のフィクションであり主人公である。孤独な一老人の死すら「情」を除いて、「知」と「意」から語る語り手の背後にあるのは、無意識のうちに偶像を創造する現代の啓蒙である。¹¹² それは作者フリッシュが生涯を通して批判し、抵抗してきた現代人の精神の有り様である。

¹¹¹ S.142-3

¹¹² Frisch, Max „Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb.“ In *Du : Zeitschrift der Kultur* 51 1991, 119-27.

第5章 啓蒙の偶像化 『青髭』(Blaubart 1981/82)

5.1. 『青髭』の受容と評価

フリッシュの小説において『青髭』(Blaubart 1981/82)は、『モントーク』(Monauk 1974/75)、『人間は完新世に生まれた』(Der Mensch erscheint im Holozän 1979)とともに作家の三大晩年作とされている。本作品はその中でも作者が70歳の時に発表された最終作であり、発表当初から注目されているが、その評価は分かれている。

文芸批評家であるハインツ・ルードヴィッヒ・アルノルド Heinz Ludwig Arnold は、総合週刊誌 *Der Spiegel* 誌上で、いち早くこの作品をフリッシュの作家活動の集大成であると評価し、作者の豊かな才能がそれまでとは異なる筋書きで発揮されているとした。¹¹³ 一方 文学評論家のライナー・ガルラッハ Reiner Gerlach は、*Text+Kritik* 誌上に辛辣な論評を寄稿している。ガルラッハは、この作品にはフリッシュが『モントーク』で切り拓いた「個人的な体験を文学的な豊穡さに変える」能力は発揮されておらず、従来 of 繰り返しであるとしている。¹¹⁴

こうした相反する論評は、作品がフリッシュの70歳における最終作であることを前提としている点で共通している。というのも作品の中で主人公の内科医シャートは、「私はもう54歳だ、これからどうやって生きて行けようか？」¹¹⁵ と残された人生の前途に不安を口にする。そして作者フリッシュ自身も、本作品の執筆とほぼ同時期に再開した日記の中で、しばしば老いと生と死について記述している。¹¹⁶ こうしたことから自ずと読者は、主人公も作者も「老い」ないしは「晩年」の境地における物語であることを前提として作品を解釈することになる。小谷裕幸(1985, .13)も同じように「本作品の秘められたテーマとして、老くないしは寿命の問題がある」と指摘している。¹¹⁷ このように、本作品のテーマが老齢問題であるとして、評価解釈する論考は少なくない。¹¹⁸ 晩年作という先入観にとらわれない作品受容としては、作品が発表されて2年後の1984年10月に、ARD(ドイツ公共放送連盟)がテレビドラマ『青髭-マックス・フリッシュ原作』を放映したことが挙げられる。その2週間後、総合週間紙 *Die Zeit* は、ドラマが主人公シャートの省察的人

¹¹³ Baumgarth, Reinhard „Kahlschlag“ in *Der Spiegel* 16 1982, 267.

¹¹⁴ Arnold, Heinz Ludwig „Gescheitete Existenzen? Zu Montauk und Blaubart“ in *TEXT+KRITIK* 47/48 1983, 113.

¹¹⁵ Frisch, Max. *Blaubart-Eine Erzählung (1981/19782)* GWVII, 303. (以下 *Blaubart* と表記)

¹¹⁶ Frisch, Max. *Entwürfe zu einem dritten Tagebuch* Suhrkamp Verlag 2011, 11,20,26,36,42,45,49,57,59,60,67,68,69,71,73,85,99,105,120,122,123,125,137,139,144-47,154,164,

¹¹⁷ 小谷裕幸 「老いることの罪-マックス・フリッシュの小説『青ひげ』試論」『鹿児島大学文科報告第3分冊』1985, 1-15.

¹¹⁸ Haneborger, Lübert R *Max Frisch - Das Prosa-Spätwerk* Book on Demand GmbH 2008, 7-27.

Schneider, Sabine. „Stille Katastrophen“ in *Man will werden, nicht gewesen sein.* Chronos Verlag, Zürich 2012, 229-30.

Schwieren, Alexander „Alterswerk als Schicksal: Max Frisch, Friedrike Mayröcker und die Poelologie des Alters in der neueren Litaratur“ in *Zeitschrift für Germanistik Neue Folg*, Vol.22 2012, 290-305.

間像を描かず、専ら無実の被告が自己弁護する法廷アクションとなっていることを批判している。¹¹⁹ しかし作品受容の可能性は多様であり自由である。『青髭』をミステリードラマとして受容することもできるのである。

本章では、晩年の作品あるいは老齢をテーマとした作品であることを前提とする従来の解釈にとらわれないテキスト解釈を行う。証人達の視線によって形成される被告人の偶像に対抗して、被告人自身が内部で作る自身の偶像に対して自身を生贄として捧げる過程を、啓蒙の暴力性として考察する。

5.2. タイトル『青髭』について

『青髭』というタイトルは、作品の一部でありその内容の提喻¹²⁰である。主人公の内科医シャートは、6番目の元妻で現在は売春婦であるロザリンデを殺害した嫌疑により裁判を受ける。現在の妻ユッタは、証言の中でシャートを「青髭」と呼んでいる理由を「彼は地下室に6人の妻たちを隠していると云っていましたが、私は以前の奥さんたちがみな元気であることを知っていたからです。」¹²¹と陳述する。シャートは、6人の元妻との関係を冗談として「青髭」に仮託し、ユッタは、自分を含めて妻たちに対するシャートの紳士的な振る舞いを「騎士青髭」として連想している。フリッシュが1957年に発表した小説『ホモ・ファーバー』においても、主人公の妻が夫につけた綽名が作品のタイトルとなっているが、それは主人公の科学技術的性格の隠喩であった。しかし本作品のタイトル『青髭』と物語の内容との関係はより複雑である。というのも「青髭」は、主人公の「騎士性」と「殺人鬼性」の両義性を象徴しているからである。

「青髭」は、民間伝承としてヨーロッパに広く伝えられている物語であり、17世紀にフランス人ペローによって散文として『ペロー童話集』¹²²に収められた。グリム童話集の初版に収められている『青髭』(*Blaubart*)は、ペローの散文を基にしているとみられている。¹²³後に童話集を発表したルートヴィヒ・ベヒシュタイン(Ludwig Bechstein 1801-60)は、物語の内容は変えずにタイトルと主人公の名前をRitter Blaubart(騎士青髭、青髭公爵)とした。¹²⁴ペローの青髭は、次々に殺した6人の妻たちの死体を隠した小部屋の鍵を、7人目の妻に預け、「決して開けるな」と言い残して旅に出る。しかし、その留守中、好奇心を抑えきれない妻は、その禁じられた部屋を開け死体を発見する。帰宅した青髭は、部屋を覗きみした罰として妻を殺害しようとするが、妻が神に悔い改めの祈りをする時間

¹¹⁹ N.N. „Falsch abphotographiert“ in *DIE ZEIT* Nr.46/1984

¹²⁰ Adams, Hazard "Titles, Titling, and Entitlement To" *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 46, No.1, The American Society for Aesthetics 1987, 7-21.

¹²¹ *Blaubart*, 370-71.

¹²² ペロー、シャルル著 新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』岩波書店 1982, 181-91.

底本：Perault, Charles *Griselidis, nouvelle. Avec le Conte de Peau d'Asne, et celui des Souhais ridicules. Quatrième* 1695

¹²³ Brüder Grimm *Kinder- und Hausmärchen 2* Philip Reclam jun. 1982, 465-68.

¹²⁴ Bechstein, Ludwig *Saemtliche Maerchen* Anaconda Verlag 2013, 332-35.

を懇願したため、15分の猶予を与える。この青髭の寛大さにも拘わらず妻は祈ることもせず、竜騎兵と近衛騎兵である二人の兄の救援の到来の見張りにその15分を費やす。猶予の時間が切れる直前に兄たちは到着して青髭を刺し殺す。この「6人の元妻の死体」「禁じられた部屋」「覗き」「罰」「救い」は、「青ひげ」と同じ類型の民間伝承に共通するモチーフである。¹²⁵ 青髭伝承とフリッシュの『青髭』との関係について、中村靖子(2014, 51)は、「青髭」のモチーフの系譜として、ペロー、プシュケー、グリムとについて論じた上で、本作品から次の個所を引用している。¹²⁶

—ビデオです。[…]

彼女が外の男とどうやるのか[…]を画面で見ると。[…]それは重
大な経験でした。[…]ロザリンデにとってベッドは、およそ個人的な領域
[…]ではなかったのです。[Blaubart 345f.]

中村は、ペローの『青ひげ』における妻の禁じられた部屋の覗き見は、フリッシュの『青髭』においては、主人公シャートが元妻をビデオを通して見る覗き見に変奏されているとしている。¹²⁷ しかし、童話の「青髭」に共通する「覗き」のモチーフは、フリッシュの『青髭』においては重要ではない。本作品では、これらのモチーフは翻案されていないのである。「貴族にして殺人鬼」という単純に偶像化された「青髭」のイメージが、主人公の偶像化を語る手段として用いられているだけである。童話の『青髭』では、主人公は、罪を他者に発見され、罰は他者によって執行されるが、フリッシュの『青髭』では、主人公の罪は、自意識の中で告発され、自分自身によって断罪される。この罪と罰の捉われ方の違いが、作品解釈にとってモチーフの類似性よりも重要なのである。妻ユッタは、青髭を殺人鬼としてではなく、妻に祈りのための時間を与えた寛大な金持ちの騎士として認識していたため、シャートを「青髭」と呼んだのである。ユッタの法廷における証言は、シャートの騎士的な寛大さの中に殺人者の本性を認めていたと解釈することもできるが、世間はその殺人的性格だけを問題としている。検事はユッタに「それではあなたは、幸福な結婚であると云うのですね。」¹²⁸ と念押しし、裁判は結審する。しかし、その後、シャートは図書館に向いて青髭について調べ、「7人の妻を殺して地下室に隠した騎士のメルヘンは、17世紀にフランス人チャールズ・ペローによって書かれたものである」¹²⁹ とのことだけを知ることができたが、物語の意味を深く考えようとしな。自分が青髭と呼

¹²⁵ 吉田正彦「ドイツの口承文学における異教的(ゲルマン的)要素」『明治大学人文科学研究所年報』1990, 89.

¹²⁶ 中村靖子「証拠不十分につき、無罪」—マックス・フリッシュ『青髭』における「妻殺しの夢のあと」』『名古屋大学文学部研究論集(文学60)51-84』2014, 51-84.

¹²⁷ 同上 P.22-3

¹²⁸ Ebd, 372

¹²⁹ Ebd.

ばれる理由について、妻ユッタの証言を文字通り信じ安堵する。公判中は、自分は騎士であると確信し、60人以上の証人の証言から超然としていることができた。無罪判決により自由となったシャートは、キオスクの店頭に残った数週間前の「シャート、アリバイ無し。騎士青髭、法廷で。結婚7回のドクター」と写真入りで書かれた週刊誌の傍らを平然と通り過ぎる。¹³⁰ この理性による平静さは、無罪判決後しばらくすると揺らぎ始める。証拠不十分による無罪判決に満足しないシャートは、自らを裁き直し、自分の内部に自覚した罪により、自らを断罪することになる。

5.3. 真の語り手

『青髭』では、主人公シャートが「ich (私は)」として物語を語る。しかし、この Ich-Erzählung (一人称の語り) は、物語の中間と後半では時折 Er-Erzählung (三人称の語り) に転換される。語り手が主人公と同じ人物である一人称の物語の中で、主人公を er (彼は) で語る者は、物語中の人物 **x** である。**x** は、主人公シャートと同じく、物語の中で語られる者であると同時に、語る者であり、「真の語り手」とも言うべき存在として、作品の解釈にとって重要な意味を持っている。作品の前半は、シャートの無罪判決後のビリヤード、サウナ、散歩等の日常の記録と、そこに入り込む公判廷の記憶が交互に Ich-Erzählung (一人称の語り) で語られ、作品半ばの判決場面は突如、語り手が交代する。

Der Angeklagte hat sich zu erheben, wenn das Urteil verlesen wird; [...] Und dann, als er das Urteil gehört hat, stützt er die Hände auf den kleinen Tisch, sein Kinn beginnt zu schlottern, er weint - offenbar vor Glück - mit gesenktem Kopf.¹³¹

判決が言い渡されるとき、被告は直立しなければならなかった。…判決を聞き終えると、彼は小机に手をついた。彼の頬は震えだし-あきらかに嬉しさのあまり-頭を下げた泣いた。

この場面では、主人公は der Angeklagte (被告は) で語られていることから、主人公とは別の語り手の存在が暗示されている。この語り手は、主人公シャートの判決直後の状況を第三者として描写できる立場の人物である。作品の後半部分は再び主人公の ich (私) が語る。これは公開の場では断罪されなかった自分が引きずって来た内なる罪を、仮想の裁判形式で裁き有罪とするモノログである。物語最後の場面では、シャートは、病院のベッドの中で検事の問いかけに徐々に無言となって死に向かっていく。この状況を描写することができるのはシャート以外の語り手である。この語り手は、**x** であり臨終に立ち会っている検事に他ならない。物語の掉尾で ^{あらわ} 顕となった語り手としての検事は、物語の冒頭か

¹³⁰ *Blaubart*, 355.

¹³¹ *Blaubart*, 379-80,

ら一貫して語り手の機能を果たしている。何故なら、主人公であるシャートの人物像は、専ら法廷における検事の尋問によって^{あらわ}顕にされ、シャート自身の内面的な自己省察も検事の尋問形式によって語られているからである。検事は、語りの中に練り込まれた一貫した語り手の役割を果たしている。

この実質的な語り手である検事は、全知ではない。しかし現代社会における検事は、正義と真実を追求する啓蒙の精神の持ち主であるとされている。法廷を支配する検事の啓蒙の精神によって、シャートの偶像が形成されていく。シャートは、自分自身の内面における真実の追及をも検事の啓蒙の視線に委ねることによって、新たな自身の偶像を創り出してしまうのである。

5.4. 偶像を創り出す裁判

被告であるシャートの有罪を宣告できずに終了した裁判は、多くの証人の証言によって形成されたシャートの不名誉な偶像を残す。公判における真実の解明という公義は、判事の次の宣言によってのみ担保されようとする。

Als Zeugin haben Sie die Wahrheit zu sagen und nichts als die Wahrheit, Frau Bickel, Sie wissen, daß falsches Zeugnis mit Gefängnis bestraft wird, in schweren Fällen mit Zuchthaus bis zu fünf Jahren. ¹³²
証人として貴女は真実を述べなければなりません。ただ真実だけをです。ビッケルさん。承知しておいてください。偽証には拘留の罰則があります。重大な偽証の場合は、最高 5 年の懲役刑が課されます。

アリバイと物証をめぐる検事の追及は、真実の証言を要求する脅迫にもかかわらず、堂々巡りとなる。動機から犯行の事実は立証できないにも拘わらず検事は証人を動員し、誘導尋問を駆使する。その結果は、6 人の元妻と現妻との関係を含めて、シャートの非騎士的な私的部分が暴露される。無罪判決後、シャートは「私の無罪は公表されたが、私という人間についてあまりに多くのことが知れ渡ってしまった」(Mein Freispruch ist bekannt, aber man weiß zuviel über meine Person. ¹³³) と述懐する。多くの証人たちが、自身のうちに持つシャートの認識像を公共の場にさらけ出した。それらの雑多な認識像が収斂され、シャートの偶像を作り出した。それまではシャートにとって漠としていた私という人間 (meine Person) に対して、公衆がその偶像を完成したのである。自らの偶像を目の前に突き付けられたシャートは、否応なく偶像の由来、すなわち真実の自分自身に向き合わなければならない。真実の「私」は、シャートの内面で徐々に認識され始めるが、それ自体も偶像でしかあり得ない。弁護人は、シャートの長年にわたる数々の社会的な貢献活動

¹³² Ebd., 312.

¹³³ *Blaubart*, 310.

や教養を引き合いに出して弁護するが¹³⁴、これも被告人の善良で模範的な市民としての偶像化にすぎず、妻ユッタの騎士青髭としての偶像化と同種である。シャートは、法廷の場で公衆によって形成された自身の偶像に対抗して、新たな自分自身の偶像を心の裡に創り出さなくてはならなくなる。

5.4.1. 主人公の二つの偶像

公衆の視線の焦点で形成されるシャートの偶像は、現妻ユッタによって作られた騎士像とは異なる非騎士の偶像である。この二つ目の偶像については、証人に立ったシャートの娘が騎士像とは正反対な利己主義的な父の像を思い浮かべ、その自殺の可能性を証言する。シャートの自己中心性は、殺害された6番目の妻ロザリンデとの離婚の原因でもある。自分の性的不能が彼女を満足させられない原因だと思い込んだシャートは、一方的に離婚するが、その後ロザリンデの異常な性的快楽への欲求を知り、売春を行う彼女の客となって、友達関係であると公言して恥じない。検事はシャートの最も秘密にしておきたいメモも押収している。

Wenn die Erektionen öfter ausbleiben, was zur Zeit der Fall ist, scheint jede Frau in Versuchung, auch alle anderen Fähigkeiten dieses Mannes zu bezweifeln. Kein Tag ohne ein paar kleine Zurechtweisungen. In der Tat mache ich Fehler auf Fehler: [...] ¹³⁵

不能状態になると、目下のところそうであるが、その時どの妻も、この夫はその他のすべてにおいても無能力ではないかと疑うようだ。一言二言の小言のない日はない。実際、失敗ばかりしている[...]

7人の妻の中で、ロザリンデだけがシャートに性的満足を感じないと打ち明けたのは何故か、という検事の問に、シャートは「真実を語るためだったろう」¹³⁶と答える。シャートは、ロザリンデが満たされない人生に不安を感じていることを知り、責任を負いたくないと思った。「彼女を愛していた、だから離婚した」というシャートの陳述は、真実に名を借りた自己中心の言述である。法廷で形成されるシャートの偶像は、ユッタが抱いている騎士の偶像からはほど遠い。それは二つ目の非騎士の偶像である。

5.4.2. 二つの裁判

物語には、二つの裁判が語られる。物語の前半に語られる裁判は、主人公のシャートが実際に裁かれた公的裁判である。後半に語られる裁判は、裁判の形式をとったシャートの

¹³⁴ Ebd., 363.

¹³⁵ Ebd.

¹³⁶ Ebd., 377.

心の内で行われた、自身の道義的責任を解明しようとする私的裁判である。前半の裁判でシャートは、ロザリンデ殺害の容疑で公的に裁かれるが、その無罪判決に対して不安と懐疑を抱く。

Freispruch mangels Beweis. Wie lebt einer damit? Ich bin vierundfünfzig

137.

証拠不十分による無罪。それでどうやって生きていけるのか？ 私は 54 歳だ。

判決の主文は、明確に無罪であり、証拠不十分との文言はない。それにも拘わらずシャートは証拠不十分の無罪だと受け止める。それは、アリバイが最後まで立証できなかったからではない。公判で形成された自分の非騎士的な偶像の翳に大きな不安を感じ、その偶像を破壊する積極的な根拠が示されることを望んだからである。「騎士青髭」の青髭性（殺人鬼の性向）を棄却した判決は、騎士性（高貴な市民性）も同時に葬り去った。法廷は、検事によって誘導された六十有余人の証人の証言が齎したシャートの非騎士像を、偶像として残しただけである。シャートは、この偶像を毀すことはできない。自身の偶像の翳と自身の思い込む真の自身は、対決せざるを得ない。

シャートは、自分の心の中に架空の法廷を設けて第二の裁判を始める。現実の法廷が裁かなかった罪があるのかを審理するために、シャートの理性は、あくまでも法廷と検事による審理の形式を必要とする。検事の力を借りなければ自分を裁くことができないシャートは、カントの指摘する、未成人となっている。カントは未成人性から脱却することが啓蒙であるとし、その未成人性の責任について次のように述べている。

[...] Selbstverschuldet ist diese Unmündigkeit, wenn die Ursache derselben nicht am Mangel des Verstandes, sondern der EntschlieÙung und des Muthes liegt, sich seiner ohne Leitung eines andern zu bedienen.¹³⁸

この未成人性が自己の責任であるのは、その原因が悟性の欠如にあるのではなく、他人の指導なしに自分自身の悟性を用いる決断と勇気が欠けることにあるからである。

¹³⁷ Ebd., 303.

¹³⁸ Kant, Immanuel. „Beantwortung der Frage : Was ist Aufklärung“ *Kants Werke Band VIII* Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968, 34

現代の啓蒙人である医師シャートに悟性の欠如はない。しかしその悟性を用いて、自らの心の奥を深く覗こうとする決断と勇気が、シャートにはないのである。¹³⁹

後半の仮想の第二の裁判では、証人として亡き父母が出廷し、シャートの幼年期について証言する。父は教師であったが、検事とのやり取りは、専ら岩石学に関する蘊蓄に費やされる。自然科学の関係ない知識の断片が、シャートの罪の裁きの中に紛れ込む。母はシャートがペットのウサギを切り裂いたことに対する証言を求められる。しかし未成年期のこの行為は、今裁かれるべき罪からはほど遠い。現実の公判中から抱いていた、少年期の悪戯で友達を縛り上げ瀕死の状態にしたことに対する罪の意識もこれと同様である。シャートは、未成年期の些細な罪を検事に告発させて、成人としての大きな罪から免れようとする。そして、真実は検事の追及と関係なく突然の記憶の想起から明らかになる。6年前の十字架の記憶も、夢の中の交通標識ではなく、尊敬する母親が埋葬されている教会の十字架であったことを突然思い出す。それに対して検事は、「あなたは、忘れていたではありません。シャート博士。抑圧していたのです」(Sie haben es nicht vergessen, Herr Doktor Schaad, Sie haben es verdrängt.¹⁴⁰)と指摘する。巨大な魚に半ば飲み込まれた蛇が、魚を殺して生き延びたというシャートの夢は、善と悪、神と悪魔の闘争の隠喩ではない。抑圧されたものは抑圧するものの死をもってしか解放されないという関係性の隠喩である。非騎士の偶像の鎧を着せられたシャートの真実が明らかにされるためには、鎧ではなくシャート自身が抹殺されることが示唆されている。

現妻ユッタとの関係は、現実の公判が続く中で変わってくる。シナリオライターであるユッタは若い演出家のヘルベルトに惹かれている。シャートとユッタは、何があってもお互いに真実を打ち明けるとの約束を守るために、第二の裁判においては、シャートはユッタを公明正大だと弁護し、ユッタはシャートを騎士的だと証言する。互いに空虚な偶像に寄りかかり、現実を理性的に解決する決断と勇気を持っていない。ロザリンデも証言台に立つが、検事の尋問にただ微笑むだけである。それは、シャートの書棚の片隅に残されたロザリンデの遺品のアルバムの中の偶像の微笑である。

第二の審理で明らかになった決定的な事実は、シャートが突然思い出した5本の百合に関することである。事件の直前にロザリンデと茶を飲んだシャートは、彼女の親密な客の手紙を盗み見し嫉妬を感じ、帰宅途中、酔いに任せて花屋に立ち寄り、5本の百合をロザリンデに届けさせる。その5本の百合がロザリンデの死体に添えられていたのである。花屋に立ち寄った時刻がいつだったかは、シャートのアリバイを決定づけるはずであるが、シャートは検事に「それは事実です」としか答えられない。¹⁴¹ 第二の裁判であるシャートの内面における審理は終了する。

¹³⁹ Ebd., 356.

¹⁴⁰ *Blaubart*, 390-91

¹⁴¹ Ebd., 399.

5.5. 罪と罰

シャートの罪と罰は、さまざまな解釈がなされている。小谷（1985, 14）の救済説では、主人公が過去の罪を懺悔したことにより、偶発的な運転事故からも生還し、救われたとされている。¹⁴² また、中村（2014, 29）は、生贄説を述べている。これは、殺されたロザリンデへの誠実の証として、シャートは自ら殺害者の役割を引き受けようとしたとするものである。¹⁴³ また山中（1994, 7）は、シャートは他者から押し付けられる偶像に抗えなくなり、その偶像を受け入れて死んでゆくとして解釈し、これを理性の敗北としている。¹⁴⁴ これらの解釈は、いずれもシャートの罪には言及しているが、その処罰については論じられていない。しかしシャートは、具体的な罪を理由に自身の罪人像を形成し、自らを罰したのである。シャートの具体的な罪とは、ロザリンデに5本の百合を贈ったことである。5本の百合が、ロザリンデの客である若いギリシャ人学生の嫉妬心を刺激し、殺人に至ったことをシャートは突如確信し自身の罪人像を形成してしまう。法廷で作られた非騎士の偶像は、自分自身の中では罪人の偶像となって立ち現れる。今まで漠として感じていた証拠不十分による無罪に感じた不安、検事から指摘されている抑圧されている意識の中身、すべてが一挙に顛^{あらか}になった。成人の悪戯が引き起こした具体的な罪は、罰せられなければならない。彼は、夢に見た十字架のある故郷に急行し、幼馴染の警官にロザリンデを殺害したと供述し社会からの断罪を求める。彼にとっては、事実によって無罪になるより、真実によって断罪されるほうが騎士象の回復のためには相応しく思えたのである。しかし真犯人のギリシャ人は既に逮捕され服役している。シャートは故郷の街を飛び出し、ブナの木に衝突する。公的に断罪されないなら、自らに私刑を課さざるを得ない。ペローの「青ひげ」は妻に祈りの時間を与えることにより、明確に神を意識したうえで第三者に断罪されるが、シャートは教会と十字架の幻像を意識の底に閉じ込めたまま自らを断罪する。

5.6. 偶像の生贄

フリッシュは、最後の文学作品である『青髭』において、啓蒙の精神が形成する偶像とその絶対性、暴力性について語った。作品を一貫しているのは、正義と真実のために、合理性、科学性を重んじる検事の啓蒙的な精神である。この作品では、この実質的な語り手である検事の視線が啓蒙の視線であり、それが主人公を破滅へ導いている。検事の誘導によって作られた非騎士像は、虚像であり死せる偶像である。その克服は、主人公の生きている自由な精神によってなされなければならないにも拘らず、主人公は検事の誘導に身を任せ、自ら別の偶像を創り出してしまふ。その偶像は、主人公が密かに期待した騎士的な偶像ではなく、罪人としての偶像である。主人公の偶像は、騎士像から非騎士へ、非騎士

¹⁴² 小谷, 14.

¹⁴³ 中村, 29.

¹⁴⁴ 山中博心「Max Frisch "Blaubart" -「私」の中の世界の中の「私」の中の...」『福岡大学人文論叢 6(3)』1994, 7.

像から罪人像へと変貌する。主人公が理想とする騎士としての偶像は、罪人である主人公自身を犠牲の生贄として要求する。啓蒙の視線の先にあるのは、生贄を要求する偶像の暴力性である。フリッシュの最後の文学作品で語られた、啓蒙の視線が形成する偶像とその絶対性、暴力性は、後に作家の最後の講演『啓蒙の終点にいるのは、金の仔牛である』¹⁴⁵の主題となっている。

第6章 啓蒙の先にあるもの 『啓蒙の行きつく先に金の仔牛がある』 *Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb* 1985

6.1. 啓蒙的理性のアポリア

フリッシュは、啓蒙を究めたと思われる現代人が個人的、社会的に依然として思慮分別に欠けた存在であり、啓蒙そのものを変質させていることを、現代文明における啓蒙的理性のアポリアとして問題視した。残されている多くの講演の記録の中でも晩年の『啓蒙の終点にいるのは、金の仔牛である』¹⁴⁶では、現代の啓蒙に対する懐疑と展望が総括的に語られている。この講演は、1985年5月10日、75歳になったフリッシュが、ソロツルン文学賞の受賞に当たり行ったものである。講演の冒頭でフリッシュは、「現代のヨーロッパの挑戦である啓蒙が、いたるところで破綻を来していることに疑いの余地はない」(so bleibt kein Zweifel daran, daß die Aufklärung, das abendländische Wagnis der Moderne, weitherum gescheitert ist.¹⁴⁷)と述べ、自身が行ってきた公共圏(Öffentlichkeit)に対する啓蒙批判を総括した。

フリッシュは、*Öffentlichkeit als Partner* はじめ *Forderungen des Tages. Portraits, Skizzen, Reden 1943–1982*¹⁴⁸等に収録されている数々の講演、評論の中で、第二次世界大戦の戦中戦後の10年間を、かつて起こりえなかった人間の尊厳を貶める深刻な事態が生じた時期とし、ナチズムを生んだドイツ民族が自負する歴史的な芸術、文化について鋭く批判し続けてきた。高度な文化を持つドイツ人がワルシャワのゲットーやアウシュヴィッツでなしたことは、文明・文化とは何かとの深刻な問いをフリッシュに突き付けた。フリッシュは、交響曲の天才がいるからと言って、文明国だとは言えないのではないかとドイツ人には問いかける一方で、自国のスイス人には、自己過信、世界中から愛されているとの心地よい思い込みに対して警告している。偶像化された文化は、それが芸術であれ科学であれ、道徳的に病める文化であって、ドイツにとっても、スイスにとっても救いとはな

¹⁴⁵ Frisch, Max “ Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“ *Du : Zeitschrift der kultur* 51 1991, 118-27.

¹⁴⁶ Frisch, Max “ Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“ *Du: Zeitschrift der Kultur* 51 1991, 118-127. (以下同掲書からの引用はページ数のみ示す)

¹⁴⁷ Ebd., 119.

¹⁴⁸ Frisch, Max *Forderungen des Tages. Portraits, Skizzen, Reden 1943–1982* Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1983

らないと訴えている、

フリッシュのこうした批判は、啓蒙の歴史に加えて同時代におけるポストモダンの風潮についても向けられ、啓蒙の行き着く先が専制であることを警告している。以下この講演内容から、フリッシュが啓蒙的理性のアポリアをどう乗り越えようとしたかを考察する。

6.2 カントとフリッシュの啓蒙の概念

フリッシュの啓蒙に対する意識は、生涯の活動において、公共的な啓蒙と、私的な啓蒙とに向けられている。公共的な啓蒙とは、理性を社会全体の啓蒙のために用いようとする社会的アンガージュであり、私的な啓蒙とは、公的啓蒙の前提となる責任ある個人の理性の自由と行動である。フリッシュは、少年期、何も分からないままに「ボルシェビキ打倒」を叫び、成人しては国境で、イタリアに向かうナチスドイツの軍用列車に恐れを感じながら警備したことを「私は知ろうとしませんでした。ただ信じようと思いました」(Ich wollte nicht wissen, sondern glauben.¹⁴⁹)と回顧するが、これはカントの「自分の責任に帰すべき未成人性」を念頭に置いた発言として理解できる。カントは『啓蒙とは何か』の冒頭において「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜け出ることである」と述べており、「個人の啓蒙」と「国民の啓蒙」とがあるとしている。そして、それぞれにおける「理性の公的使用」と「理性の私的利用」について論じられている。¹⁵⁰ カントの時代にあつては、「個人の啓蒙」は宗教的精神生活の領域における自由を求める理性のあり方を問題としているが、現代では宗教の枠を超えた啓蒙的理性の働き全般として考えることができる。

こうしたカントの啓蒙の概念を背景に考えると、フリッシュの小説、戯曲等の文芸作品群は私的な領域における啓蒙的理性のアポリアを描き、講演・随筆等は主として公共的な視点からの啓蒙的理性のアポリアを克服しようとする言説であると言える。啓蒙を窮めたとされる現代社会において、個人も社会も様々な様相においてなお未成人的(unmündig)である。フリッシュは、それが故の人間存在のおぼつかなさ、不完全さ、不条理さ、不安等をとおして、世界の実相を描こうとした。その言述にしばしばみられる unmündig は、カントの「自己の責任に帰す未成人性」(selbst verschuldete Unmündigkeit¹⁵¹)と同じ意味で用いられている。

6.3. 啓蒙批判

6.3.1 公共の啓蒙的理性のアポリア

公共の啓蒙的理性のアポリアとして問題とされているのは、啓蒙的な社会が専制体制を許す歴史である。フリッシュは講演の中で、スターリニズムの歴史的事実は、それ自身啓蒙の

¹⁴⁹ S.118.

¹⁵⁰ カント著、篠田英雄訳『啓蒙とは何か』岩波書店 1950, 20.

Kant, Immanuel. "Beantwortung der Frage : Was ist Aufklärung" *Kants Werke Band VIII* Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968, 34.

¹⁵¹ Ebd., 35.

深刻な負い目として残ったが、それはキリスト教会における異端審問の歴史と重なることを指摘したうえで次のように述べている。

Konrad Farner[...]leugnete nicht seine Einsicht, daß der Marxismus, der zwar fundamentale Mechanismen der Industriegesellschaft erkannt hat und durchschaubar macht, in seiner politischen Praxis versagt durch Mangel an Anthropologie. Was er damit meinte: die ideologische Vernachlässigung unseres natürlichen Bedarfs an Emotionalität und Subjektivität. Gilt das für die Aufklärung überhaupt? Die Aufklärung, die erste, war eine Epoche der Empfindsamkeit. Jean-Jacques Rousseau schwärmte, und verkündet wurde eine >>Kultur der Gefühle«, die da kommen soll. Und Diderot: bei aller Brisanz seines Intellekts ein empfindsamer Entdecker der Subjektivität und ein Befreier eben dadurch; Vernunft als Inspiration.

152

コンラート・ファーナー¹⁵³ は[...]、マルキシズムは工業化社会の基本構造を明らかにした反面、その政治的な実践面には人間学が欠如しているとの認識を隠しませんでした。人間の情動や主体性における自然な欲求を、イデオロギーとして無視していると考えました。これは、啓蒙についても言えることでしょうか？ 啓蒙はそもそも、感傷主義の時代の始まりを画しました。ジャン・ジャック・ルソーは、来るべき「感情文化」について熱く語ったものです。そしてディドロは卓越した知性によって、主体性のセンチメンタルな発見者であり解放者であり：理性をインスピレーションとみなしていました。

ここでは、フリッシュが、ルソーからファーナーに至るスイス啓蒙主義の伝統の中で、啓蒙的理性に加えて主体の感情を重視していることがわかる。公共の啓蒙における人間的感情の軽視が、歴史的に専制体制の出現を許してきたと指摘している。フリッシュはこうした公共の啓蒙に関する問題意識を旧くから持っていた。戦後まもなく核兵器という絶対的な専制手段を目の当たりにし、『万里の長城』を発表している。この作品では、万里の長城を築いた啓蒙的専制君主である始皇帝の時代に、時空を超えてヴォルテール等の近代の啓蒙思想家を登場させ、体制の犠牲となる多感な貧農の主人公の悲劇が描かれている。始皇帝の専制的な啓蒙的理性は、自分の娘と貧農との間の愛という感傷の前に破綻する。

6.3.2 啓蒙的理性の終点：専制

¹⁵² S.125.

¹⁵³ Konrad Farner 1903-74 スイスの芸術史学者、随筆家、社会学者

フリッシュはカントと異なり¹⁵⁴、啓蒙について悲観的な展望をもっており、啓蒙的理性が専制的な偶像を造り上げていく過程を「金の仔牛(das Goldene Kalb)」に例えて、次のように語っている。

Am Ende der Aufklärung also steht nicht, wie Kant und die Aufklärer alle hofften, der mündige Mensch, sondern das Goldene Kalb, bekannt schon aus dem Alten Testament.¹⁵⁵

啓蒙の行きつく先には、カントを始めとする啓蒙主義者たちが期待したような思慮分別のある人間がいるのではありません。旧約聖書以来知られている金の仔牛がいるのです。

イスラエルの約 200 万人と推定される民の出エジプトは、当時としては高度に組織化され文明化された民族の大移動であった。希望の地カナンを前にして、モーゼは十戒をはじめ神殿の造営、祭儀等に関する高度な知恵を神から直接授けてもらうために、一人ホレブの山に登りそこに四十日四十夜留まる。待ちきれず不安になった民が指導者の一人であるモーゼの兄アーロンに造らせたのが「金の仔牛」である。¹⁵⁶ 重要ではあるが日常のありふれた家畜である仔牛を、金の鑄像で神として偶像化して、見えない絶対神に取って替えたのである。山から下ったモーゼは激しく怒り、これを打ち壊すが、究極の知恵を獲得することが確実にした啓蒙の最終位相においてもなお、人間は不安にいたたまれず怪しげな出自の専制的な偶像に頼ろうとする啓蒙的理性のアポリアは古代ユダヤも現代も変わらない。古代ユダヤ人は、絶対神を金の仔牛で偶像化したが、現代人は心の中で、人間を偶像化し絶対化する。ツァー体制の崩壊を阻止できなかったと同様に、ヒトラーやピノチェトを防げなかったのは、この理由によるとフリッシュは指摘する。¹⁵⁷

6.3.3. 啓蒙的理性のアポリアの解消

フリッシュにとって啓蒙的理性の抑圧者である専制者は、モーゼが金の仔牛を打ち砕いたように、打倒すべき生涯の敵であった。フリッシュは、啓蒙的理性が専制主義をもたらすことのアポリアを、弁証法的な理論付けによっては、解消できないと考えていた。本講演に先立つ 1981 年のニューヨークシティ・カレッジにおける講演の中で次のよう

¹⁵⁴ カントは、自分の生きている時代が既に啓蒙された時代であると、楽観視し次のように述べている。[[...]しかし今では人々が努力し[...]、自由の天地は開け[...]みずからその責を負うべき未成年状態からの脱出を妨げるところの諸般の障害は次第に減少しつつある[...]」（『啓蒙とは何か』岩波書店 1950, 16 - 17）それから凡そ二百年後のフリッシュの啓蒙についての展望は悲観的である。

¹⁵⁵ S.126.

¹⁵⁶ 『出エジプト記』31 章

¹⁵⁷ Pinochet : Augusto José Ramón Pinochet Ugarte チリの 30 代大統領 (1974-90) アメリカの支援により、自由選挙で樹立されたアジェンデ社会主義政権を打倒し、多くの政治的弾圧・拷問を行ったとされている。

に語っている。

Ich habe keine Theorie. Es gibt eine Auswahl von faszinierenden Ästhetik-Theorien: von Aristoteles bis Roland Barthes, nicht zu vergessen die marxistischen Denker: Walter Benjamin, Lukács, Adorno usw. Ob eine Theorie uns bei der Arbeit hilft oder nicht, entscheidet nicht über ihren Wert. Das weiss ich. [...] Um nicht missverstanden zu werden: Ich habe nichts gegen Theorien. Ich habe nur selber keine. ¹⁵⁸

私には理論はありません。多様な素晴らしい美学理論があります：アリストテレスからロラン・バルトまで、マルキシズムの理論家も：ヴァルター・ベンヤミン、ルカーチ、アドルノ 等々。理論が創作の助けとなっているかどうかは、作品の価値を左右するものではないことを私はよく知っています。[...] 誤解なきよう申し上げますが：私は決して理論に反対ではありません。ただ、私自身は理論家ではないということでもあります。

フリッシュがこの中でアドルノに言及しているのは、その著作である『啓蒙の弁証法』を意識してのことと考えられる。20世紀の啓蒙批判の基礎となる著作として、一世を風靡した T.W アドルノと M.ホルクハイマーによる『啓蒙の弁証法』ではあるが、その冒頭「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」¹⁵⁹ と、啓蒙的理性のアポリアを弁証法で論及することがこの書の目的であることを述べている。フリッシュが重視したのは、弁証法的な説明ではなく「啓蒙の精神を全うすることを目的とする抵抗」(Widerstand mit dem Ziel, daß der Geist der Aufklärung sich durchsetzt ¹⁶⁰) である。フリッシュは、この抵抗への呼びかけは、歴史の体験から、思慮分別ある人間すなわち啓蒙的理性の持ち主が、専制の繰り返しを許さないための実践行為であるとしている。フリッシュは、1966年にチューリヒで生じた文学論争の際、E.シュタイガーの反動性を批判したとき、エズラ・パウンド (Ezra Pound ¹⁶¹) を引き合いに出しているが¹⁶²、二十年後のソロツルンの講演においても、座して喚きたてるだけの晩年のパウンドの姿勢を批判している。¹⁶³

フリッシュは、専制が政治経済に限られた問題とは考えていない。シュタイガーもパウンドも文化的に高度な知性を持った啓蒙的理性の人であるが、それぞれドイツにおけるナ

¹⁵⁸ Frisch, Max. *Schwarzes Quadrat*: Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 2008, 19.

¹⁵⁹ ホルクハイマー、アドルノ著 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波文庫 2007, 7.

¹⁶⁰ S.126.

¹⁶¹ Ezra Weston Loomis Pound: 1885-1972 アメリカの詩人。モダニズム運動の主要人物の一人。イタリヤ滞在中、ファシズムを支持、後に謝罪。

¹⁶² Frisch, Max *Öffentlichkeit als Partner* Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1970, 142.

¹⁶³ S.127.

チズム、イタリアにおけるファシズムに共感するという専制的精神の持ち主である。専制に対抗する矜持を、作家としての活動能力が衰えたとしても、ただ喚き散らすようなことで汚したくないと強調している。ソロツルンでの講演は、ヴォルテールの言葉を引用し、締めくくられる。

»*Man endet notwendigerweise damit, seinen Garten zu bestellen; alles übrige, mit Ausnahme der Freundschaft, hat wenig Bedeutung, ja, auch seinen Garten zu hegen hat wenig Bedeutung. Da habe ich vier Wörter unterstrichen: mit-Ausnahme-der-Freundschaft. Ja. Mit Ausnahme der Freundschaft! Ich danke Euch.* ¹⁶⁴

「人は、必要ならば自分の庭を耕すことを止めます；残されたもので友愛という例外ほど重要なものはありません。」 私は、次の語にアンダーラインを引きました：友愛（Freundschaft）という例外に。では、友愛という例外を以って！ご清聴に感謝いたします。

ヴォルテールは『カンディードまたは最善説』において、ライプニッツの主張する最善説を揶揄し批判したのちに、それに代わるものとして「庭の教訓」を残した。¹⁶⁵ 主人公のカンディードは、自分自身ではなに一つ判断しないように師パングロスから教えられ、人間的悪（野蛮、不信仰、不寛容等）と自然的悪（地震、火災等）のはびこる世界に翻弄されながらも生き延びる。最後に彼は、「原因のない結果はなく、[...] あらゆる世界の中でこの世界が最善である」¹⁶⁶ と最善説を説く師に逆らい、「しかし、ぼくたちの庭を耕さなくてはなりません」¹⁶⁷ と述べ、自分自身の決断によって啓蒙への意思を決然と表明する。「庭の教訓」は近代の啓蒙の比喩である。自分の庭を耕すことを止めることは、啓蒙に中断をかけることの隠喩である。フリッシュは、人間の偶像を創り出す現代の啓蒙の終焉を宣告し、それに代わるものとして友愛が啓蒙に替わる倫理価値であると結論付けている。そのうえで、友愛が例外的であることを強調し、その困難さを認めながら、なおフリッシュは、その例外に希望を託している。

ソロツルンでの講演は1985年5月8日であるが、そのおよそ一年半後の1986年10月10日付けの週間総合紙 *WOCHENZEITUNG* には、この講演をめぐって編集者との対談記事が掲載される。¹⁶⁸ 対談の冒頭で、ソロツルンでの講演は啓蒙にアンガージュしてきた作家の総決算であると云えるのかと問われ、フリッシュは、次に来る時代では啓蒙を新た

¹⁶⁴ Ebd.

¹⁶⁵ ヴォルテール著 植田祐次訳『カンディード』岩波書店2005, 421.

¹⁶⁶ 同上 264

¹⁶⁷ 同上 459

¹⁶⁸ *WOCHENZEITUNG*, Nr.41 10.10.1986, 25-27. 対談者：Patrik Landort, Andreas Simmen
再掲 Stässle, Thomas *Wie Sie mir auf den Leib rücken* Suhrkamp Verlag 2017, 187-205.

にどう定義するのかが重要であるとして、自分がたどってきた啓蒙批判の道を振り返り総括しようとはしない。フリッシュは、新たな啓蒙の構築のために現代の啓蒙の変質を告白し、告発し続ける覚悟を述べている。そして、この啓蒙の告白にとって、文学作品こそが講演やインタビューにもまして重要であると明言している。¹⁶⁹

6.4. 友愛と愛

フリッシュの友愛 (Freundschaft) の概念については、オラフ・ベルヴァルト Olaf Berwald (2011, 131-39)¹⁷⁰ がアリストテレスの友愛 (philia)¹⁷¹ と同義であることを論じている。その中でベルヴァルトは、フリッシュの『日記 1946-49』の中で述べられている愛 (Liebe) の本質が友愛 (Freundschaft) に通じているとしているが、啓蒙との関係についての考察はない。愛と、啓蒙のアンチテーゼとしての偶像の関係について、フリッシュは、戦後間のない 1946 年に次のように述べている。

[...] Die Liebe befreit es aus jeglichem Bildnis. Das ist das Erregende, das Abenteuerliche, das eigentlich Spannende, daß wir mit den Menschen, die wir lieben, nicht fertigwerden: weil wir sie lieben; solange wir sie lieben.¹⁷²

[...] 愛は、隣人や愛する者 (訳者挿入) をあらゆる偶像から解放する。愛する人との関係に尽きることがないということは、刺激的、冒険的で、非常に興味深いことである；その人を愛している限りであるが。

フリッシュは、現代の啓蒙が創り出す偶像の桎梏を解放できるのは愛であることを、作家活動の初期段階から確信していた。フリッシュが語った「愛 (Liebe)」は、ソロツルンの講演の最後に強調された「友愛 (Freundschaft)」の原点であり、精神的価値観を共有する者同志の友情である。フリッシュは、偶像化に堕ちり変質した現代の啓蒙を否定した後に残る友愛 (Freundschaft) を例外的に価値あるものとしたが、それは友愛 (Freundschaft) の核心にある愛 (Liebe) が、あらゆる偶像からの解放を可能とするとの信念からである。

¹⁶⁹ Ebd., 199

¹⁷⁰ Berwald, Olaf *Freundschaft. Zur Praxis eines Begriffs bei Frisch und Aristoteles in Germanica*, 48, 2011, 131-39.

¹⁷¹ 廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店 1998, 1.

「[友愛(フィリア philia)] 精神的価値観を共有する者同志の友情で、相手に善を欲する無私な性質をもつ。なぜならアリストテレスによると友愛は、相手を善美なる自己の分有として愛する(自己愛)からである。」

¹⁷² Frisch, Max *Du sollst dir kein Bildnis machen in GWK II*, 369.

おわりに

本研究では、フリッシュの文学作品における啓蒙批判の文学的表象について考察したが、作品に描かれている啓蒙批判の諸相は、愛または友愛の諸相と常に対となっている。例えば『万里の長城』においては、宮廷の廃墟である舞台の際で見守るのは、友情で結ばれた始皇帝の皇女と現代人である。廃墟の中でロミオとジュリエットの愛は、啓蒙的人間の偶像によって齎される世界の破滅を予言する。『ホモ・ファバー』の主人公は、死を迎える最後の瞬間まで、かつての妻であったハンナとともに、時間意識の欠如を人間一般の過ちとして理解し合おうとしている。そこにあるのは、夫婦の愛憎を超えた精神的価値観を共有しようとする友愛 (**Freundschaft**) である。主人公は、死の直前にその友情に気づき、信奉してきた科学技術の偶像からの解放に気付かされる。『人間は完新世に生まれた』では、主人公と語り手はともに啓蒙的な人間であり、啓蒙的理性に関して互いに共感している。しかしその共感は友情によるものではなく、主人公の死の瞬間に消滅せざるを得なくなる。語り手は、主人公の死を人間的な情を交えず、啓蒙的な論理の破綻として描き、愛や友情のまなざしは欠如している。『青髭』の真の語り手は、主人公を二度にわたって告発する検事である。主人公の臨終に立ち会う検事はそれまで法廷での検事ではなく、人間として主人公に共感する友人となっている。この友情関係が早期に成立していたなら、主人公は、自らの偶像に自らを生贄として捧げることはなかった。フリッシュは、ソロツルンの講演において明確に啓蒙の偶像化を批判し、その克服を友愛 (**Freundschaft**) に託した。フリッシュの啓蒙批判の背後には、未来への希望を読み取ることができる。それは、愛によって人間の偶像化から解放された新たな啓蒙である。

参考文献

- 準拠テキスト(GW: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge* Suhrkamp Verlag 1986)
Frisch, Max; „Am Ende der Aufklärung steht das Goldene Kalb“ in *Du: Zeitschrift der Kultur* 51 1991
Frisch, Max; *Blaubart*. GWVII
Frisch, Max; *Die Chinesische Mauer*. GW II
Frisch, Max; *Homo faber*. GWIV
Frisch, Max; *Der Mensch erscheint im Holozän*. GWVII
Frisch, Max; *Nun singen sie wieder*. GW II
Frisch, Max; *Zur chinesischen Mauer*. GW II
フリッシュ、マックス著 中野孝次訳『アテネに死す』白水社、1991

一次文献

- Brüder Grimm; *Kinder- und Hausmärchen 2* Philip Reclam jun. 1982
- Frisch, Max; *Andorra* GWVI
- Frisch, Max; „Du sollst dir kein Bildnis machen“ GW II
- Frisch, Max; *Forderungen des Tages. Portraits, Skizzen, Reden 1943–1982.*
Suhrkamp Verlag, 1983
- Frisch, Max; *Entwürfe zu einem dritten Tagebuch* Suhrkamp Verlag. 2011
- Frisch, Max; “Mimische Prtitur” GW I
- Frisch, Max; *Montauk.* GWVI
- Frisch, Max; *Schwarzes Quadrat.* Suhrkamp Verlag. 2008.
- Frisch, Max; *Stiller.* GWIII
- Frisch, Max; “Tagebuch1946-1949 Autobiographie” In *Romane, Erzählungen, Tagebuch.* Suhrkamp Verlag, 2008
- Frisch, Max; *Wo spielt unser Stück.* GW II
- Frisch, Max; *Öffentlichkeit als Partner.* Suhrkamp Verlag, 1970
- Kant, Immanuel; “Beantwortung der Frage : Was ist Aufklärung” in *Kants Werke Band VIII.* Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968
- ヴォルテール著 植田祐次訳; 『カンディード』 岩波書店 2005
- カント著、篠田英雄訳; 『啓蒙とは何か』 岩波書店 1950
- デュレンマット、フリドリヒ著山本佳樹訳; 『物理学者たち』 In 『デュレンマット戯曲集 第二巻』 鳥影社 2013
- バフチン,ミハイル著 伊東一郎訳; 『小説のことば』 平凡社 1996
- バフチン,ミハイル著 伊東一郎他訳; 『小説における時間と時空間の諸形式—一九三〇年以降の小説のジャンル論』 水声社 2001
- ハンプルガー,ケーテ著 植和田光晴訳; 『文学の論理』 松籟社 1986
- ペロー、シャルル著 新倉朗子訳; 『完訳ペロー童話集』 岩波書店 1982
- ホルクハイマー、アドルノ著 徳永恂訳; 『啓蒙の弁証法』 岩波文庫 2007
- マルクス、カール著 伊藤新一 北条元一訳; 『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』 岩波文庫 1954
- ムア,G.E. 著 泉谷周三郎訳; 『倫理学原理』 三和書籍 2010
- 聖書 『出エジプト記』 31 章

二次文献

- Adams,Hazard; “Titles, Titling, and Entitlement to” In *The Journal of Aesthetics and Art Criticism Vol. 46, No.1.* 1987
- Arnold, Heinz Ludwig; “Gescheitete Existenzen? Zu *Montauk* und *Blauart*” In

TEXT+KRITIK 47/48. 1987

- Bechstein, Ludwig; *Saemtliche Maerchen* Anaconda Verlag 2013
- Best, F.Otto; *Handbuch literarischer Fachbegriffe* Fischer Taschenbuch Verlag, 1972
- Burdorf, Dieter; *Metzler Lexikon Literatur* J. B. Metzler Verlag Stuttgart 2007
- Butler, Michael; "Max Frisch's Man in the Holocene: An Interpretation" *World Literature Today volume 60*, University of Oklahoma 1986
- Dascalu-Romitan, Ana-Maria; „Methoden und Verfahren der Fremddarstellung in Reisebericht“ In *Temeswarer Beiträge zur Germanistik* 12. Temeswar 2015
- N.N; „Der Ingenieur“ In *Der Spiegel* (Hamburg) 25.Dezember, 1957
- N.N; „Falsch abphotographiert“ In *DIE ZEIT* Nr.46/1984
- Goetz,Rainald Maria; „Alter ohne Revolte: Max Frischs neue Erzählung“ In *Merkur:Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken Heft 76*, Stuttgart 1979.
- Haneborger, Lübbert; *Max Frisch Das Prosa Spätwerk* Norderstedt 2008.
- Kaiser, Gerhard; „Endspiel in Tessin“ In *Schweizer Monatsheft für Politik, Wirtschaft, Kultur* 12/1 1982/83
- Knapp, Mona; "Tempus Fugit Irreparabile: The Use of Existential versus Chronological Time in Frisch's Homo Faber" In *World Literature Today*, Vol.60, No.4, University of Oklahoma 1986
- Martinez, Matias; *Erzählen – Ein interdisziplinäres Handbuch*. J.B.Metzler Verlag, Stuttgart, 2017
- Müller, Claudia; „Ich habe viele Namen“ *Polyphonie und Dialogizität im autobiographischen Spätwerk Max Frischs und Friedrich Dürrenmatts* Wilhelm Fink Verlag, München 2009
- Pütz, Peter; „Das Übliche und das Plötzliche Über Technik und Zufall im Homo faber“ in *max frisch aspekte des prosawerks* Verlag Peter Lang AG. Bern 1978
- Reinhard Baumgarth; „Kahlschlag“ in *Der Spiegel* 16/1982
- Rusterholz, Peter Solbach, Andreas; *Schweizer Literaturgeschichte*. Verlag J.B.Metzler 2007.
- Sabine Schneider; „Stille Katastrophen *Der Mensch erscheint im Holozän*“ In *Man will werden, nicht gewesen. Zur Aktualität Max Frischs*. Zürich 2012.
- Schwieren, Alexander; „Alterswerk als Schicksal: Max Frisch, Friedrike Mayröcker und die Poeologie des Alters in der neueren Litaratur“ In *Zeitschrift für Germanistik Neue Folg*, Vol.22. 2012.
- Simmler, Franz; „Zum Verhältnis von publizistischen Gattungen und linguistischen

- Texts” In *Zeitschrift für Germanistik, Neue Folge, Vol. 3, No.2*, 1993.
- Skelton, Geoffrey David; *Man in the Holocene*. Dalkey Archive Press, 2007.
- Stobbe,Urte; „Evolution und Resignation. Zur Verbindung von Klima-,Erd-und Menschheitsgeschichte in Max Frischs *Der Mensch erscheint im Holozän*“. In *Zeitschrift für Germanistik. Vol .24, No.2*, 2014
- Strässle, Thomas; *Max Frisch »Wie Sie mir auf den Leib rücken!«*. Suhrkamp Verlag Berlin, 2017.
- Urs, Jenny; „Herrn Geisers Naturkatastrophe.“ In *DER SPIEGEL 19*, 1979.
- Wilmore, S. J; “The Role of Titles in Identifying Literary Works” In *The Journal of Aesthetics and Art Criticism Vol.45, No.4*. 1987
- 小谷裕幸; 「老いることの罪—マックス・フリッシュの小説『青ひげ』試論」 In 『鹿児島大学文科報告第3分冊』 1985.
- 上村邦彦; 「マルクスにおける歴史認識の方法—『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、『関西学院大学経済論集、47(5)』 1997
- 川合正紀; 「マックス・フリッシュ『ホモ・ファーバー』考」 慶応義塾大学文学部卒業論文 2015 <http://kodayoshiki.sakura.ne.jp/pdf/kawai20160909.pdf>
- 小泉仰; 『倫理学』 慶応義塾大学出版会株式会社 2012
- 岡本亮子; 『マックス・フリッシュの小説世界』 芸林書房 2000
- 中村靖子; 「証拠不十分につき、無罪」—マックス・フリッシュ『青髭』における「妻殺しの夢のあと—」 In 『名古屋大学文学部研究論集(文学60) 51-84』 2014
- 増本浩子; 「ホモ・ファーベルとオディプス神話」 In 『姫路獨協大学外国学部紀要』 2003
- 三瓶裕史; 「体験話法」『ドイツ語を考える』 三修社 2008
- 三島憲一; 『戦後ドイツ』 岩波新書 1991
- 宮下啓三; 『近代ドイツ演劇』 慶応大学出版会 1973
- 山中博心; 「Max Frisch "Blaubart" - 「私」の中の世界の中の「私」の中の...」 In 『福岡大学人文論叢 26(3)』 1994
- 吉田正彦; 「ドイツの口承文学における異教的(ゲルマン的)要素」 In 『明治大学人文科学研究所 年報』 1990

信州大学大学院人文科学研究科 院生会組織

院生会長(1名)

院生会統括(院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理)

会計(1名)

院生会費管理(会費徴収、物品購入、収支報告)

シンポジウム委員(1～2名)

シンポジウム運営(シンポジウム連絡、原稿集作成・配布)

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員(1名)

『人文科学研究』編集(雑誌作成、投稿受付)

- 任期はそれぞれ一年間(4月～3月)とする。
- 役員は基本的に M2 から選出する。
- 次年度役員を選出は適宜行う。
- 役員選出は立候補及び推薦による。
- 各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。ただし、会長と会計は兼務できない。
- 休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情を有する場合、各役員の交代を認める。
- 役員構成及び、各役員の業務内容は以上の通りであるが、各年度の状況に合わせた変更は認められる。

平成 31 年度 信州大学大学院人文科学研究科 院生会活動記録

平成 31 年度院生会役員

院生会長 田中大暉

会計 中畑ひかり

書記 任意

シンポジウム委員 藤森真由弥、長谷川敦

広報 任意

雑誌編集委員 茂原奈保子

.....

7 月 12 日 第一回院生総会 【 於 院生室 】

議題1. 院生会組織説明

議題2. 大学院シンポジウムの説明

- ・予稿集作成要領と、シンポジウム日程の確認

議題3. 前年度会計報告

- ・同年度予算案

議題4. その他

- ・卒業する先輩に記念品を贈呈する慣習を作りたい

議題5. 大学院委員会への質問・要望

- ・院生会 PC の新規購入を要望

.....

9 月 25 日 信州大学人文科学研究科大学院前期シンポジウム 【 於 人文ホール 】

プログラム

▽9:00-9:10 研究科長挨拶、投票方法説明、第一発表者準備

▼9:10-9:40 中畑 ひかり 中世の役行者伝承研究—蔵王権現感得譚—

▼9:45-10:15 藤森 真由弥 英語のV+N句に関する研究

▼10:20-10:50 川合 正紀 マックス・フリッシュ研究—『青髭』に見る啓蒙の偶像化批判—

▼11:00-12:00 大学院説明会 【人間文化論分野, 心理学分野(松本地区)】

▼12:00-13:30 昼食、院生研究紹介、投票、優秀発表表彰、大学院委員会委員長挨拶

.....

2月12日 信州大学人文科学研究科大学院後期シンポジウム【於 人文ホール】

プログラム

▽9:30-9:40 研究科長挨拶、投票方法説明

▼9:40-10:10 安藤 行宥 格闘技における防御とコミュニケーション—空手における構えの違いと競技化の思想

▼10:15-10:45 何 珊珊 楊廷筠の人間観について

▼10:50-11:20 百瀬 瑠美 シュリーターラの経量部説とサンガバドラの三世実有説

▼11:25-11:55 中畑 ひかり 中世における役行者伝承の研究

▼12:00-12:30 藤森 真由弥 英語のV+N句に関する研究

▽12:30-14:00 昼食、院生研究紹介、投票、優秀発表表彰、大学院委員会委員長挨拶

『人文科学研究』投稿規定

原稿の種類

1. 修士論文要旨
2. 後期シンポジウムにおける発表原稿
3. 寄稿論文（修士論文を含む）

投稿資格

信州大学人文科学研究科に在籍するもの、もしくは過去に在籍したことのある者。ただし上記1と2については、当該年度に同研究科に修士論文を提出した者に限る。

原稿審査

それぞれ審査委員会にて行う。審査委員会には院生会員のほか、必要に応じて教員も加わる。

分量

それぞれ無制限

（提出形態の詳細については、編集委員会に問い合わせること）

提出先

信州大学人文科学研究科 院生会『人文科学研究』編集委員

連絡先：jb-in@shinshu-u.ac.jp

人文科学研究 第 17 号

令和 3 年 3 月 31 日 発行

編集者 信州大学人文科学研究科院生会

発行者 信州大学人文科学研究科

〒390-8621 松本市旭 3 丁目 1 番 1 号 信州大学人文科学研究科内
